

博士論文

論文題目 『楞伽經』におけるアーラヤ識の研究

氏 名 鄭 有植

目次

1 序論	
1.1 『楞伽經』について	1
1.1.1 『楞伽經』の概観	1
1.1.2 『楞伽經』の構成と内容	1
1.1.3 一次資料と訳註研究	3
1.2 先行研究概観と本研究の課題及び構成	7
1.2.1 本研究の主題に関する先行研究の概観	7
1.2.2 本研究の課題	9
1.2.3 考察の手順と本論文の構成	9
2 本論	
2.1 「身体・享受(物)・場所」とアーラヤ識	11
2.1.1 はじめに	11
2.1.2 『楞伽經』における「身体・享受(物)・場所」として顕現するもの	11
2.1.3 初期唯識文献における「身体・享受(物)・場所」の用例	13
2.1.4 「身体・享受(物)・場所」の意味とアーラヤ識の捉え方	23
2.1.5 小結	29
2.2 如来蔵とアーラヤ識	31
2.2.1 はじめに	31
2.2.2 『楞伽經』における如来蔵と同一視されるアーラヤ識	31
2.2.3 『勝鬘經』の説く「無明住地」	34
2.2.4 「無明住地」に関する『楞伽經』の理解	35
2.2.5 小結	38
2.3 「分別事識」とアーラヤ識	39
2.3.1 はじめに	39
2.3.2 『楞伽經』における八識説	39
2.3.3 転識とアーラヤ識	40
2.3.4 「分別事識」とアーラヤ識の関連性	50
2.3.5 小結	56
3 結論	58
4 テキスト・訳註研究	
4.0 凡例	63

4.1	The <i>Ṣaṭtriṃśatsāhasrasarvadharmasamuccaya</i> of the <i>Laṅkāvatārasūtra</i>	64
4.2	『楞伽經』第二章「一切法の集成」チベット語訳テキスト.....	82
4.3	『楞伽經』第二章「一切法の集成」漢訳テキスト.....	94
4.4	『楞伽經』第二章「一切法の集成」和訳.....	108

5 略号・参考文献

1 序論

1.1 『楞伽經』について

1.1.1 『楞伽經』の概観

『楞伽經』は、世親との前後関係も含め成立時期についてはまだ決着がついていないが、漢訳年代から五世紀ごろの成立と推定される中期大乘經典である。周知の通り、内容の特徴としては、「大乘仏教の多種の重要な教義を統一なく雑然とかきとめた覚え書きのような經典である」¹といわれる位、唯識思想や空の思想から、如来蔵思想、他学派の思想にいたるまで豊富な教説を説いている点が挙げられる。そのため、唯識派はもちろん中観派の論書などにも経証として引用されることがある經典である。また、經典自ら宣言しているように、五法、三性、八識、二無我といった瑜伽行唯識思想を中心に教説をまとめようとするところにもう一つの特徴がある。教説においては、如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述が見られるのが一番の特徴である。元来、別の思想だった如来蔵とアーラヤ識が『楞伽經』において初めて融合されており、以後『大乘起信論』にも影響を与えている。『楞伽經』はインドだけでなく、中国の禪宗に大きな影響を与えた經典としてもよく知られている。

1.1.2 『楞伽經』の構成と内容

1.1.2.1 『楞伽經』の構成

『楞伽經』の構成を、章名を中心に簡単にまとめると以下のようになる。

《諸本分品対照表》²

梵本（南條本）	（求） ³	（菩） ⁴	（実） ⁵
---------	------------------	------------------	------------------

¹ 安井 [1976: p.1] 参照。

² 高崎 [1980: pp.408-409] からの引用。ただ、もとの対照表に宋訳・魏訳・唐訳になっているところをそれぞれ（求）（菩）（実）に直した。因みに、対照表の作成の仕方は南條 [1923: pp.12-13] もほぼ同じである。

³ 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』。

⁴ 菩提留支訳『入楞伽經』。

⁵ 実叉難陀訳『大乘入楞伽經』。

I Rāvaṇādhyeṣanā	一切佛語心	請佛	羅婆那王勸請
(序分)	(序分)	(序分)	(序分)
(勸請)	欠	(勸請)	(勸請)
II Śaṭtriṃśatsāhasarasarvadharmasamuccaya		問答	集一切法
		集一切佛法	
III Anityatā		佛心	無常
		盧伽耶陀	
		涅槃	
		法身	
		無常	
IV Abhisamaya		入道	現証
V Tathāgatanityānityaprasaṅga		問如来常無常	如来常無常
VI Kṣaṇika		佛性	剎那
		五法門	
		恒河沙	
		剎那	
VII Nairmāṇika		化	變化
VIII Māṃsabhakṣaṇa		遮食肉	断食肉
IX Dhāraṇī	欠	陀羅尼	陀羅尼
X Sagāthaka	欠	総	偈頌

以上、サンスクリット原典は、南條本に基づけば全部で十章からなっている⁶。これに対して求那跋陀羅訳は章を分けていない。さらに、梵本の第一章の（勸請）の部分と第九章と第十章を欠いているので、現行の梵本とは違う写本に基づいた訳と見なされる。菩提留支訳の場合は内容の相違はなく、より細部まで章立てをしているのみであり、実叉難陀訳は現行の梵本と同じく十章からなっている。上記の対象表には示されていないが、チベット語訳の場合は第六章までは梵本と変わらないが、梵本の第七章と第八章に当たるものを合わせて第七「断食肉品」とし、梵本の第九章と第十章に当たるものを、章名を付けないまま第七章の後に含んでいる⁷。

1.1.2.1 『楞伽經』の内容

次に、各章の内容は以下の通りである⁸。

⁶ 以下において『楞伽經』の章立ては南條本に側って十章とする。章名は、第一章「ラーヴァナ王の勸請」と第二章「三万六千の一切法の集成」以外は求那跋陀羅訳の章名をそのまま用いる。

⁷ P Vol.29, (1)–(2).

⁸ 因みに、『楞伽經』の特徴でもあるが、『楞伽經』は組織的な内容構成を持たないので、内容の概観といってもいくつかの主題を列挙するに止まることになる。

- 第一章：経の説時・説処・会衆などが説かれており、ラーヴァナ王が世尊に法門を勧請する場面が描写されている。
- 第二章：世尊とマハーマティの「百八問答」⁹から始まる。主に八識・三性・二無我・五法など、いわゆる『楞伽経』の中心的な教説を説いている。
- 第三章：意生身・転変・不生・涅槃・他学派の教え・無常などが説かれている。『唯識三十頌』の偈頌と類似した表現が出てくるので、『楞伽経』と世親との関連性を研究するとき常に注目される章である¹⁰。
- 第四章：菩薩の地の次第について詳細に説明している。
- 第五章：如来の常・無常について説かれている。
- 第六章：五法・刹那滅などが説かれており、初めて如来蔵とアーラヤ識を同一視する教説が出てくる重要な章である。
- 第七章：如来の阿羅漢授記、一字不説、識の刹那相続、金剛手の随待、本際不可知、如来の過失などについての質疑が収められている。一種の総括と考えられる章である。
- 第八章：肉食禁止の理由が説かれている。
- 第九章：陀羅尼
- 第十章：偈頌のみで構成されている章である。

1.1.3 一次資料と訳註研究

1.1.3.1 サンスクリット校訂テキスト

『楞伽経』関連の校訂テキストは以下の通りである。

- ① *Lankavatara-Sutra : for the first time edited by Sri Sarat Chandra Das and Satis Chandra Acharya Vidyabhusana*, Darjeeling, Calcutta : Buddhist Text Society of India, 1900.
- ② *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Bunyiu Nanjio ed., Bibliotheca Otaniensis Vol.1, Kyoto : Otani University Press, 1923.
- ③ *Saddharmalaṅkāvatārasūtra*, P.L.Vaidya ed., Buddhist Sanskrit Texts No.3, Darbhanga : The Mithila Institute, 1963.
- ④ *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-sūtra Kṣaṇika-Parivarta*, Jikido Takasaki ed., Tokyo : Dept. of Indian and Buddhist Studies, the University of Tokyo, 1981.

⁹ 泉 [1930] 参照。

¹⁰ 舟橋 [1976: p.371] , Schmithausen [1992] 参照。

- ⑤ *The Laṅkāvatāra-Ratna-Sūtram Sarva-Buddha-Pravacana-Hṛdayam*, Gishin Tokiwa ed, Osaka, 2003. (『楞伽宝経四卷本の研究』梵英日漢4冊一部, 梵文)

①は最初の校訂本である。全体にわたるものではなく、第一章から第三章の始めの部分までを扱う。校訂に当たって、チベット語訳、漢訳などを参照した形跡は見当たらない。

②は『楞伽経』全体の校訂本としては最初のものである。写本四本、その他漢訳、チベット語訳を参照している¹¹。なお、注記で①の DAS 本の読みを挙げている。全体を扱った校訂本としては現時点では最良のものと言える。

③は一応『楞伽経』全体の校訂本であるが、②の南條本の読みとほぼ一致しているので、再校訂本とは言えない。しかしながら、校訂者が提示する文節は、参考に値する場合もある¹²。

④は高崎直道博士による計 17 本の写本を参照校合した緻密な校訂本である。今後他の章を校訂する際にも参照すべき研究成果である。ただし、第六章「刹那品」のみの校訂本である。

- ⑤は求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』に基づいた還元梵本である。

1.1.3.2 チベット語訳と漢訳

『楞伽経』のチベット語訳は *'Phags pa lang kar gshegs pa'i theg pa chen po'i mdo* (D No.107, P No.775) としてカギユルに収められている。

一方、漢訳には以下の三点がある¹³。

- ① 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』四卷, 大正蔵 16, No.670. (宋訳, 四卷本, 443年)
- ② 菩提留支訳『入楞伽経』十卷, 大正蔵 16, No.671. (魏訳, 十卷本, 513年) : 和訳, 国訳一切経経集部七, 常盤大定訳, 1934.
- ③ 実叉難陀訳『大乘入楞伽経』七卷, 大正蔵 16, No.672. (唐訳, 七卷本, 700-704年) : 和訳. 国訳大蔵経 第四卷, 山上曹源訳, 1917.

¹¹ チベット語訳を参照するにあたっては荻原博士の助力を得たと記されている。南條 [1923: p.ii] 参照。

¹² 菅沼 [1972: p.151] 参照。

¹³ 経録類の伝えによれば、曇無讖訳『楞伽経』四卷があったとされるが、散失している。高崎 [1980: p.15] 参照。

①の求那跋陀羅訳は、最も訳出年代が古く、現存梵本との構成の違いが見られる。直訳に近い訳し方をしており、早くから注目されていた¹⁴。②の菩提留支訳と③の実叉難陀訳は現行の校訂梵本と一致する読みを提示する場合が多い。

1.1.3.3 現代語訳註研究

南條本『楞伽經』のサンスクリット原典に基づく訳註研究としては南條文雄・泉芳璟 [1927] が最初の和訳である。ただし訳文には注記がない¹⁵。

その後、鈴木大拙博士は、南條本の英訳である“*The Lankavatara Sutra*”，文献研究である“*Studies in the Lankavatara Sutra*”，そして索引である“*An Index to the Lankavatara Sutra*”を著した。現時点でもその研究と索引は資するところが多い。一方、この訳註研究については幾つかの問題点を指摘している。竹村 [1978] によれば、鈴木 [1932] はチベット語訳を参考にしていない弱点を抱えており、翻訳に博士自身の解釈を入れすぎた訳註研究になっているといわれている¹⁶。しかし久保田 [1984] が指摘しているように、鈴木博士の方法論はその後の『楞伽經』研究史においても受け継がれているので、後代の研究に及ぼした影響は認めざるを得ないであろう¹⁷。

次に菅沼「1967b」 [1969] [1977b-1981a] は、第二章から第七章までの和訳であるが、第二章から第七章は『楞伽經』の教説の核心的な部分とも言えるので、本論文で扱う識説の考察にも欠かせない訳註研究である。漢訳とチベット語訳はもちろんのこと、それに加えて智吉祥賢の『聖入楞伽經註』（以下、『楞伽經註』と略起）も必要に応じて参考に使っている。

次に神谷 [1972-1979] は、第一章と第二章の和訳である。三種の漢訳とチベット語訳を用いている。

次に安井 [1976] は全訳ではあるが、注記を全く含んでない訳文だけの翻訳である。なお、最後に梵文訂正を付しているが、根拠が示されていない。しかし著者の序言によれば、チベット語訳と『楞伽經註』も参考に使っていると示している¹⁸。

続いて高崎 [1980] は求那跋陀羅訳の解説を目的とした著作ではあるが、三種の漢訳及びチベット語訳と『楞伽經註』をも用いている本格的な訳註研究である。量的に

¹⁴ 詳しいことは高崎 [1980: pp.13-18] [1981a: p.(4)] を参照。

¹⁵ 序によれば、南條文雄博士の訳と泉芳璟氏の訳が半分づつとなっている。南條文雄・泉芳璟 [1927] 参照。

¹⁶ 竹村 [1978: p.169] 参照。

¹⁷ 久保田 [1984: p.68] 参照。

¹⁸ 安井 [1976: 序言 p.5] 参照。おそらく南條本の異読を参考にしながらチベット語訳と『楞伽經註』を利用して訂正したと推定できる。

は求那跋陀羅訳の約三分の一を扱っているが、本論文の対象としている『楞伽經』第二章の識説を説く部分も扱っている。さらに序論では『楞伽經』の組織や全体の内容、成立上の問題、サンスクリット原典の特徴など様々な解説がなされており、『楞伽經』の理解に資するところが多い。

最後に常盤 [1994] は、第十章を除いた全九章に対する和訳である。漢訳とチベット語訳を用いている。

1.2 先行研究概観と本研究の課題及び構成

1.2.1 本研究の主題に関係する先行研究の概観

ここでは、『楞伽經』におけるアーラヤ識という本書の主題に関連する先行研究をまとめておく。

1.2.1.1 唯識説に関する研究

まず唯識説を中心とする研究は次のようである。

安井 [1972] は、『楞伽經』の識説は術語や説明の内容、学説の構成から見て『解深密經』を継承する瑜伽行派の系統とは異なる特徴的な識説を主張しているとし、『楞伽經』の唯心説は「無相宗」の性格が強い実践的な教説であると結論付ける。

次に高崎 [1976a] は、『楞伽經』の唯識説の独自性や経典の成立時期の問題、世親との関係などの手がかりとして「deha-bhoga-pratiṣṭhābham vijñānam」の用例の分析を通して、『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』とも比較しながら詳細に論じている。その結果として、『楞伽經』が既存の瑜伽行派の用語を採用してはいるが、その解釈において異なるものがあると指摘し、『楞伽經』が唯識説を導入する際に独自の恣意的な解釈を施しているとしても、その唯識説が『楞伽經』の創説であり、瑜伽行派に影響を与えたとは考えられないと結論付けている。そして最後に、これだけで、『楞伽經』の唯識説を瑜伽行派の唯識説の中で位置付けることは無理であるとしている。

次に高崎 [1981c] は、従来『楞伽經』には説かれていないとされるマナス（染汚意）の性格に関して検討している¹⁹。高崎 [1981c] によれば、『楞伽經』においてマナスが想定されているのは確かな事実であるが、『楞伽經』のマナスは瑜伽行派からの借物なので自らの明確なイメージは持っていないとする。考察に当たって「manyānā」という語を手がかりとしているが、マナスに関する新しい解釈が見当たらないので、やはり『楞伽經』の唯識説は自己の独自の発展ではなく、瑜伽行派の学説の借用であることが判ると結論付けている。

このように『楞伽經』のマナスが不明瞭であるとする見解について久保田 [1991] は疑義を提起し、「道化」概念を基にマナスを検討すれば明瞭に姿が見えてくると論じている。特に第六意識に対する教説として理解している用例を取り上げ、実はマナスに対する教説として理解すべき箇所であると論証し、それに基づいて『楞伽經』のマナスの性格を規定している。因みに、「道化」という概念を導入してマナスを理解しようとする試みは久保田 [1990] に詳しく紹介されている。

¹⁹ 勝又 [1961: p.660] によれば、『楞伽經』は染汚意別体の考えが生じていないので、染汚意が独立の地位を占めていないと述べている。

1.2.1.2 如来蔵思想とアーラヤ識に関する研究

如来蔵との関係を中心に識説を考察する研究をまとめると次のようである。

菅沼 [1974] [1976] は識説と関連付けて『楞伽經』の如来蔵思想を論じている。後者は前者を詳論したものである。菅沼 [1976] では、まず如来蔵とアーラヤ識を同一視する教説の例文を取り上げ、漢訳とチベット語訳を用いて検討した後、『楞伽經』の識説を論じている。

次に清水 [1976ab] は、第六章「刹那品」の如来蔵説を中心に論じている。この研究では、如来蔵思想が中心となって、それにアーラヤ識を導入したのが、如来蔵とアーラヤ識を同一視する教説であると結論付けている。

次に久保田 [1989a] は、アーラヤ識と如来蔵が統合される際の境界概念として「不滅」「輪廻の主体」「(本性)清浄」を取り上げ、「不滅」「輪廻の主体」の概念には微妙な問題があるが、「(本性)清浄」という点でのみは両者が完全に重なり合うものとなり得たとしている。そして、その際のさらなる接合概念は両者が共に「心」であるということであるとする。

1.2.1.3 唯心に関する研究

唯心と関連する研究を概観する。

まず菅沼 [1966] は、直接的には唯心でなく五法説を扱っているが、唯心と深い関係のある自内聖智の考察を通じて『楞伽經』の五法説の意味を探っている。その結論によれば、五法説は妄分別から自内聖智へのすじみちを示すことに重点が置かれている。さらに五法・三性・八識・二無我という教説で、すべての大乘の教説が撰せられるというのではなく、五法・三性・八識・二無我という教説のそれぞれ一つ一つが大乘の教法をその中に撰しているという意味に解することができると説明している。

次に菅沼 [1968b] は、自内聖智を強調する点が『楞伽經』の特徴であり、その自内聖智こそが唯心を意味しているとする。さらに自心所現から唯心へのすじみちが、妄分別から自内聖智へのすじみちを示している『楞伽經』の五法説と意図を同じくしていると結論付ける。

次に菅沼 [1977a] は、自心所現やアーラヤ識、唯心と関連する用例を拾って『楞伽經』の唯心説を論じている。唯識教学の立場から考察するのではなく、『楞伽經』自体の立場での意味あいを検討しているのが特徴的である。結論によれば、『楞伽經』には唯心の用例が二つあって、世俗的唯心と勝義の唯心がそれである。自心所現から唯心の自覚へのすじみちは、やはり五法のそれと一致するとする。

最後に、神谷 [1973a] [1974b] [1975a] は、『楞伽經』における「心」の性格を自内聖智と関連して検討している一連の研究である。それによれば、『楞伽經』では

見方によって一切法は妄法にもなり、真如にもなると説いている。すなわち自内聖智をもって観察するから一切法が妄法となり、如幻となるのであり、そういう見方によって聖者には一切法が真如となるのであるとしている。一方、「心」は無始時來の戲論の習気を原因とするものであって、妄分別を生起させる方向に働くから凡夫には一切法が妄法として顕現するのであるとする。

1.2.2 本研究の課題

こうした先行研究のうち、安井 [1972] が指摘しているように、術語や説明の内容、学説の構成から見ると、『楞伽經』の識説は特徴的であると言えるであろう。

一方、高崎 [1976a] [1981c] は、他の唯識文献と比べながら、『楞伽經』の用例を詳細に分析し、『楞伽經』における唯識説の導入の恣意性を指摘している。

また、既存の瑜伽行派の用語を採用してはいるが、その解釈において異なるものがあり、このように『楞伽經』が唯識説を導入する際に独自の恣意的な解釈を施しているとしても、その唯識説が『楞伽經』の創説であり、瑜伽行派に影響を与えたとは考えられないとし、『楞伽經』の唯識説が自己の独自の発展ではなく、瑜伽行派の学説の借用と結論付けている。特に、『楞伽經』の唯識説についても、それを手がかりとして経の成立を検討するについても、さらに細部にわたって調べる必要があるという指摘は傾聴に値する。

したがって、本研究では、今まで詳細に検討されなかった『楞伽經』のアーラヤ識に焦点を当て、他の唯識文献と比較しながら、アーラヤ識に関連する『楞伽經』の用例を詳細に調べることによって、『楞伽經』におけるアーラヤ識の導入の恣意性と独自性に関して考察することを課題とする。

1.2.3 考察の手順と本論文の構成

本論文では『楞伽經』のアーラヤ識について、次の三つの論題にしぼって考察する。

2.1 「身体・享受(物)・場所」とアーラヤ識との関係

2.2 如来蔵とアーラヤ識との関係

2.3 分別事識」とアーラヤ識との関係

まず 2.1 では、『楞伽經』の中で「身体・享受(物)・場所」(deha-bhoga-pratiṣṭhā)を含む用例を取り上げ、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識がどのように関連付けられているのかを検討する。次に、初期唯識文献に散見する deha, bhoga, pratiṣṭhā に関連する用例を整理し、それぞれの文献でどのように説明しているかを考察する。その上で、初期唯識文献の用例の検討で得られた結果と比較しながら、『楞伽經』が「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識をどう捉えているかを考察する。

2.2 では、『楞伽経』を中心に、如来蔵とアーラヤ識に関連する用例を整理し、「無明住地」に言及している例を確認する。次に、『勝鬘経』において説かれている「無明住地」を検討した後、『楞伽経』の「無明住地」に関する理解を考察する。

2.3 では、アーラヤ識との類似性が予想される「分別事識」を中心に、無着・世親の唯識文献と『楞伽経』との関連性を考察することにする。まず『楞伽経』の八識説を整理した後、他の唯識文献と比較しながら「転識とアーラヤ識の関係」を検討する。その上で「分別事識とアーラヤ識の関連性」を考察する。

2 本論

2.1 「身体・享受(物)・場所」とアーラヤ識

2.1.1 はじめに

『楞伽經』には、しばしば「身体・享受(物)・場所」(deha-bhoga-pratiṣṭhā)という語句を含む記述が見られる。それらの中のいくつかはアーラヤ識に関連していることが分かる。ところで、部分的にであれ deha, bhoga, pratiṣṭhā を含む用例は『楞伽經』だけでなく、弥勒・無著・世親に帰せられる初期唯識文献(論書)及びその註釈文献、たとえば、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『撰大乘論』、『阿毘達磨雜集論』などにも見られる。

そこでまず、『楞伽經』の中で「deha-bhoga-pratiṣṭhā」を含む用例を取り上げ、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識がどのように関連付けられているのかを検討する。次に、初期唯識文献に散見する deha, bhoga, pratiṣṭhā に関連する用例を整理し、それぞれの文献でどのように説明しているかを考察する。その上で、初期唯識文献の用例の検討で得られた結果と比較しながら、『楞伽經』が「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識をどう捉えているかを考察する。

2.1.2 『楞伽經』における「身体・享受(物)・場所」として顕現するもの

『楞伽經』で「deha-bhoga-pratiṣṭhā」に言及している用例は、韻文の中 11 箇所、散文の中 7 箇所、計 18 箇所で見られる。その中でアーラヤ識と関連付けられて説かれている用例は 5 つある²⁰。まず両者の関係を最も簡潔明解に表現している散文の例から検討する。

〈例 1〉ある人々は、……「身体・享受(物)・場所」として顕現するアーラヤ識が、認識対象に対して所取・能取を離れた無相の領域であると……理解する

²⁰ 高崎 [1976a] にすべての用例が詳しく紹介されている。

であろう。彼ら菩薩摩訶薩たちは、マハーマティよ、遠からず輪廻と涅槃の平等性を得るであろう。²¹

これによれば、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するものはアーラヤ識であることが分かる。

また、この〈例 1〉を含む、直前までの散文箇所の内容をまとめる偈頌には次のように説かれている。

〈例 2〉 見られるべきものは存在しない。それぞれの心は見られるべきものから展開する。「身体・享受(物)・場所」として顕現するアーラヤ〔識〕が人々に現れる。²²

〈例 1〉と同じように「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するものはアーラヤ識²³とされている。他の箇所にもこの例と類似した偈頌があるので以下に挙げておく。

〈例 3〉 「身体・享受(物)・場所」である〔アーラヤ〕識が人々に現れる。それ故、これ（識）のはたらきが見られる。〔海が〕諸波を伴うように。²⁴

²¹ LAS p.42.4–8: ye.....⁽¹⁾ dehabhogapratīṣṭhābham ālayavijñānam viṣaye^{...1)}

grāhyagrāhakavisamyuktaṃ nirābhāsagocaram.....vibhāvaviṣyanti nacirāt te mahāmate bodhisattvā mahāsattvāḥ saṃsāranirvāṇasamatāprāptā bhaviṣyanti |

(1.....1) 写本 T4,N7: dehabhogapratīṣṭhābham ālayavijñānam viṣaye;

南條本: dehabhogapratīṣṭhāsamālayavijñānaviṣaya

(T4: Matsunami Catalogue No.329; N7: NGMPP Reel No.C13/7; 高崎 [1981a] 参照)

²² LAS p.54.9–10: dṛśyaṃ na vidyate cittaṃ cittaṃ dṛśyāt pravartate |

dehabhogapratīṣṭhābham* ālayam khyāyate nṛṇām || II.125 ||

* 写本 N1 -ābham; 南條本 -ānam.

(N1: NGMPP Reel No.E406/2; 高崎 [1981a] 参照)

Cf. LAS p.320.3–4: dṛśyaṃ na vidyate cittaṃ cittaṃ dṛśyāt pramuhyate |

dehabhogapratīṣṭhānam ālayam khyāyate nṛṇām || X.435 ||

²³ 〈例 1〉で確認されたように「アーラヤ」は「アーラヤ識」のことを指していると考えられる。

²⁴ LAS p.47.7–8: dehabhogapratīṣṭhānam vijñānam khyāyate nṛṇām |

tenāsya dṛśyate vṛttis taraṅgaiḥ saha sādrśā || II.110 ||

Cf. LAS p.315.6–7: dehabhogapratīṣṭhānam vijñānam khyāyate nṛṇām |

tenāsya dṛśyate vṛttis taraṅgaiḥ saha sādrśāḥ || X.394 ||

ここでは、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」であるアーラヤ識²⁵、と説かれている²⁶。

■要約 以上をまとめると、両者の関係は次のように要約できる。

- ・「身体・享受(物)・場所」として顕現するもの = アーラヤ識

ところで『楞伽經』には、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」のように複合語の形で全体を説明する用例はあっても、deha, bhoga, pratiṣṭhā それぞれの言葉の意味に関する詳細な説明は見当たらない。そこで次節では初期唯識文献を中心に当該用例を検討し、比較資料とする。

2.1.3 初期唯識文献における「身体・享受(物)・場所」の用例

弥勒・無著・世親に帰せられる初期唯識文献（論書）及びその註釈文献の中には、しばしば deha, bhoga, pratiṣṭhā に言及する記述が見られる。しかし、必ずしも「deha-bhoga-pratiṣṭhā」のように複合語の形で述べられているわけではない。時には deha, bhoga, pratiṣṭhā の一部のみに関して説かれることもある。以下においてそれら 3 語に関連する用例を取り上げ検討することにする。その際、次の 3 点に焦点を当て考察を進める。

- 1) まず、その用例が説かれている文脈を確認する。
- 2) 次に deha, bhoga, pratiṣṭhā という言葉の有無を整理する。文献によっては deha, bhoga, pratiṣṭhā の一部のみしか説かれていない場合がある。
- 3) 最後にそれぞれの意味に関する解釈をまとめる。

2.1.3.1 『大乘莊嚴經論』

『大乘莊嚴經論』には、「述求品」と「功德品」に deha, bhoga, pratiṣṭhā 関連の記述が見られる。以下においてそれを検討する。

²⁵ 〈例 2〉と同様、この「識」は「アーラヤ識」を指していると考えられる。

²⁶ 写本 N5 (NGMPP Reel No.D58/4) と N7 (NGMPP Reel No.C13/7) によれば、「deha-bhoga-pratiṣṭhānam」の部分が「deha-bhoga-pratiṣṭhāsam」になっている。ネーワリ文字の「bha」と「sa」は類似しているから、筆写の段階で「bha」と「sa」を書き間違えた可能性も考えられる。そうすると、ここも〈例 1〉と同じように「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するアーラヤ識、と解釈できるであろう。

■「述求品」の用例²⁷ 「述求品」は、直前で三性説の遍計所執相を説明した後、それに引き続き依他起相について次のように説いている。

所取と能取を特質とする三種・三種の顕現をもつ
虚妄分別は、実に依他〔起〕の特質である。(XI.40)

三種・三種の顕現 (ābhāsa) をもつとは、これ (虚妄分別) に三種の顕現と三種の顕現があるということである。その中で〔最初の〕三種の顕現とは依処 (pada) の顕現、対象 (artha) の顕現、そして身体 (deha) の顕現である。さらに〔二番目の〕三種の顕現とは意 (manas) ・執受 (udgraha) ・分別 (vikalpa) の顕現である。意とは常に染汚されたものである。執受とは五識身である。分別とは意識である。その中で最初の三種の顕現は所取を特質とする。二番目〔の三種の顕現〕は能取を特質とする。以上、この虚妄分別が依他〔起〕の特質である。²⁸

まず偈頌では、所取・能取として顕現する虚妄分別が依他起相であるとされているが、deha, bhoga, pratiṣṭhā の語は見られない。

それに対する散文註釈では、所取としての顕現には三つの顕現、すなわち、依処 (pada) の顕現、対象 (artha) の顕現、そして身体 (deha) の顕現があるとし、そして、能取としての顕現にも三つの顕現があり、意の顕現と執受の顕現と分別の顕現がそれであると説いている。また、意とは常に染汚されたもの、執受とは五識身、分別とは意識であると説明している。ここにも deha のみが見られ、bhoga, pratiṣṭhā は見られない。

さらに、散文註釈の中で言及されている依処、対象、身体について安慧は次のように説明している。

「依処としての顕現」とはアーラヤ識が器に似て現れることで、大地として顕現することである。「対象としての顕現」とは色ないし法という六境として顕

²⁷ 「述求品」には XI.40 の後、XI.44 にも deha, bhoga, pratiṣṭhā 関連の用例が見られるが、基本的に XI.40 と同じ内容なので本論文では省略する。詳しいことは高崎 [1976a] 参照。

²⁸ MSA pp.64.27–65.5: trividhatrividhābhāso grāhyagrāhakalakṣaṇaḥ |

abhūtaparikalpo hi paratantrasya lakṣaṇam || XI.40 ||

trividhas trividhaś cābhāso 'syeti trividhatrividhābhāsaḥ | tatra trividhābhāsaḥ padābhāso 'rthābhāso
dehābhāsaś ca | punas trividhābhāso manaudgrahavikalpābhāsaḥ | mano yat kliṣṭam sarvadā |
udgrahaḥ pañca vijñānakāyāḥ | vikalpo manovijñānam | tatra prathamatrividhābhāso grāhyalakṣaṇaḥ
| dvitīyo grāhakalakṣaṇaḥ | ity ayam abhūtaparikalpaḥ paratantrasya lakṣaṇam |

現することである。「身体としての顕現」とは眼根ないし意根という六根として
顕現することである。それゆえ『楞伽経』でも

身体と享受(物)と場所と似る心にすぎないと私は説く
と説かれている。²⁹

これによれば、「依処としての顕現」は大地であり、「対象としての顕現」は六境、
「身体としての顕現」は六根である。また、経証として『楞伽経』の偈頌を取り上げ
ており、その中に「deha-bhoga-pratiṣṭhā」が引用されている。

身体、対象、依処が deha, bhoga, pratiṣṭhā と直接関連付けられているわけではない
が、『楞伽経』の引用箇所の内容から判断して deha, bhoga, pratiṣṭhā を身体、対象、
依処と同じ内容を示しているものと理解していることが分かる。

■「功德品」の用例³⁰ それでは次に「功德品」の例を検討する。菩薩の諸功德が説
かれている「功德品」には如実遍智 (yathābhūtaparijñāna) を主題にした一連の教説が
あり、その中に次のように述べられている箇所がある。

依処 (pratiṣṭhā) ・ 享受 (bhoga) ・ 種子は束縛の因である。

所依を含め、種子を含めた心・心所はそこに束縛される。(XIX.49)

その中で、「依処という因」(pratiṣṭhānimitta) とは器世間である。「享受因
³¹」(bhoganimitta) とは色などの五境である。「種子という因」(bījanimitta)
とは、それらの種子であるアーラヤ識のことである。それら三種の因において
「所依を含めた心・心所」が束縛される。それら(依処・享受)の種子である

²⁹ SAVBh P207b5-7, D187b2-4: gnas su snang ba ni kun gzhi rnam par shes pa snod lta bur snang
ba ste | sa gzhi chen por snang ba'o || don du snang ba ni gzugs nas chos kyi bar du yul drug du
snang ba'o || lus su snang ba ni mig gi dbang po nas yid kyi dbang po'i bar du dbang po drug tu
snang ba ste | de bas na lang kar gshegs pa las kyang | lus dang longspyod gnas 'dra ba || (P:) sems
tsam du ni ngas bshad do ||* zhes gsungs so ||

* Cf. LAS p.154.6: dehabhogapraṭiṣṭhānam cittamātram vadāmy aham || III.33cd ||

Cf. LAS p.326.5: dehabhogapraṭiṣṭhābham cittamātram vadāmy aham || X.487cd ||

³⁰ 関連箇所の和訳は基本的に高崎 [1976a: p.17] の訳に基づいているが、袴谷 [2008] を
参照して筆者が適宜修正したものである。

³¹ 袴谷 [2008] では、安慧の SAVBh や無性の MSAṬ などに基づいて、bhoganimitta という
複合語は karmadhāraya ではなく tatpuruṣa として理解すべきであると論じている。

アーラヤ識なるものもまた [束縛される] . さらに, 「所依」 (āśraya) とは眼など [の五根] と知るべきである. ³²

以上, 偈頌では, pratiṣṭhā, bhoga が確認される. 散文註釈でも, 偈頌と同様 pratiṣṭhā, bhoga は見られるが, deha は見られない. 「依処」が器世間, 「享受因」が五境, 「種子」がアーラヤ識とされている.

これについて安慧は次のように解釈している.

その中で「依処という因」とは器世間のことで, 因 (nimitta) と対象 (viṣaya) とは同義であるから, 器世間はアーラヤ識によって依られる対象なので, 器世間に対し「依処という因」と言うのである. それゆえ, 『三十論』などにおいても, アーラヤ識は「依処の了別を有する」 (pratiṣṭhāvijñapti) と説かれている. 「享受」とは, 眼識から意識までの六識に対し, 享受と言う. 六識の因と対象は, 色・声・香・味・触の五境である. 「種子という因」とは, アーラヤ識に対して言う. アーラヤ識は依処や享受などの因の随眠と習気の所依たるものであるから, 「種子という因」とよばれるのであって, これら三種の束縛によって束縛されるという意味である. ³³

このように, 安慧釈も散文註釈と同じ解釈を提示している. さらにまた, 安慧釈は「享受」を六識であると明言している.

³² MSA p.169.3–8: pratiṣṭhābhogabījam hi nimittam bandhanasya hi |

sāśrayāś cittacaittās tu bandhyante 'tra sabījakāḥ || XIX.49 ||

tatra pratiṣṭhānimittam bhājanalokaḥ | bhoganimittam pañca rūpādayo viṣayāḥ | bījanimittam yat teṣāṃ bījam ālayavijñānam | yatra trividhe nimitte sāśrayāś cittacaittā badhyante | yac ca teṣāṃ bījam ālayavijñānam | āśrayāḥ punaś cakṣurādayo veditavyāḥ ||

³³ SAVBh D208b2–5, P242a2–6: de la gnas kyi mtshan ma ni snod kyi 'jig rten te | mtshan ma dang yul zhes bya ba dag don geig pas snod kyi 'jig rten ni kun gzhi rnam par shes pas dmigs par bya ba'i yul yin pa'i phyir* snod kyi 'jig rten la gnas kyi mtshan ma zhes bya'o || de'i phyir sum cu pa'i bstan bcos la sogs pa las kyang kun gzhi rnam par shes pa ni gnas rnam par rig par bshad do || longs spyod ni mig gi rnam par shes pa nas yid kyi rnam par shes pa'i bar du | rnam par shes pa drug la ni longs spyod ces bya ste | rnam par shes pa drug gi mtshan ma dang yul ni gzugs dang | sgra dang | dri dang | ro dang | reg bya ste yul lnga'o || sa bon gyi mtshan ma ni kun gzhi rnam par shes pa la bya ste | kun gzhi rnam par shes pa ni gnas dang longs spyod la sogs pa'i mtshan ma'i bag la zha ba dang | bag chags kyi gzhi byed pa'i phyir | sa bon gyi mtshan ma zhes bya ste | bcing ba dag sum** gyis bcings so shes bya ba'i don to || *P: par bya ba'i, **D: bcings de gsum

■要約 以上の考察をまとめると次のようになる。

- deha, bhoga, pratiṣṭhā が説かれている文脈
まず文脈を確認した結果、「述求品」の用例は依他起性を主題としており、「功德品」の用例は如実遍智を主題としている。
- deha, bhoga, pratiṣṭhā の確認
次に単語の有無を確認した結果、偈頌では deha を除いた bhoga と pratiṣṭhā が確認された。散文註釈と安慧釈では、複合語の形ではないが deha, pratiṣṭhā, bhoga の 3 語がすべて確認された。
- deha, bhoga, pratiṣṭhā に関する解釈
また、それぞれの単語に関する解釈を検討した結果、散文註釈には deha に関する説明はないが、bhoga は五境あるいは五識（六識）、pratiṣṭhā は器世間と説かれている。安慧釈では deha を六根、bhoga を六識、pratiṣṭhā を器世間と説明している。

2.1.3.2 『中辺分別論』

『中辺分別論』には、「相品」と「真實品」に deha, bhoga, pratiṣṭhā と関連する記述が説かれている。以下においてそれを検討する。

■「相品」の用例 「相品」は、虚妄分別の説明を終えた後、空性についての教説を展開する。以下では、十六空のうち前六空に関して説明する箇所を取り上げ、deha, bhoga, pratiṣṭhā との関連を検討する。

享受者 (bhokṭṛ) ・ 享受物 (bhojana) ・ その身体 (taddeha) ・ 場所 (pratiṣṭhā) という事物の空性 [がある] 。

また、それがあつるものによつて、ある形で、あることを目的として見られる場合、それは空である。

その中で、「享受者 (bhokṭṛ) の空性」とは諸々の内入 (ādhyātmikāyatana) に関してである。「享受物 (bhojana) の空性」とは諸々の外 [入 (bāhyāyatana) に関して] である。「その身体 (deha)」とは享受者・享受物、その二つの依持するもの (adhiṣṭhāna)、すなわち身体 (śarīra) のことである。その空性が内外の空性といわれる。「場所 (pratiṣṭhā) という事物」とは器世間のことである。広大であるからその空性は大空といわれる。³⁴

³⁴ MAVBh pp.24.22–25.6: bhokṭṛbhojanataddehapraṭiṣṭhāvastuśūnyatā |

tac ca yena yathā dṛṣṭaṃ yadarthaṃ tasya śūnyatā || I.17 ||

偈頌の中に、bhoktr, bhojana, deha, pratiṣṭhā の語が確認できる。世親釈では bhoktr を諸々の内入、bhojana を諸々の外入、deha を身体、pratiṣṭhā を器世間と解釈している。bhoga を細分して bhoktr, bhojana とする部分がこの段落の特徴的な説明である。

■「真実品」の用例 「真実品」では計 10 種の真実が説かれており、その 10 種の真実の中で最後に説明されるのが善巧真実（熟練智の真実）である。善巧真実もまた 10 種に分けられ、その最後に該当するのが有為・無為に関する教説である。それでは以下においてその内容を検討する。

仮説を伴い、原因を伴う相の故に、
また寂靜とその内容から、最後のものが説かれた。

その中で、仮説 (prajñapti) とは名の集合などである。原因 (hetu) とは種子に包含されるアーラヤ識である。相 (nimitta) とは「pratiṣṭhā-deha-bhoga」に包含される [アーラヤ識]。そして、転識 (pravṛttivijñāna) に包含される³⁵意・執取・分別をいう。この仮説を伴い、原因を伴い、相応 [の心所] を伴う相が有為であると知られるべきものである。その中で、意とは常に思惟という形態を取る。執取とは五識身である。分別とは意識である。それ (意識) が分別をするからである。³⁶

以上によれば、偈頌には該当する用例が見られないが、世親釈の中には「pratiṣṭhā-deha-bhoga」の複合語が説かれており、語順の違いはあるものの 3 語が複合語の形で見られる。

tatra bhoktrśūnyatā ādhyātmikāny āyatanāny ārabhya | bhojanaśūnyatā bāhyāni | taddehas tayor
bhoktrbhojanayor yad adhiṣṭhānam śarīraṃ tasya śūnyatādhyātmabahirdhāśūnyatety ucyate |
pratiṣṭhāvastu bhājanalokas tasya vistīrṇatvāc chūnyatā mahāśūnyatety ucyate |

³⁵ 袴谷 [2008: p.422] 参照。

³⁶ MAVBh p.48.6–14: saprajñaptisahetukāt |

nimittāt praśamāt sārthāt paścimaṃ samudāhṛtam || III.22def ||

tatra prajñaptir nāmakāyādayaḥ | hetur bījasamgrhītam ālayavijñānam | nimittam
pratiṣṭhādehabhogasamgrhītam | pravṛttivijñānasamgrhītas ca manaudgrahavikalpāḥ | etat
saprajñaptisahetukaṃ nimittam sasamprayogaṃ saṃskṛtam veditavyam | tatra mano yan nityam
manyanākāraṃ | udgrahaḥ pañca vijñānakāyāḥ | vikalpo manovijñānam (|) tasya vikalpakatvād |

■ 要約 要点を整理すると次のようになる.

- deha, bhoga, pratiṣṭhā が説かれている文脈
まず文脈から整理すると、「相品」の用例は空性を主題としており、「真実品」の用例は有為・無為を主題としている.
- deha, bhoga, pratiṣṭhā の確認
次に単語の有無を確認した結果、偈頌では bhokṭṛ, bhojana, deha, pratiṣṭhā の語が確認された. 世親釈では、『楞伽經』の用例とは語順の違いはあるが、「pratiṣṭhā-deha-bhoga」という複合語の形が確認された.
- deha, bhoga, pratiṣṭhā に関する解釈
最後に、それぞれの単語に関する解釈は、偈頌には説明がなく、世親釈では deha は身体 (śarīra), pratiṣṭhā は器世間, bhokṭṛ は諸々の内入, bhojana は諸々の外入と説いている.

2.1.3.3 『阿毘達磨集論』と『阿毘達磨雜集論』

次は、『阿毘達磨集論』とそれに対する註釈『阿毘達磨雜集論』の用例を取り上げて検討する. 『阿毘達磨集論』第 4 章「獲得の決定」の中には「菩薩の善巧」の項目があり、さらにその項目の中には虚妄分別に関する次のような説明がある.

虚妄分別 (abhūtaparikalpa) とは何か. 10 種に要約される. 根本分別 (mūlavikalpa) と相分別 (nimittavikalpa) と……³⁷ (『阿毘達磨集論』)

これに対する『阿毘達磨雜集論』の註釈は次のようになっている.

虚妄分別は 10 種である. その中で根本分別とはアーラヤ識である. [なぜなら] 諸分別の種子となっているからである. 相分別とは、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」として顕現する諸々の識 (vijñapti) である. [なぜなら] 所取の相となっているからである. さらに、それらは順に、有色根 (rūpīndriya) ・器世間・色などの対象を特徴とするものであると見られるべきである. ……³⁸

³⁷ AS p.102.2-3: abhūtaparikalpaḥ katamaḥ | samkṣepato daśavidhaḥ | mūlavikalpaḥ nimittavikalpaḥ……

10 種の分別に関する教説は『撰大乘論』にも見られる. 長尾 [1982: p.342-346] 参照.

³⁸ ASBh p.137.8-11: abhūtaparikalpo daśavidhaḥ tatra mūlavikalpa ālayavijñānam sarvavikalpānāṃ bījabhūtatvāt nimittavikalpo dehapratiṣṭhābhogapratibhāsā vijñaptayaḥ grāhyanimittabhūtatvāt tāḥ punar yathākramaṃ rūpīndriyabhājanalokarūpādīviśayaalakṣaṇā draṣṭavyāḥ……|

(『阿毘達磨雜集論』)

すなわち、deha は有色根、pratiṣṭhā は器世間、bhoga は色などの対象とされている。注目すべき点は、『楞伽經』の用例と語順の相異は認められるものの、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」という複合語の形を取る用例が確認できたことである。

■ 要約 以下において考察の結果をまとめる。

- deha, bhoga, pratiṣṭhā が説かれている文脈
まず文脈から整理すると、虚妄分別を主題としている。
- deha, bhoga, pratiṣṭhā の確認
次に単語の有無を確認した結果、『阿毘達磨集論』では 3 語とも確認されなかったが、一方『阿毘達磨雜集論』では、『楞伽經』の用例と比較すると語順の相違は認められるが、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」という複合語の形が確認できた。
- deha, bhoga, pratiṣṭhā に関する解釈
最後に、それぞれの単語に関する解釈は、『阿毘達磨雜集論』に、deha は有色根、pratiṣṭhā は器世間、bhoga は色などの対象と説かれている。

2.1.3.4 『摂大乘論』

最後に『摂大乘論』の用例を検討する。第二章「所知相品」の中で依他起相を説く箇所に次のような説明がある。

その中で、依他起相とは何かというなら、[それは] アーラヤ識を種子とする虚妄分別に含まれる識 (vijñapti) である。

それら [の識] はまた何かというなら、(1) 身と (2) 有身と (3) 享受者との識 (deha-dehi-bhoktr-vijñapti) と、(4) それらによって享受されている識 (tadupabhogya-vijñapti) と、(5) それを享受する識 (tadupabhoga-vijñapti) と、(6) 時の識 (adhva-vijñapti) と、(7) 数の識 (saṃkhyā-vijñapti) と、(8) 場所の識 (deśa-vijñapti) と、(9) 言語の識 (vyavahāra-vijñapti) と、(10) 自他区別の識 (svaparaviśeṣa-vijñapti) と、(11) 善趣、悪趣、死、生の識 (sugatidurgaticyutyupapatti-vijñapti) とである。……これらの諸識によって、[三] 界 (dhātu), [五] 趣 (gati), [四] 生 (yoni), 及びすべての雑染 (saṃkleśa) が含まれる、[それが] 依他起相なる虚妄分別であると表わされたのである。これら諸識の唯識性 (vijñaptimātratā) が虚妄分別に含まれ、そして

無 (asat) であり、迷乱という対象 (bhrāntārtha) が現れていることの依り処 (ābhāsāśraya) が、それが依他起相である。³⁹

さらに、これに続いて以下のように説かれている。

この中、身と有身と享受者との識とは、眼等、内の六界であると知られるべきである。それによって享受されている識とは、色等、外の六界であると知られるべきである。それを享受する識とは、眼識等なる六界であると知られるべきである。その他の諸識はこれらの諸識の区別 (prabheda) であると知られるべきである。⁴⁰

以上 2 つの引用箇所の説明によれば、虚妄分別に含まれる識 (vijñapti) には 11 種類があり、その中で (1) 身と (2) 有身と (3) 享受身との識とは、眼などの内なる六界 (六根) であり、(4) 享受される識とは、色などの外なる六界 (六境) 、そして (5) 享受する識とは、眼識などの六界 (六識) であることが分かる。また、それら 5 つの識以外のものは 5 つの識の区別とされるから、11 の識に 18 界がすべて含まれることになる。

³⁹ MS pp.58.3–59.2: de la gzhan gyi dbang gi mtshan nyid gang zhe na | gang kun gzhi rnam par shes pa'i sa bon can yang dag pa ma yin pa kun rtog pas bsdus pa'i rnam par rig pa'o || de yang gang zhe na | lus dang lus can dang | za ba po'i rnam par rig pa dang | des nye bar spyad par bya ba'i rnam par rig pa dang | de la nye bar spyod pa'i rnam par rig pa dang | dus kyi rnam par rig pa dang | grangs kyi rnam par rig pa dang | yul gyi rnam par rig pa dang | tha snyad kyi rnam par rig pa dang | bdag dang gzhan gyi bye brag gi rnam par rig pa dang | bde 'gro dang ngan 'gro dang 'chi 'pho dang skye ba'i rnam par rig pa'o ||rnam par rig pa 'di rnams kyi kham dang 'gro ba dang skye gnas dang kun nas nyon mong pa thams cad bsdus pa gzhan gyi dbang go mtshan nyid kyi yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa bstan pa yon no || rnam par rig pa 'di rnams kyi rnam par rig pa tsam nyid yang dag pa ma yin pa kun rtog pas bsdus pa yod pa ma yin pa dang | nor ba'i don snang ba'i gnas gang yin pa 'di gzhan gyi dbang gi mtshan nyid do |

⁴⁰ MS p.60.6–13, p.60.21–22: de la lus dang lus can dang za ba po'i rnam par rig pa ni mig la sogs pa nang gi kham drug tu rig par bya'o || des nye bar spyad par bya ba'i rnam par rig pa ni gzugs la sogs pa phyi'i kham drug tu rig par bya'o || de la nye bar spyod pa'i rnam par rig pa ni mig gi rnam par shes pa la sogs pa'i kham drug tu rig par bya'o || rnam par rig pa lhag ma rnams ni rnam par rig pa 'di dag gi rab tu dbye bar rig par bya'o ||

ところで、ここで提示しているサンスクリットはチベット語訳を参考に想定されたものなので確定的な根拠にはならないが、deha と bhoga に関連する言葉で 18 界を説明していると考えて差し支えはないであろう⁴¹。

■ **要約** 要点をまとめると次のようになる。

- ・ deha, bhoga, pratiṣṭhā が説かれている文脈
文脈から整理すると、依他起相を主題としている。
- ・ deha, bhoga, pratiṣṭhā の確認
次に単語の有無を確認した結果、pratiṣṭhā は見られないが、deha, dehin, bhokṭṛ, upabhogyā, upabhoga など、deha と bhoga に関連する言葉が用いられている。
- ・ deha, bhoga, pratiṣṭhā に関する解釈
それぞれの単語に関する解釈は、deha と dehin と bhokṭṛ の 3 つが六根、upabhogyā が六境、upabhoga が六識とされている。

2.1.3.5 まとめ

本節では初期唯識文献を中心に deha, bhoga, pratiṣṭhā の用例を検討した。その結果をまとめると次のようになる。

■ **deha, bhoga, pratiṣṭhā が説かれている文脈**

まず、deha, bhoga, pratiṣṭhā 関連の用例が説かれている文脈を簡単にまとめると、「空性」を主題とする説明の中で説かれたり、有為に関して説明する文中で説かれたりするが、主として、虚妄分別と依他起相について言及している箇所によく見られる。

■ **deha, bhoga, pratiṣṭhā の確認**

次に、単語の有無を確認した結果、弥勒に帰される『大乘莊嚴經論』の偈頌や『中辺分別論』偈頌において、複合語の形ではないが、すでに deha, bhoga, pratiṣṭhā の 3 語が見られる。それが世親や安慧の註釈文献になると、複合語の形で確認される。例えば、世親の『中辺分別論』には「pratiṣṭhā-deha-bhoga」に関する記述があり、安慧の『阿毘達磨雜集論』には「deha-pratiṣṭhā-bhoga」について説かれている箇所が見られる。ただし、無著の『阿毘達磨集論』には deha, bhoga, pratiṣṭhā 関連の用例が全く見られ

⁴¹ 高崎 [1976: p.23] には、(1) から (5) までの識別は「deha と bhoga を根幹として細別したものであることが知られる。」とされている。

ないし、同じく無著の『摂大乘論』にも、deha, bhoga に関連する言葉はあるが、pratiṣṭhā は説かれていない。

■ deha, bhoga, pratiṣṭhā に関する解釈

最後に、それぞれの単語に関する解釈を整理すると、まず pratiṣṭhā が器世間であることに異論はない。また deha は、有色根、すなわち感覚器官をもつ身体と解釈されたり、単に身体とされたり、或いは六根と説かれる場合もあるが、要するに十八界の説明でいうと六根のことを意味していると考えられる。そして、bhoga の場合は文献毎に解釈が異なっている。例えば、五識（あるいは六識）として説明されたり、五境（あるいは六境）と説かれたり、あるいは細別して十二処の内外入に解釈されたりする⁴²。

2.1.4 「身体・享受(物)・場所」の意味とアーラヤ識の捉え方

本節では、まず『楞伽経』の用例を、その文脈に焦点を合わせ整理し、その上、いままでの考察の結果を踏まえながら、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の意味とアーラヤ識の捉え方に関して検討する。

2.1.4.1 「身体・享受(物)・場所」と三界唯心

前節 2.1.2 ですでに述べたように、『楞伽経』には、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」全体に関する説明はあっても、それぞれの言葉の意味については詳しく説かれていない。したがって、それを推定するためには、関連する文献の用例と『楞伽経』自体の文脈を調べる必要がある。関連する文献の用例に関しては、それが説明されている文脈も含めて、すでに 2.1.3 で確認したので、以下においては、『楞伽経』の中で「唯心」に関連して説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の用例を検討し、全体的な意味に関して考察する。その上で、それぞれの言葉の意味を、前節 2.1.3 の考察から得られた結果に基づいて推定する。

■ 用例の分析

まず「唯心」との関連で説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の例には次のようなものがある。

⁴² 袴谷 [2008: p.420, p.422] は、bhoga は「意味の確定しがたい難解な言葉と言ってよいであろう」とし、「bhoga という語が極めて不安定なものであったと予測はつくのではあるまいか」と指摘している。

〈例 1〉 増益と損減とは実に唯心には存在しない。
「身体・享受(物)・場所」として顕現する心を理解しない者たち、
愚かな彼らは、もろもろの増益と損減において行動する。⁴³

〈例 2〉 外なる見られるべきものは存在しない。実に種々の心が見られる。
「身体・享受(物)・場所」として顕現するものは心にすぎないと私は説く。⁴⁴

〈例 1〉と〈例 2〉によれば、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するものが「唯心」であることが分かる。それでは他の箇所ではどのように説明されているか以下において確認する。

〈例 3〉 [有無のことを考える] 彼らは……「唯心」において確定された考えを持たず、分別によって自心界を増長している。マハーマティよ、身体・享受(物)・場所・趣⁴⁵という分別にすぎないものにおいて、有無を離れたものである兎角を [存在すると] 分別してはならない。⁴⁶

ここでも、〈例 1〉 〈例 2〉と同様、「唯心」が説かれている文脈の中で「deha-bhoga-pratiṣṭhā」が述べられている。

次に、「三界唯心」に関連する用例を検討する。

〈例 4〉 その中で、マハーマティよ、どのように菩薩摩訶薩は自心において見られるべきものの修習をよくするか。すなわち、彼は次のように観察する。①

⁴³ LAS p.70.17–19: samāropāpavādo hi cittamātre na vidyate |

dehabhogapratīṣṭhābham ye cittam nābhijānate |
samāropāpavādeṣu te caranty avipaścītāḥ || II.135 ||

⁴⁴ LAS p.154.5–6: dṛśyaṃ na vidyate bāhyaṃ cittam cittam hi dṛśyate |

dehabhogapratīṣṭhānam cittamātram vadāmy aham || III.33 ||

Cf. LAS p.326.4–5: dṛśyaṃ na vidyate bāhyaṃ cittacitram vidṛśyate |

dehabhogapratīṣṭhābham cittamātram vadāmy aham || X.487 ||

ここでは X.487 の読みを取る。

⁴⁵ 本論文の 2.1.3.4 参照。(11) 善趣，悪趣，死，生の識 (sugatidurgaticyutyupapattivijñapti) .

⁴⁶ LAS pp.51.15–52.2: te.....cittamātrānavadhāritamatayaḥ svacittadhātuṃ vikalpena te puṣṇanti dehabhogapratīṣṭhāgatīvikalpamātre mahāmāte śaśaṅgaṃ nāstyastiviniṣṭam na kalpayet |

「この三界に属するもの (traidhātuka) は自分の心にすぎない。 [また、三界に属するものは] 我・我所を離れたものであり、動揺のないものであり、去来を離れているものであり、無始時来の戲論の龜重の潜在印象に対する執着によって印象づけられたものであり、三界に属する種々の形の言説に縛られたものであり、②身体・享受(物)・場所・趣という分別 (deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpa) によって随伴されたものである、と分別され、かつ [そのようなものとして] 顕現する。」⁴⁷

①を見ると「この三界に属するものは自分の心にすぎない」とある。これはいわゆる「三界唯心」の説明に該当する。そして、このように「三界唯心」を説く文脈の中で、三界に属するものの説明として、幾つか併記されているが、その中に②「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpa」の記述が見られる。この「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati」と vikalpa の関係は、『阿毘達磨雜集論』、『撰大乘論』などによれば、同格として理解できるであろう。前節の2.1.3.3で検討したように、『阿毘達磨雜集論』には虚妄分別として10種の分別が説かれており、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」はその中で「相分別」として説明されているからである。そして『撰大乘論』によれば、10種の分別の中、「相の変異の分別」には地獄などの悪趣が含まれているから⁴⁸「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati」は10種の分別に収められることになる。引用箇所最後の部分で、このような「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpa」によって「三界唯心」が随伴される、すなわち「三界唯心」が「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpa」を随伴すると説かれているので、「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpa」は「三界唯心」に属するもの、と理解できるであろう。そうすると「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati」と vikalpa は同格なので、「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati」は「三界唯心」に属するものになる。つまり、三界に属するもので、それが「唯心」ということになるのである。したがって、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」は「三界に属するもの」となる。

■ deha, bhoga, pratiṣṭhā の意味

⁴⁷ LAS p.80.5–10: tatra katham mahāmate bodhisattvo mahāsattvaḥ svacittadṛśyavibhāvanākuśalo bhavati | yad uta sa evaṃ pratyavekṣate svacittamātram idam traidhātukam ātmātmīyarahitam nirīham āyūhaniryūhavigatam anādikālaprapañcadauṣṭhulyavāsanābhiniveśavāsītāṃ traidhātukavicitrarūpopacāropanibaddhaṃ dehabhogapratīṣṭhāgatīvikalpānugatam vikalpyate khyāyate ca |

⁴⁸ 長尾 [1982: p.342–346] 参照。

それでは、前節 2.1.3 の考察結果と本節の検討を参考に『楞伽経』の説く「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の意味を推定してみる。

① まず、初期唯識文献の解釈を簡単に整理すると、deha は単に身体、あるいは十八界で言う六根とされる。そして、pratiṣṭhā は器世間を意味しているとされ、この点について異説はない。問題は bhoga で、その解釈をめぐって文献の間に相違が見られる。すなわち、bhoga を認識（識）と理解する例と、認識対象（境）と理解する例が見られる。

② それでは①を踏まえた上で、『楞伽経』で説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」を検討する。

本節で検討したように、『楞伽経』で「deha-bhoga-pratiṣṭhā」全体が意味しているのは「三界に属するもの」（traidhātuka）である。すなわち五蘊・十二処・十八界などで表現される、一切のもの、有為法を意味していると考えられる。したがって、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」全体が認識（識）のみを指しているとか、あるいは認識対象（境）のみを指しているとするより、認識と認識対象の両方をも含む表現として理解するのが自然であろう。すでに①で整理したように、deha は身体、pratiṣṭhā は器世間と理解されるので、認識と認識対象の両方を指しているのは bhoga であると推定される⁴⁹。

■ 要約 以下において考察の結果をまとめる。

- ・ 「deha-bhoga-pratiṣṭhā」は、「三界唯心」に関連する教説の中で説かれる場合がある。その用例を検討した結果によれば、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」全体の意味としては「三界に属するもの」が考えられる。
- ・ その「deha-bhoga-pratiṣṭhā」を構成している個々の言葉は、まず deha は身体（根）、pratiṣṭhā は器世間、そして bhoga は、認識と認識対象の両方を指していると推定される。

2.1.4.2 アーラヤ識と依他起性

前節 2.1.3 の結果によれば、初期唯識文献の中で deha, bhoga, pratiṣṭhā の用例が見られるのは、主に依他起性を説明する文脈の中である。依他起性は、本論文の主題であるアーラヤ識との関連性が高いので、以下においては、『楞伽経』の中で、依他

⁴⁹ 袴谷 [2008: p.423] では、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」に関して「…単独で身体や認識の主客を包含する用語として直感的に愛誦されていたと考えた方が自然なのではないか」と指摘している。

起性について説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の用例を取り上げ、特にアーラヤ識を中心に他の文献との関連を検討する。

■ 用例の検討

「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識が依他起性に関連して述べられている例は次のようである。

マハーマティよ，愚かな者たちによって虚妄遍計所執性 (abhūtaparikalpitasvabhāva) として分別されたものであるから，すべての存在 (sarvabhāva) は不生である。……マハーマティよ，身体・享受(物)・場所・趣⁵⁰の自性の相をもつアーラヤ識は，所取・能取の相をもって展開しつつある。 [その時] 生・住・滅や二見に陥った見解をもつ愚かな者たちは，有無においてすべての存在の生起を分別する。⁵¹

ここでは、「deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati の自性の相」をもつものであり，所取・能取の相をもって展開しつつあるアーラヤ識をすべての存在の生起として説明しながら，そのすべての存在が不生である理由として「虚妄遍計所執性」を挙げている。すなわち，すべての存在として展開しつつあるアーラヤ識は「虚妄遍計所執性」のために不生であるとされている。

ところで，上記の用例中，「所取・能取の相をもって」 (grāhyagrāhakalakṣaṇena) という記述は本論文の 2.1.3.1 で検討した『大乘莊嚴經論』「述求品」の用例を想起させる。すなわち，

所取と能取を特質とする (grāhyagrāhakalakṣaṇa) 三種・三種の顕現をもつ虚妄分別は，実に依他 [起] の特質である。(XI.40)

⁵⁰ 『撰大乘論』には，依他起相の説明の中で 11 種の vijñapti を説いている箇所があり，最後に「善趣，悪趣，死，生の記識」 (sugatidurgaticyutyupapatti-vijñapti) が挙げられている。『楞伽經』で言う「趣」も輪廻の諸趣を示していると考えられる。本論文の 2.1.3.4，高崎 [1976a: p.12] 参照。

⁵¹ LAS p.62.11–17: bālapṛthagjanābhūtaparikalpitasvabhāvavikalpitaṭvān mahāmate anutpannāḥ sarvabhāvāḥ |.....dehabhogapraṭiṣṭhāgatisvabhāvalakṣaṇam mahāmate ālayavijñānam* grāhyagrāhakalakṣaṇena pravartamānaḥ bālā utpādashṭitibhaṅgaḍṛṣṭidvayapatitāśayā utpādam sarvabhāvānāḥ sadasator vikalpayanti || * 写本 T6 -ānaḥ; 南條本 -āna

と、依他起相について説明する箇所である。ここでは「grāhyagrāhakalakṣaṇa」が虚妄分別のもつ特徴として説かれている。また、この箇所に対する安慧の註釈によれば、所取・能取として顕現するのはアーラヤ識である、と説明されており⁵²、「所取・能取の相をもって展開しつつあるアーラヤ識」と説く『楞伽経』と同様の理解を示していることが分かる。

さらに、ここで一つ気になるのは「虚妄遍計所執性」という術語である。「虚妄遍計所執性」とは、『撰大乘論』によれば、依他起性の二側面の中で遍計所執性の側面を示している言葉なので、この箇所が三性説の依他起性を背景にして説かれていることが分かる⁵³。

■ 要約 以上をまとめると次のようになる、

- ・ 「deha-bhoga-pratiṣṭhā」とアーラヤ識は、三性説の依他起性を背景にして説かれる場合がある。注目すべき点は、「虚妄遍計所執性」という術語の使用からして、『撰大乘論』との関連性が伺えることである。
- ・ また、依他起性に関連する『楞伽経』の用例を見るかぎり、アーラヤ識に関する理解において他の唯識文献との間に相違がないと考えられる。

2.1.4.3 まとめ

本節では、『楞伽経』の文脈に注意しながら「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の意味とアーラヤ識の捉え方に関して検討した。その結果は次のように要約できる。

■ 『楞伽経』の説く deha, bhoga, pratiṣṭhā の意味

まず、『楞伽経』において説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の3語からなる複合語は、「三界唯心」の文脈において説明されているのが確認できた。それを踏まえながら、全体の意味とそれぞれの言葉の意味を考察した結果、

- ・ 「deha-bhoga-pratiṣṭhā」は「三界に属するもの」と考えられる。
- ・ そして、deha は身体、pratiṣṭhā は器世間、bhoga は、認識主体と認識対象の両方を指していると推定される。

■ アーラヤ識の捉え方

⁵² 前節 2.1.3.1 の「述求品」の用例参照。

⁵³ 長尾 [1982: pp.377–380] 参照。

次に、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」との関連付けで説かれるアーラヤ識は、三性説の依他起性を背景にしている場合があるが、その用例を検討したかぎりでは、アーラヤ識に関する理解において他の唯識文献と大きな相違はないと考えられる。

また、「虚妄遍計所執性」という術語が見られるので、『撰大乘論』との関連性が伺える。この点は注目すべきであろう。

2.1.5 小結

以上、『楞伽經』の中でしばしば、アーラヤ識と関連付けられて説かれている「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の用例を中心に、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」という術語の意味とアーラヤ識の捉え方に関する考察を進めてきた。以下においてその結果をまとめて本章の小結とする。

1. まず、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の3語からなる複合語は、しばしば「三界唯心」の文脈において説明されており、その用例を検討した結果、基本的に「三界に属するもの」として考えられていることが分かった。そして、複合語を構成しているそれぞれの言葉の意味については、関連する初期唯識文献との比較検討によって、dehaは身体、pratiṣṭhāは器世間であることが分かった。ただし、bhogaについては文献によって相違があり、認識（識）として解釈する場合と、認識対象（境）として解釈する場合がある。『楞伽經』では、認識と認識対象の両方を指していると推定される。したがって、本論文では、bhogaの持つ、認識と認識対象としての意味を活かし、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」に対して「身体・享受(物)・場所」という訳語を与えた。
2. 次に、アーラヤ識と「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の関係を考察した結果によれば、アーラヤ識は「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するものであることが分かる。また、依他起性を背景にしている用例の分析からは、『楞伽經』のアーラヤ識に対する捉え方が、他の関連する唯識文献におけるアーラヤ識の理解と相違ないと考えられる。
3. 最後に、弥勒・無著・世親に帰せられる初期唯識文献（論書）及びその註釈文献の中には、部分的ではあるが deha, bhoga, pratiṣṭhā の語が確認できる。このことから、『楞伽經』と唯識文献間の関連性が伺えるが、その中でも特に、複合語の形が見られる文献、例えば、「pratiṣṭhā-deha-bhoga」を説いている世親の『中辺分別論釈』と、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」の述べられている安慧の『阿毘達磨雜集論』は、言葉遣いからして、最も『楞伽經』に近い文献であると考えられる。また、『楞伽經』のアーラヤ識と関連する用例の中に「虚妄遍計所執性」

(abhūtaparikalpitasvabhāva) という術語が見られることから、『摂大乘論』との関連性が伺える。これは注目に値する。

2.2 如来蔵とアーラヤ識

2.2.1 はじめに

周知の通り『楞伽經』には、如来蔵とアーラヤ識を同格限定複合語で記述し、両者の同一性を主張する教説がある。それは『楞伽經』の代表的な教説として取り上げられることも多い。そもそも系統の異なった二つの思想を融合するという新しい試みを行った『楞伽經』の意図はどこにあったのか。

以下においては『楞伽經』が意識していたと考えられる『勝鬘經』の記述を確認しながらそれを探ってみる。まず『楞伽經』の中の、如来蔵とアーラヤ識に関連する用例を整理し、「無明住地」に言及している例を確認する。次に、『勝鬘經』の説く「無明住地」を検討した後、『楞伽經』の「無明住地」に関する理解を考察する。

2.2.2 『楞伽經』における如来蔵と同一視されるアーラヤ識

2.2.2.1 如来蔵とアーラヤ識の関係に関する記述の類型

如来蔵とアーラヤ識の関係を示している『楞伽經』の記述を簡単に整理すると、次のようになる。

- 1) アーラヤ識と呼ばれる〔如来蔵〕：tathāgatagarbho ālayavijñānasamśabdito⁵⁴
- 2) 如来蔵の言葉で呼ばれるアーラヤ識：tathāgatagarbhasābdasamśabdita ālayavijñāne⁵⁵
- 3) アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabdito⁵⁶
- 4) アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：ālayavijñānasamśabditas tathāgatagarbho⁵⁷
- 5) アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabdite⁵⁸
- 6) 如来蔵であるアーラヤ識：tathāgatagarbhālayavijñāna-⁵⁹
- 7) アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabditaḥ⁶⁰
- 8) 如来蔵であるアーラヤ識：tathāgatagarbhālayavijñāna-⁶¹
- 9) アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabdito⁶²
- 10) 如来蔵と呼ばれるアーラヤ識：ālayavijñānam tathāgatagarbhasamśabditam⁶³

⁵⁴ LAS p.220.9–16.

⁵⁵ LAS p.221.12–13.

⁵⁶ LAS p.222.6–7.

⁵⁷ LAS p.222.9–10.

⁵⁸ LAS p.222.10–11.

⁵⁹ LAS p.222.14–15.

⁶⁰ LAS p.223.2.

⁶¹ LAS p.223.11–12.

⁶² LAS p.235.7–8.

この中で、用例 8) は、『楞伽經』の説明によると用例 7) の言い換えなので、上記の用例は次の 3 つの類型にまとめられる。

- ・アーラヤ識と呼ばれる如来蔵：1) , 3) , 4) , 5) , 7) , 8) , 9)
- ・如来蔵と呼ばれるアーラヤ識：2) , 10)
- ・如来蔵であるアーラヤ識：6)

2.2.2.2 『楞伽經』と『勝鬘經』

上に検討したように、『楞伽經』の中で、如来蔵とアーラヤ識に関連する用例が見られるのは計 10 回である。そのうち、『楞伽經』第六章「刹那品」の冒頭、如来蔵の生起 (pravṛtti) と止滅 (nivṛtti) について説いている箇所 8 回、後半部、刹那滅に関する教説が説かれている箇所 2 回見られる。ところで、その 2 箇所共に『勝鬘經』と関連している。まず、冒頭部の用例から検討する。

〈例 1〉 マハーマティよ、如来蔵は、善・不善の原因をもつものであり、すべての生と趣の作者である。…… [如来蔵は] 無始時来の種々の戲論の重苦しきの潜在印象によって印象づけられた、アーラヤ識と呼ばれるものであり、大海と浪のように、無明住地 (avidyāvāsanābhūmi) より生ずる七識と共に常に分離されていない身体をもって生起する。……究極的に自性清浄 (prakṛtipariśuddhi) である。⁶⁴

すなわち、「アーラヤ識と呼ばれる如来蔵」は、無始時来の種々の戲論の重苦しきの潜在印象によって印象づけられたもので、「無明住地」 (avidyāvāsanābhūmi) より生ずる七識と共に生起する、とされる。ここにおいて「アーラヤ識と呼ばれる如来蔵」が初めて説かれる。「無始時来の種々の戲論の重苦しきの潜在印象によって印象づけられたもの」がアーラヤ識というのは用意に理解できるが、「無明住地」より七識が生ずるということは理解に苦しむ。この問題は次節で検討するとし、ただ「無明住地」という術語が、『勝鬘經』に由来するということだけを確認しておく。

次に、この段落が『勝鬘經』に関連していることを知らせる箇所に、

⁶³ LAS p.235.16.

⁶⁴ LAS p.220.9–16: tathāgatagarbho mahāmate kuśalākuśalahetukaḥ sarvajānmagatikartā | anādikālavividhaprapañcadauṣṭhulyavāsanāvāsita ālayavijñānasamśabdito ’vidyāvāsanābhūmijaiḥ saptaḥvir vijñānaiḥ saha mahodadhitarāṅgavan nityam avyucchinnaśarīraḥ pravartate | 高崎 [1981a: pp.2–4] 参照。

〈例 2〉 マハーマティよ、わたしは実に、このことを勝鬘夫人のために教説の中で説いた。……勝鬘夫人のために七つの識ともなる「アーラヤ識と呼ばれる如来蔵」が如来の対象であることを説いた。……⁶⁵

と、『勝鬘經』の主人公である勝鬘夫人の名前が説かれている。

次に刹那滅を説いている箇所には、

〈例 3〉 さらにマハーマティよ、善・不善とは即ち八識である。八とは何か。即ちアーラヤ識と呼ばれる如来蔵とマナスと意識、そして他学派によって説かれる五識身である。⁶⁶

〈例 4〉 さらにマハーマティよ、マナスに随伴された、如来蔵と呼ばれるアーラヤ識は、転識の習気によって刹那のものであり、無漏の習気によって非刹那のものである。⁶⁷

とあり、〈例 4〉の直後に次のような説明がある。

〈例 5〉 如来蔵は経験された楽と苦との原因を有するものであり、四種の習気に酔わされて、流転し、還滅する。⁶⁸

ここで、四種の習気とは、以下の四習気のことを指すと考えられる。

⁶⁵ LAS pp.222.19–223.4: etad eva mahāmate mayā śrīmālāṃ devīm adhikṛtya deśanāpāthe……tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabditaḥ sapabhir vijñānair saha…… śrīmālāṃ devīm adhikṛtya……

⁶⁶ LAS p.235.6–9: kuśalākuśalāḥ punar mahāmate yad utāṣṭau vijñānāni | katamāny aṣṭau yad uta tathāgatagarbha ālayavijñānasamśabdito mano manovijñānaṃ ca pañca ca vijñānakāyās tīrthyānuvarṇitāḥ |

高崎 [1981a: pp.58–59] 参照。

⁶⁷ LAS p.235.15: kṣaṇikam punar mahāmate ālayavijñānaṃ tathāgatagarbhasamśabditam manaḥsahitaṃ pravṛttivijñānavāsanābhiḥ kṣaṇikam anāsravavāsanābhir akṣaṇikam |

高崎 [1981a: pp.60] 参照。

⁶⁸ LAS p.236.5–7: tathāgatagarbhaḥ punar mahāmate anubhūtasukhaduḥkhaḥetusahitaḥ pravartate nivartate ca catasrbhir vāsanābhiḥ sammūchitāḥ |

〈例 6〉 実に、有 (bhava) と愛 (kāma) と色 (rūpa) と見 (drṣṭi) とに關して四種の習気がある。〔これらは〕意識より生じたものと、アーラヤと、意とに住するものである。⁶⁹

また、この箇所の直前に、「四習気地」に關する記述があり⁷⁰、上記の用例はそれをまとめる偈頌なので、四習気とは、「四習気地」(vāsanābhūmi)を指すと考えられる。一方『勝鬘經』では、「無明住地」より四住地(vāsabhūmi)、すなわち有(bhava)と愛(kāma)と色(rūpa)と見(drṣṭi)の住地が生ずると説明しているの、刹那滅を説いているこの箇所も『勝鬘經』と關連していると考えられる。(次節 2.2.3 参照)

以上、「アーラヤ識と呼ばれる如来藏」の記述が『勝鬘經』に關連していることが確認できた。それでは次節で、『勝鬘經』の「無明住地」を檢討する。

2.2.3 『勝鬘經』の説く「無明住地」

『勝鬘經』では、声聞・獨覺の悟りが不完全であると説いた後、煩惱について次のように説明している。

世尊よ、煩惱には二種類あります。

一つは潜在的状态の煩惱(住地煩惱 vāsabhūmi)、他は発現した状态の煩惱(纏煩惱 paryutthāna)であります。世尊よ、そのうち(根源的な)潜在的状态にある煩惱には、さらに四種類あります。四種とは何かといえば、すなわち、1) 一方的偏見のなかに存在する潜在の煩惱(見一処住地)と、2) 凡夫の世界たる欲望界に特有の執着のなかに存在する潜在の煩惱(欲愛住地)と、3) 肉体を有するものの世界に特有の執着のなかに存在する潜在の煩惱(色愛住地)と、そして、4) 輪廻の生存に通有の執着のなかに存在する潜在の煩惱(有愛住地)とです。世尊よ、これらの四つの根源的・潜在的な煩惱にもとづいて、すべての発現した状态の煩惱が発生します。

世尊よ、これら(発現した状态の煩惱)はすべて、瞬間性的のもので、各瞬間ごとの心に対応して発生します。

(ところで、)世尊よ、ここに潜在的無知(無明住地)(という、より根源的な潜在の煩惱があります、これ)は、いつはじまったとも知れない昔から存在する(無始時來)もので、心のはたらきと対応するものではありません。…

⁶⁹ LAS p.243.10–11: bhavakāmarūpadrṣṭinām vāsanā vai caturvidhā |

manovijñānasambhūtā ālayaṃ ca manaḥ sthitāḥ || VII.4 ||

⁷⁰ LAS p.241.17–242.1 参照。

(さて、) 世尊よ、そういうわけで、潜在的無知は大きな力のあるもので、(ときに) 「輪廻の生存に通有の執着のなかに存在する潜在的煩惱」の名で呼ばれることもあります。……世尊よ、この潜在的無知は、「輪廻の生存に通有の執着のなかに存在する潜在的煩惱」と呼ばれることがあっても、これら四種の潜在的煩惱のすべてを凌駕して、ガンガー河の砂の数よりも多い付随的煩惱の基礎となり、また、四種の(基本的) 煩惱とも、昔から共存しております。(これは) 阿羅漢や独覚の知恵をもってしてもなかなか断ち切れないもので、ただ、如来のさとり⁷¹の知恵によってのみ断ち切られます。世尊よ、潜在的無知はそれほど大きな力をもっております。⁷¹

このように本性として清浄(自性清浄)な如来蔵が偶然的に付着した諸種の煩惱(客塵煩惱)によって汚されているということは、ただ如来だけが知らしすところ、われわれの思慮の及ぶところではない、と私は考えます。

世尊よ、善心は瞬間性のもので、したがって煩惱の汚染をうけるということはありません。

世尊よ、不善心もまた瞬間性のもので、したがって煩惱の汚染をうけるということはありません。……

世尊よ、われわれには多くの煩惱があり、また煩惱によって汚れた心があります。⁷²

以上、要点だけを整理すると、次のようになる。

- ・ 煩惱は二種類で、住地煩惱と纏煩惱である。
- ・ 住地煩惱は四種類で、見一处住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地である。
- ・ 無明住地は、心の刹那と対応しないが、纏煩惱は対応する。
- ・ 如来蔵は自性清浄であるが、客塵煩惱によって汚染される。
- ・ 刹那の善心も不善心も煩惱に汚されることはない。ところが、煩惱は心を汚すことがある。

それでは以下において、本節の結果をもとに『勝鬘経』の説く「無明住地」が、『楞伽経』においてはどのように理解されているか検討する。

2.2.4 「無明住地」に関する『楞伽経』の理解

2.2.4.1 「無明住地」と「無明習気地」

⁷¹ 高崎 [1975: p.92-93] 参照。

⁷² 高崎 [1975: p.117] 参照。下線部は筆者によるもの。

本章では、便宜上、検討しないまま「無明住地」の語を用いたが、『楞伽經』で説かれている「無明住地」の語には問題があるので、それについて考察する。

■『楞伽經』の「無明住地」 まず、前節 2.2.2.2 ですでに検討した〈例 1〉の説明に戻り、「無明住地」の語を確認する。

〈例 1〉 マハーマティよ、如来蔵は、善不善の原因をもつものであり、すべての生と趣の作者である。……[如来蔵は] 無始時來の種々の戲論の重苦しい潜在印象によって印象づけられた、アーラヤ識と呼ばれるものであり、大海と浪のように、無明住地 (*avidyāvāsanābhūmi*) より生ずる七識と共に常に分離されていない身体をもって生起する。……究極的に自性清淨 (*prakṛtipariśuddhi*) である。

以上、七識の生起の原因として「無明住地」が説明されている。ところで、訳文の中にも表示した通り、「無明住地」のサンスクリットは「*avidyāvāsanābhūmi*」になっている。ところで、『勝鬘經』の説く「無明住地」の語は、『宝性論』の梵本や『勝鬘經』のチベット語訳によれば⁷³、「*avidyāvāsabhūmi*」になっているので「*avidyāvāsanābhūmi*」を「無明住地」と理解するには問題がある。

■『楞伽經』の「無明住地」の原語 それでは、以下において『楞伽經』の「無明住地」のサンスクリットと漢訳、チベット訳を整理する。

- ・サンスクリット：*avidyāvāsanābhūmi*
- ・漢訳：無明住地（求那跋陀羅訳），無明（菩提留支訳），無明住地（実叉難陀訳）
- ・チベット語訳：*ma rig pa'i gnas kyi sa*

以上、サンスクリットを除く、漢訳とチベット語訳が「無明住地」を支持することが分かる。因みに、高崎 [1981a: p.3] の報告によれば、参照した計 17 の写本すべてにおいて「無明住地」の箇所が「*avidyāvāsanābhūmi*」になっている。写本の読みによるかぎり、『楞伽經』の「無明住地」は「無明習気地」と訳すべきなのであるが、翻訳年代が古い漢訳とチベット語訳がすべて「無明住地」を支持しているので、決定し難い⁷⁴。

⁷³ 香川 [1972: pp.1047–1048] 参照。

⁷⁴ 可能性としては、「無明住地」の術語を知っていた翻訳者たちが「無明習気地」(*avidyāvāsanābhūmi*) を「無明住地」に翻訳した可能性も考えられるが、確証はない。

■ ‘無明習気地’の可能性 前節 2.2.2.2 ですでに確認したように、『楞伽經』には四つの‘習気地’が説かれている。すなわち、有習気地 (bhava-vāsanābhūmi) と愛習気地 (kāma-vāsanābhūmi) と色習気地 (rūpa-vāsanābhūmi) と見習気住地 (dṛṣṭi-vāsanābhūmi) である。ところで、これら四つの「習気地」は、『勝鬘經』では、「無明住地」より生ずる四つの「住地」(vāsabhūmi) として説明されている。『楞伽經』が『勝鬘經』の如来蔵説を意識しながら、如来蔵とアーラヤ識を同一視する教説を説いている点を考慮すれば、意図的に「住地」の語を「習気地」に変えた可能性も考えられる。それは「無明住地」の説かれている〈例 1〉の文脈に関係すると推定されるので、以下において再検討する。

〈例 1〉 ①マハーマティよ、如来蔵は、善不善の原因をもつものであり、すべての生と趣の作者である。……②〔如来蔵は〕無始時來の種々の戲論の重苦しい潜在印象によって印象づけられた、アーラヤ識と呼ばれるものであり、大海と浪のように、無明住地 (avidyāvāsanābhūmi) より生ずる七識と共に常に分離されていない身体をもって生起する。……究極的に自性清淨 (prakṛtipariśuddhi) である。⁷⁵

①下線部が、如来蔵の説明になっていることは容易に分かる。次の②の下線部は、一見如来蔵の説明に見受けられるが、アーラヤ識の説明になっていると考えられる。つまり、②の説明は、「アーラヤ識と呼ばれている〔如来蔵〕」という記述によって、アーラヤ識に如来蔵を導入したということである。言い換えれば、「一般的にはアーラヤ識と呼ばれているが、しかし実は如来蔵である」という意味を付加するために用いられた表現と考えられる。その意図は、『勝鬘經』で提起された問題の解決にあった可能性がある。すでに 2.2.3 で確認したように、『勝鬘經』では、自性清淨であるはずの如来蔵が、客塵煩惱によって汚染されることがあるということについて問題提起をしている。しかし、問題提起に終わってしまい、解決まではされていない。心と相応することがないと説明されている、すべての煩惱の原因である「無明住地」に新しい解釈を加えてその問題に答えるために、上記の一文が説かれたと考えられる。例文によれば、「無明住地」は七識と共に常に分離されていない身体をもって生起するものになっている。これは、「アーラヤ識と呼ばれる」という記述を入れることで得られ

⁷⁵ LAS p.220.9–17: tathāgatagarbho mahāmate kuśalākuśalahetukaḥ sarvajanmagatikartā | anādikālavividhāprapañcadauṣṭhulyavāsanāvāsita ālayavijñānasamśabdito ’vidyāvāsanābhūmijaiḥ saptabhir vijñānaiḥ saha mahodadhitarāṅgavan nityam avyucchinnaśarīraḥ pravartate |.....’tyantaprakṛtipariśuddhiḥ |

高崎 [1981a: pp.2–4] 参照。

た結果であろう。アーラヤ識が七識の原因であり、お互い不可分離の関係にあることは『楞伽經』でも認められているので、アーラヤ識の代わりに七識の生起の原因として位置づけられた「無明住地」は七識、つまり心と相応することができるようになったのである。そうすると、アーラヤ識から七識の生起の原因という役割を譲り受けた「無明住地」を「無明習気地」として解釈する余地が開かれる。「習気」(vāsanā)から識が生ずるという説明は『楞伽經』では一般的である。以上を踏まえて考えれば、『楞伽經』「無明住地」を、『宝性論』梵本の一写本に用いられており、『宝性論』のチベット語訳でも見られる「無明習気地」(avidyāvāsanābhūmi)と理解する可能性の余地もあると考えられる。

2.2.5 小結

以上、『楞伽經』の中の、如来蔵とアーラヤ識に関連する用例と、『勝鬘經』の説く「無明住地」を検討した後、『楞伽經』の「無明住地」に関する理解を考察してきた。以下の結果を本章の小結とする。

1. 『楞伽經』の中で見られる如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述は、次の3つの類型にまとめられる。
 - ・アーラヤ識と呼ばれる如来蔵
 - ・如来蔵と呼ばれるアーラヤ識
 - ・如来蔵であるアーラヤ識
2. 如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述は、「無明住地」(avidyāvāsabhūmi)をはじめ「四住地」のような、『勝鬘經』由来の術語と深く関係していることから、『勝鬘經』との関連性が伺える。
3. 『楞伽經』に見られる「無明住地」の語には、その原語をめぐって問題があるが、翻訳年代が古い漢訳やチベット語訳によれば、「無明住地」(avidyāvāsabhūmi)と考えられる。しかし、サンスクリット写本の読みや用例の分析によれば、「無明習気地」(avidyāvāsanābhūmi)の可能性も否定できない。

2.3 「分別事識」とアーラヤ識

2.3.1 はじめに

周知の通り『楞伽經』には、諸識の分類法を取り上げて識説を述べている箇所がある。そこでは、三つの方式、すなわち「相続と相」「現識と分別事識」「転相と業相と真相」⁷⁶をもって諸識を分類している。この分類法に関して、無着・世親の瑜伽行派の系統とは、識説において趣を異にすると指摘する見解がある⁷⁷。

そこで本章では、アーラヤ識との類似性が予想される「分別事識」を中心に、無着・世親の唯識文献と『楞伽經』との関連性を考察することにする。

まず『楞伽經』の八識説を整理した後、他の唯識文献と比較しながら「転識とアーラヤ識の関係」を検討する。その上で、「分別事識とアーラヤ識の関連性」を考察する。

2.3.2 『楞伽經』における八識説

『楞伽經』が八識説に基づいて唯識思想を説いているのはよく知られている⁷⁸。しかし高崎 [1981c] が指摘しているように⁷⁹、マナス（染汚意）についての描写が少なく、その性格が不明であるせいか、『楞伽經』にはマナスが説かれていないとする見解もある⁸⁰。確かに、『楞伽經』にはマナスに対する明確なイメージはないが、「八識」を明記しているので、マナスの独立を認めていると言えるであろう。それを例文の中で確認すれば、次のようである⁸¹。

⁷⁶ ここでは便宜のため、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』の漢訳を採用する。また「相続と相」の場合は、もともとは諸識の生・住・滅の分類法として説かれているが、その内容からすれば識の分類法に属すると言えるであろう。同じく「転識とアーラヤ識」も分類法の一つとして数えられるであろう。

⁷⁷ 安井 [1972: p.3] 参照。

⁷⁸ 『楞伽經』の八識説に関する詳しい内容は次の論文を参照されたい。安井 [1972]、舟橋 [1976: pp.128-137] 参照。

⁷⁹ 高崎 [1981c: p.75] 参照。

⁸⁰ 勝又 [1961: p.660] は、「染汚意を取り上げてとくにその概念を明確にする所がない。これは楞伽經には、染汚意別体の考えが生じていない証拠である。染汚意が独立の地位を占めるに至ったのは『摂大乘論』である。」とする。

⁸¹ 散文中の用例のみを挙げておく。

マハーマティが尋ねた。「世尊によって八識が設定されたのではありませんか。」世尊が仰せになった。「マハーマティよ、設定された。」⁸²

マハーマティよ、自〔相〕・共相・外界の唯自心所現を理解する八識身が三解脱無漏に対する悪い分別によって完全に断絶されるから、つまり〔八〕識の仏が悪心によって血を出すから、無間業のあるものといわれる。⁸³

世尊が仰せになった。「マハーマティよ、実はその中に三性が包摂される。また八識、そして二無我が〔包摂される〕。」⁸⁴

善・不善〔の一切法〕は八識である。八とは何か。即ちアーラヤ識といわれる如来蔵と意と意識と外道によって説かれた五識身である。⁸⁵

■ **要約** 以上から分かるように、『楞伽經』は「八識」、あるいは「八識身」という術語をもって、識が八つであることを明言している。

2.3.3 転識とアーラヤ識

すでに述べたように、『楞伽經』の中では諸々の識がいくつかの方法で分類されている。その中、「転識とアーラヤ識」という分け方がある。ところで、その転識 (*pravṛttivijñāna*) という語が何を指しているのか、すなわち何の識が転識に含まれるかは、これから『楞伽經』の識説を考察する上で重要な意味を持つので、以下においてそれを検討する。その際、他の唯識文献、すなわち転識の用例が見られる『摂大乘論』、『中辺分別論』、『三性論』、『中辺分別論釈疏』、『唯識三十論』において

⁸² LAS p.126.13–14: mahāmatir āha nanu bhagavatāṣṭau vijñānāni vyavasthāpitāni | bhagavān āha vyavasthāpitāni mahāmate |

⁸³ LAS pp.138.18–139.3: svasāmānyabāhyasvacittadṛśyamātrāvabodhakānām mahāmate astānām vijñānakāyānām vimokṣatrayānāsravaduṣṭavikalpenātyantopaghātād vijñānabuddhasya duṣṭacittarudhirotpādanād ānantaryakārīty ucyate |

ただし、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』では七識身とする。

⁸⁴ LAS p.227.9–11: bhagavān āha | atraiva mahāmate trayāḥ svabhāvā antargatā aṣṭau ca vijñānāni dve ca nairātmye |

⁸⁵ LAS p.235.6–9: kuśalākuśalāḥ punar mahāmate yad utāṣṭau vijñānāni | katamāny aṣṭau, yad uta tathāgatagarbhālayavijñānasamśabdito mano manovijñānaḥ ca pañca ca vijñānakāyās tīrthyānuvarṇitāḥ |

高崎 [1981a: pp.58–59] 参照。

は転識がどのように説明されているかを概観し、その結果を踏まえた上、『楞伽経』の転識を考察する。

2.3.3.1 『摂大乘論』

まず『摂大乘論』の転識に関する記述から検討する。

さらにまた、これ以外の転識というものは、すべての身体と趣において、享受あるものとして見られるべきである。⁸⁶

ここはアーラヤ識と転識の関係を説明している箇所で、‘これ以外’の‘これ’は、その前後の文脈によれば、アーラヤ識を指している。続く段落では、

これら二種の識は、[相互に]一つが[他の]一つの[因]縁となるものである。⁸⁷

とある。ここで‘二種の識’とはアーラヤ識と転識を指している。

異熟[識]と転識との両者は相互に縁となって起るからである。⁸⁸

以上によれば、『摂大乘論』には転識とアーラヤ識が相互に原因であると説かれているだけで、転識の具体的な内容は説明されていない。ただし、『摂大乘論』には染汚意が説かれており、上記の例文で、アーラヤ識とそれ以外のものとして転識を想定していることから、染汚意が転識に含まれていると推定されるが、しかし断定はできない⁸⁹。

2.3.3.2 『中辺分別論』

⁸⁶ MS p.30.25–26: yang 'jug pa'i rnam par shes pa gzhan gang yin pa de ni lus dang 'gro ba thams cad du nye bar spyod pa can du blta ste |

⁸⁷ MS p.31.14: rnam par shes pa de gnyis ni gcig gi rkyen gcig yin te |

⁸⁸ MS p.97.5–7: rnam par smin pa dang 'jug pa'i rnam par shes pa dag phan tshun du gyur pas 'byung ba'i phyir ro |

⁸⁹ 長尾 [1982: p.171, 402, 403] によれば、『摂大乘論』では、転識が六識を示している場合も、七識を示している場合もある。

次に、上記『撰大乘論』の一番目の例文には続きがあり、「享受あるもの」の傍証として『中辺分別論』の偈頌が引用されている。『中辺分別論』の散文註釈の中に転識についての言及があるので、以下においてその引用箇所を検討する。

「一つは原因としての識であり、二番目 [の識] が享受に関係するものである。そこ（二番目の識）には、享受、判別、動かすものである諸々の心作用がある。」（I.9）

アーラヤ識は、それ以外の諸々の識の原因であるから、「原因としての識」である。それ（アーラヤ識）を原因とする転識が、「享受に関係するもの」である。「享受」とは受である。「判別」とは想である。識を「動かすもの」とは行である。すなわち思、作意など [の諸々の心作用] である。⁹⁰

下線で示したように、『中辺分別論』によれば、アーラヤ識が転識の原因であり、転識が「享受に関係するもの」の同義語とされており、上記『撰大乘論』の理解と一致していることが分かる。ところが、ここには転識が七つであるとは明記されていない。

また他の箇所には次のような例がある。

仮説を伴い、原因を伴う相の故に、
また寂静とその内容から、最後のものが説かれた。

その中で、仮説（*prajñapti*）とは名の集合などである。原因（*hetu*）とは種子に包含されるアーラヤ識である。相（*nimitta*）とは「場所・身体・享受物」「*pratiṣṭhā-deha-bhoga*」に包含される [アーラヤ識]。そして、転識（*pravṛttivijñāna*）に包含される「意・執取・分別」（*mana-udgraha-vikalpa*）をいう。この仮説を伴い、原因を伴い、相応 [の心所] を伴う相が有為であると知られるべきものである。その中で、意とは常に思惟を姿とする。執取とは五識身である。分別とは意識である。それ（意識）が分別をするからである。⁹¹

⁹⁰ MAVBh p.21.1–6: *ekaṃ pratyayavijñānaṃ dvitīyaṃ aupabhogikam |*

upabhoga-pariccheda-prerakās tatra caitasāḥ || I.9 ||

ālaya-vijñānam anyeṣāṃ vijñānānaṃ pratyayatvāt pratyaya-vijñānaṃ | tat-pratyayaṃ pravṛtti-vijñānaṃ aupabhogikam | upabhogo vedanā | paricchedaḥ saṃjñā | prerakāḥ saṃskārā vijñānasya cetanā-manaskārādayaḥ |

⁹¹ MAVBh p.48.6–14: *saprajñaptisahetukāt |*

nimittāt praśamāt sārthāt paścimaṃ samudāhṛtam || III.22def ||

ここでは、転識に「意・執取・分別」の3つが含まれるとされ、それぞれ、意と五識身と意識と解釈されている。したがって、転識が七つであることが確認された⁹²。

2.3.3.3 『三性論』

次に、世親の著作とされる⁹³『三性論』にはどのように述べられているか検討する。
『三性論』第六偈には次のような記述がある。

その心は、因であることと果であることとによって、二種に考えられる。すなわち、[一は] アーラヤと名づけられる識であり、[もう一は] 起こっている [識] と名づけられる七種のもの（七転識）である。⁹⁴

以上、『三性論』は、原因であるアーラヤ識から転識が生起することを説いており、さらに転識が七種であると明記している。従来、『三性論』の著者問題については議論があり、世親作として扱うには注意が必要である。しかし、もし『三性論』が世親の真作であるとすれば、世親には転識を七識として見る理解があったことになる。

2.3.3.4 『中辺分別論釈疏』

続いて、上記の2.3.3.2で検討した『中辺分別論』第一章「相品」の第九偈について註釈している『中辺分別論釈疏』の記述を検討し、転識とアーラヤ識の関係に関する安慧の理解を考察する。

tatra prajñaptir nāmakāyādayaḥ | hetur bījasamgrhītam ālayavijñānam | nimittam
pratiṣṭhādehabhogasamgrhītam | pravṛttivijñānasamgrhītaś ca manaudgrahavikalpāḥ | etat
saprajñaptisahetukaṃ nimittam sasamprayogaṃ samskṛtam veditavyam | tatra mano yan nityam
manyānākāram | udgrahaḥ pañcavijñānakāyāḥ | vikalpo manovijñānam (|) tasya vikalpakatvād |

⁹² 因みに、『中辺分別論』は第一章「相品」において「染汚意」を明記している。

MAVBh p.18.25: ātmapratibhāsam kliṣṭam manaḥ | (「自我として顕現する」とは汚れた意である。)

⁹³ 『三性論』の著者問題については、兵藤 [2010: p.29] 註 (48)、塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著 [1990: p.367] 参照。

⁹⁴ TSbh p.125–126: tad dhetuphalabhāvena cittam dvividham iṣyate | yad ālayākhyavijñānam
pravṛttyākhyam ca saptadhā ||

長尾 [1976a: p.197] 参照。

「一つは縁識であり」

云々と詳述される、その中で「一つ」とはアーラヤ識である。他の七つの識の因縁という本性 [を持っている] から原因である。したがって「縁識」なのである。

「第二が享受あるものである」

について、「識」と [いう語] が継起する。「その（縁識の）結果」と [いう語を] 補って理解すべきである。

さらにそれ（享受あるものとしての識）は七種である。転識が享受を要求するので「享受あるもの」なのである。

「その（第二の識の）中に享受、判別、動かすものである諸々の心作用がある」

について、「その」（第二の）識の「中に」おける「諸々の心作用」なるものもまた、「その（縁識の）結果」 [という語に] 結びつく。なぜならば、[諸々の心作用は] 識と一体となり運命を共にするものであるからである。⁹⁵

実にアーラヤ識が他の識の縁性であるから縁識と言い、一切の有漏の法がそこに果というあり方で、またそれ（識）がそれ等（一切有漏法）に因というあり方で（蔵せられる）からアーラヤである。有情と器世間とを知らしめるから〈vijñāpanāt〉顕現相によって識〈vijñāna〉である。それはまた一向に異熟性であるから無記である。一切の有漏の法の種子が繫属せられ、また他の転識の因縁であるから縁識である。それを縁とする転識が有受用であるとは、アーラヤ識を縁として起こることと、それ（アーラヤ識）を縁として生ずるという意味である。どのようにして生起するのか、所以はアーラヤ識から転識が生ずる時、それ（転識）と同じ種類の未生の転識を生ぜしめる種子をアーラヤ識に生長せしめる。その生長した種子から転識の差別を得て再びそれと種類の同じき転識が生起すると言う。かくの如くそれ（アーラヤ識）を縁として転識があるのである。⁹⁶

⁹⁵ 山口 [1935: pp.52–53] 参考.

⁹⁶ MAVṬ pp.32–33:

ekam pratyayavijñānam

iti vistaraḥ | tatraikam ity ālayavijñānam | śeṣāṇām saptānām vijñānānām hetupratyayabhāvena hetur
iti pratyayavijñānam |

dvitīyam aupabhogikam |

iti | vijñānam ity anuvartate | tatphalam iti vākyaśeṣaḥ | tat punaḥ saptavidham pravṛttivijñānam

以上、『中辺分別論釈』は「享受あるもの」が「転識」であると定義し、さらにそれは七種であることを明らかにしている。そして『中辺分別論』の理解と同様に、アーラヤ識が他の七種の識の原因であると説明していることが分かる。それゆえ、この箇所を見る限り、安慧は転識をマナスを含む七識として理解していたと考えられる。

2.3.3.5 『唯識三十論』

しかし、安慧釈『唯識三十論釈』では解釈が異なっている⁹⁷。『唯識三十論釈』には、

そして、等流の潜在印象（習気）が、発動することによって、〔六〕転識と染汚意とが、アーラヤ識から現生することである。⁹⁸

とある。下線で示したように、転識（現前識）と染汚意とは明らかに区別されており、その両者はアーラヤ識に基づいて生起するのである。これを上記の『中辺分別論

upabhogaprayojanatvād aupabhogikam |

upabhogapricchedaprerakās tatra caitasāḥ ||

iti | tatra vijñāne ye caitasās te'pi tatphalam *iti sambandhaḥ* |

vijñānatvād ekayogakṣematvāc ca |

ālayavijñānam anyeṣāṃ vijñānānām pratyayatvāt pratyayavijñānam iti |

āliyante sarve sāsravā dharmās tatra phalabhāvena tac ca teṣu hetubhāvenety ālayaḥ |

sattvabhājanalokavijñāpanāt tannirbhāsatayā vijñānam | tac caikāntavipākatvād avyākṛtaṃ |

sarveṣāṃ sāsravānām dharmānām bījam anubadhyate anyeṣāṃ ca pravṛttivijñānānām hetupratyayo

bhavatīti pratyayavijñānam | tatpratyayaṃ pravṛttivijñānam aupabhogikam iti | tasmād ālayavijñānāt

pratyetīti | tatpratyayaṃ utpadyata ity arthaḥ | katham utpadyate | pravṛttivijñānam hy ālayavijñānāt

pravartamānam anutpannasya tadjātīyasya *pravṛttivijñānasyotpādakaṃ bījam ālayavijñāne*

paripuṣṇātī | *tasmāt paripuṣṭabījāt pariṇāmaviśeṣalābhāt* punas tadjātīyaṃ pravṛttivijñānam utpadyata

ity evaṃ tatpratyayaṃ pravṛttivijñānam bhavati |

武内 [1979: pp.186–187] 参照。

⁹⁷ 武内 [1979: p.186] 参照。

⁹⁸ TrBh p.18.8–10: niṣyandavāsanāvṛtilābhāc ca | yā pravṛttivijñānānām klišṭasya ca manasa ālayavijñānād abhinirvṛttih |

積疏』の記述と比べれば、転識がアーラヤ識を原因とするという点においては同じ理解を示しているが、転識と染汚意との関係については異なった理解を示している。

■要約 検討した結果をまとめると次のようになる。

- ・アーラヤ識と転識との関係については、『撰大乘論』、『中辺分別論』、『三性論』、『中辺分別論釈疏』、『唯識三十論釈』、いずれの文献においても共通の理解が見受けられる。すなわち、すべての文献において、アーラヤ識が転識の生起の原因であると述べられている。

- ・転識の内容については文献毎に相違がある。

まず無着の『撰大乘論』には、転識とアーラヤ識が相互に原因であると説かれているだけで、転識の具体的な内容は説明されていない。

次に世親の場合は、『中辺分別論釈』においては転識が七識であるとは明言していないが、七識として捉えていた可能性はある。一方、『三性論』においては転識が七識であると明記している。

最後に安慧の場合、『中辺分別論釈疏』においては、転識に第七識（染汚意）を入れて七識として設定しているが、『唯識三十論釈』においては第七識（染汚意）と転識とを区別して転識には六識のみを配当している。

2.3.3.6 『楞伽經』

それでは、上記の結果を踏まえた上で、『楞伽經』における転識とアーラヤ識の関係を検討する。

たとえば、マハーマティよ、土の諸極微から土の塊は別でなく、非別でもないように、そのように金は[金で作られた]装飾品から[別でもないし、非別でもない]。

また、マハーマティよ、もし土の塊が土の諸極微から別であるとすれば、それら（諸極微）によって[土の塊は]作られるものでないであろう。しかし、それら土の諸極微によってそれ（土の塊）は作られるものである。それゆえに、[土の塊は土の諸極微と]別ではない。もし[その両者が]別でないとなれば、土の塊と[土の]極微との二つにおいて区別がないのであろう。⁹⁹

⁹⁹ LAS [1.5]: tad yathā mahāmate mṛtparamāṇubhyo mṛtpiṇḍo na cānyo nānanyas tathā suvarṇam bhūṣaṇāt | yadi ca mahāmate mṛtpiṇḍo mṛtparamāṇubhyo 'nyaḥ syāt tair nārabdhaḥ syāt sa cārabdhas tair mṛtparamāṇubhiḥ tasmān nānyaḥ | athānanyaḥ syāt mṛtpiṇḍaparamāṇoḥ pratibhāgo na syāt | 本論文の校訂テキスト 1.5 参照。

ここでは二つの喩えを挙げている。すなわち、土と極微の関係や金と金で作られた飾りの関係がそれである。伝えようとする内容は、両者の間に同異の区別がないということである。この例に続いて、

マハーマティよ、全く同じように、もし諸転識 (pravṛttivijñāna) がアーラヤ識の真相とは別であるとすれば、[諸転識は] アーラヤ識を原因とするものではないものになるであろう。もし[その両者が] 別でないとしたら、転識の消滅がアーラヤ識の消滅になるであろう。しかし、それ(転識の消滅)は自分の真相の消滅 (svajātilakṣaṇanirodha) ではない。それゆえに、マハーマティよ、諸[転]識の自分の真相の消滅ではなく、[諸転識の] 業相 (karmalakṣaṇa) の消滅である。

また、自分の真相が消滅しつつあるとすれば、アーラヤ識の消滅があるであろう。そして、もしアーラヤ識が消滅しつつあるとすれば、この主張は外道の断滅論と区別のないものになるであろう。

マハーマティよ、外道たちのこの主張は、すなわち対象を把捉することの停止から識の連続 (prabandha) の停止があり、識の連続の停止から無始時来の連続の断絶 (vyucchitti) があるであろう [ということである]。¹⁰⁰

とある。すなわち、転識はアーラヤ識を原因とするものであり、転識の消滅はアーラヤ識の消滅でない。上記の喩えと照らし合わせてみれば、アーラヤ識は転識の根本的な原因であり、転識という姿、状態が消滅したとしても、それが直ちにアーラヤ識の消滅を意味するのではないということである。

次に、転識とアーラヤ識との関係については以下のような記述がある。

マハーマティよ、これらの四つの原因によって、瀑流 (ogha) の中の水に位置づけられるべきものであるアーラヤ識から転識という波が生じる。マハーマティよ、例えば眼識のように、そのように[諸識は]すべての感覚器官と毛穴

¹⁰⁰ LAS [1.6]: evam eva mahāmate pravṛttivijñānāny ālayavijñānajātilakṣaṇād anyāni syur anālayavijñānahetukāni syuḥ | athānanyāni pravṛttivijñānanirodha ālayavijñānanirodhaḥ syāt sa ca na bhavati svajātilakṣaṇanirodhaḥ | tasmān mahāmate na svajātilakṣaṇanirodho vijñānānām kiṃ tu karmalakṣaṇanirodhaḥ | svajātilakṣaṇe punar nirudhyamāna ālayavijñānanirodhaḥ syāt | ālayavijñāne punar nirūpyamāṇe nirviśiṣṭas tīrthakarocchedavādenāyaṃ vādaḥ syāt | tīrthakarāṇām mahāmate ayaṃ vādo yad uta viṣayagrahaṇoparamād vijñānaprabandhoparamo bhavati vijñānaprabandhoparamād anādikālaprabandhavyucchittiḥ syāt | 本論文の校訂テキスト 1.6 参照.

の [ような多数の] 極微 [からなるもの] において [対象を認識する] , 同時に生じる [或は] 順次に [生じる] 対象を鏡の [中に映る] 影像として見るように.

マハーマティよ, [転識は] 海にとって風に吹かれたもののように, 対象という風によって心という海の [上に起こった] 波のようなものであり, 断たれていない原因の作用 (kriyā) を特徴とするものであり, 同異を離れたものであり, 業・真相と完全に結合しているものである.¹⁰¹

ここでも, 上記のように二つの喩えが説かれている. 一つ目は, 水の流れと波の喩えであり, 二つ目は, 海と波の喩えである. その趣旨は前と同じく, 水の流れと海に喩えられるアーヤ識から, 波に喩えられる転識が生じると説明している. なお, 風という条件が発生した時, 転識が生じるとも説いている. その中で, 海と波の喩えは『解深密経』にも用例が見られるので, 参考資料として挙げておく.

ヴィシャーラマティよ, 例えば大きな河が流れているところに, もし一つの波が生じるための条件が近在した場合, 波も一つだけ生じる. もし二つの波, あるいはもし多く (の波) が生じるための条件が近在した場合, 多くの波が生じるが, その河は自己の相続として相続が絶たれることにもならないであろうし, 完全に尽きることにもならないであろう.¹⁰²

以上, 波というのは河から生じるものであり, ある条件が満たされた時に生じると述べられている. 前述の, 風 (条件) によって海から波が生じるという説明と類似している.

また『楞伽経』第六章に次のような記述が見られる.

¹⁰¹ LAS [4.2.2]: ebhir mahāmate caturbhiḥ kāraṇair oghāntarajalasthānīyād ālayavijñānāt pravṛttivijñānatarāṅga utpadyate | yathā mahāmate cakṣurvijñāna evaṃ sarvendriyaparamāṇuromakūpeṣu yugapat pravṛttikramaviṣayādarśabimbadarśanavat udadheḥ pavanāhatā iva mahāmate viṣayapavanacittodadhitarāṅgā avyucchinna hetukriyālakṣaṇā anyonyavinirmuktāḥ karmajātilakṣaṇasuvinibaddhāḥ |

¹⁰² P No.774, 14a4-5: blo gros yangs pa | 'di lta ste dper na | chu'i klung chen po 'bab pa la gal te rlabs gcig 'byung ba'i rkyen nye bar gnas par gyur na | rlabs kyang gcig kho na 'byung ngo || gal te rlabs gnyis sam gal te rab tu mang po dag 'byung ba'i rkyen nye bar gnas par gyur na | rlabs rab tu mang po dag 'byung zhing chu'i klung de rang gi rgyun gyis rgyun 'chad par yang mi 'gyur la | yongs su zad par yang mi 'gyur ro ||

如来と [いう言葉で] いわれるアーラヤ識が転依しないとき、七転識の滅はない。これは何故かといえば、諸識はそれ（アーラヤ識）を原因とし所縁として生起するからである。¹⁰³

この箇所では明らかに転識が七つであると説いている。『楞伽経』全体を通じて七転識に言及する唯一の例文である。また、「それを原因とし、所縁として生起する」の「それ」は、前後の内容から見てアーラヤ識を意味しているので、『楞伽経』において説かれている、転識とアーラヤ識に関する教説は上記の一文で要約されると考えられる。すなわち、「七種の転識はアーラヤ識を原因とし、所縁として生起する」のである。

■ 要約 以上の考察の結果をまとめる。

- ・ 転識とアーラヤ識の関係については、『楞伽経』も他の唯識文献も共通の理解を示している。すなわち、アーラヤ識が根本的な原因であって、そのアーラヤ識から転識が生じると説明している。
- ・ 『楞伽経』では、転識が七つであると明言している。このことに関しては、安慧の『中辺分別論釈』と世親の『三性論』の理解が一致する。ところで、安慧の『唯識三十論釈』の中では第七識（染汚意）と転識とを区別し、転識は六識としている。

2.3.3.7 まとめ

本節では、「転識とアーラヤ識の関係」と「転識の内容」を中心に、『楞伽経』や他の唯識文献の用例を検討した。要点をまとめると以下のようなになる。

■ 転識とアーラヤ識の関係

まず、転識とアーラヤ識の関係については、文献の間に相違点は見られない。アーラヤ識が根本原因で、アーラヤ識から転識が生じる、という一文で要約できる。

■ 転識の内容

¹⁰³ LAS p.221.12–14: aparāvṛtte ca tathāgatagarbha(śabda)saṃśabdita ālayavijñāne nāsti saptānām pravṛttivijñānānām nirodhaḥ | tat kasya hetoḥ | taddhetvāmbanapravṛttatvād vijñānānām.....
高崎 [1981a: p.6] 参照。

しかし、転識の内容に関しては文献によって解釈が異なっている。まず、無着の『撰大乘論』と世親の『中辺分別論釈』には、転識の数については具体的に説かれていない。次に、『三性論』では転識を七識と明記している。最後に、安慧の場合は、『中辺分別論釈疏』においては転識が七識であると説いているが、『唯識三十論釈』の中では第七識（染汚意）と転識とを区別して転識には六識のみを配当している。

『楞伽經』では、アーラヤ識と七転識とを分けて説明している。

2.3.4 「分別事識」とアーラヤ識の関連性

次に、以下においては、『楞伽經』の特徴的な識説としてよく取り挙げられる「現識と分別事識」の中で、アーラヤ識との関連性が伺える「分別事識」を中心に考察を進める。

2.3.4.1 「分別事識」に関する諸見解

まず、次の記述から検討する。

〈例1〉 マハーマティよ、八つの特徴によって説かれた識は、まとめると、二種類である。〔すなわち〕現識と分別事識とである。¹⁰⁴

前節において、『楞伽經』には八識説が説かれていることを確認した。これを前提として考えれば、ここの「八つの特徴によって説かれた識」というのは、八識を指していると考えられる。因みに、「八つの特徴」という語は、下線で示したように諸本の中で確認できる。

¹⁰⁴ 本論文の『テキスト・訳註研究』の中でそれぞれの分節番号 1.3 参照。

dvididham mahāmate vijñānam samkṣepenāstalaksanoktam khyātivijñānam
vastuprativikalpavijñānam ca |

blo gros chen po mtshan nyid brgyad du gsungs pa'i rnam par shes pa ni mdor rnam pa gnyis te |
snang ba'i rnam par shes pa dang | dngos po so sor rnam par rtog pa'i rnam par shes pa'o ||

(求) 大慧。略説有三種識。廣説有八相。何等爲三。謂眞識現識及分別事識。

(菩) 大慧。有八種識。略説有二種。何等爲二。一者了別識。二者分別事識。

(実) 大慧。識廣説有八。略則唯二。謂現識及分別事識。

(求) = 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』

(菩) = 菩提留支訳『入楞伽經』

(実) = 実叉難陀訳『大乘入楞伽經』

『楞伽經』はその八識を「現識」と「分別事識」との二つに分けているが、ただ、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』のみが「真識」「現識」「分別事識」の三つを挙げている。これについて高崎 [1980] が指摘しているように、八識を「現識」と「分別事識」との二つ対応させるには問題があると判断して、求那跋陀羅が「真識」を挿入したと考えられる¹⁰⁵。すなわち、求那跋陀羅は「現識」と「分別事識」を六識或いは七識の分類として理解していたので、それに「真識」を加えなければ八識にならないと考えたのであろう。これは「分別事識」に関する理解と直接関わる問題である。

それでは以下において、「現識」と「分別事識」に関する、註釈文献や研究者の理解はどうなっているのか簡単にまとめておく。

- ① 『聖入楞伽經註』¹⁰⁶ : 「現識」 = 前五識, 「分別事識」 = 第六意識
- ② 勝又 [1961]¹⁰⁷ : 「現識」 = アーラヤ識の顕現する方面 = 業相,
「分別事識」 = 意 (マナス) と意識 = 転相 (転識)
- ③ 安井 [1972]¹⁰⁸ : 「現識」 = 前五識, 「分別事識」 = 第六意識
- ④ 高崎 [1980]¹⁰⁹ : 「現識」 = 前五識, 「分別事識」 = 第六意識,

以上、安井 [1972] は『聖入楞伽經註』に基づいて「現識」と「分別事識」を理解したように見受けられる。しかし、『楞伽經註』の解釈は、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』の理解と同様、八識説に立っていない矛盾点があるから、「現識」と「分別事識」に関してこの見解をそのまま取り入れるには問題がある。高崎 [1980] も基本的に①と②の解釈に同意している。そして勝又 [1961] は、アーラヤ識の持つ二つの側面の中、無始時來の根本無明によって顕現する方面が「現識」であるとしているだけで、具体的に「現識」が何を指しているかに関しては説明していない。また、「分

¹⁰⁵ 高崎 [1980: pp.136, 139] , 菅沼 [1976: p.87] 参照.

¹⁰⁶ 「マハーマティよ、現識と分別事識、その二つは」というのは、対象の形象を理解する諸識のことである。現識は眼などの [五] 識の範囲に [あるものである]。分別事識は意識である。

LASV P78b1-2, D67b6-7: blo gros chen po snang ba'i rnam par shes pa dang dngos po so sor rnam par rtog pa'i rnam par shes pa de gnyis ni zhes bya ba yul gyi rnam par chud pa'i rnam par shes pa dag go | snang ba'i rnam par shes pa ni mig la sogs pa'i rnam par shes pa'i bar du 'o || dngos po so sor rnam par rtog pa'i rnam par shes pa ni / yid kyi rnam par shes pa'o ||

高崎 [1981: p.87] 参照.

¹⁰⁷ 勝又 [1961: pp.337, 624, 625] 参照.

¹⁰⁸ 安井 [1972: pp.5-7] 参照.

¹⁰⁹ 高崎 [1980: p.136] 参照.

別事識」がマナスと意識を指すとし、それが転識であるとする。すなわち 勝又 [1961] の理解によれば、転識に前五識が含まれていないことになる。『楞伽經』ではマナスを転識に含めているから、これは勝又 [1961] の誤解であろう。

このように、「分別事識」に関する理解は一定していない。

2.3.4.2 「分別事識」の二の原因

それではもう一度『楞伽經』の記述に戻り、「分別事識」の意味を再検討する。まず、説明文の中で説かれている「分別事識」の原因から整理する。

〈例 2〉 マハーマティよ、その中で現識は、不可思議なる潜在印象の転変を原因とするものである。またマハーマティよ、分別事識は、①対象の分別を原因とするものであり、②また無始時來の戲論の潜在印象を原因とするものである。¹¹⁰

上記の記述は、「分別事識」の二つの原因、すなわち「対象の分別」と「無始時來の戲論の潜在印象」に関して説明している。ところが、「分別事識」に言及するのは『楞伽經』でもここ一箇所だけなので、これ以上『楞伽經』から「分別事識」の内容に関する直接的な情報を得ることはできない。

2.3.4.3 「分別事識」の意味

¹¹⁰ 本論文の『テキスト・訳註研究』の中でそれぞれの分節番号 1.3 参照。

tatra khyātivijñānaṃ mahāmate 'cintyavāsanāpariñāmahetukaṃ vastuprativikalpavijñānaṃ ca mahāmate viśayavikalpahetukaṃ anādikālaprapañcavāsanāhetukaṃ ca ||

blo gros chen po de la snang ba'i rnam par shes pa ni bsam gyis mi khyab pa'i bag chags yongsu 'gyur ba'i rgyu las byung ba'o || blo gros chen po dngos po so sor rnam par rtog pa'i rnam par shes pa ni yul la rnam par rtog pa'i rgyu las byung ba dang | thog ma med pa'i dus kyi spros pa'i bag chags kyi rgyu las byung ba'o ||

(求) 大慧。不思議薰。及不思議變。是現識因。大慧。取種種塵。及無始妄想薰。是分別事識因。

(菩) 大慧。了別識不可思議熏變因。大慧。分別事識分別取境界。因無始來戲論熏習。

(実) 大慧。現識以不思議熏變為因。分別事識。以分別境界及無始戲論習氣為因。

(求) = 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』

(菩) = 菩提留支訳『入楞伽経』

(実) = 実叉難陀訳『大乘入楞伽経』

そこで、以下において、「分別事識」の二つの原因に焦点を合わせて、関連する用例を『楞伽經』の中から取り上げて検討する。

■ 対象の分別

まず、二つの原因の中‘対象の分別’ (viṣayavikalpa) から検討する。

〈例 3〉 マハーマティよ、わたしの教説においては分別をともなう意識¹¹¹の滅が涅槃といわれる。¹¹²

この一文によれば、分別を意識の機能として理解していることがわかる。この理解と、「分別事識」の原因となっている「対象の分別」とを合わせて考えると、対象 (viṣaya) を分別することは意識の機能と言えるであろう。したがって、「対象の分別を原因とする」とは、「(意識の機能である) 対象の分別を原因とする」という意味に解釈できる。

それでは次に、意識とアーラヤ識の関係を検討する。上記の例文に続いて『楞伽經』では次のように説いている。

〈例 4〉 さらに、マハーマティよ、対象を判別することに対する執着によって生じつつある意識は、諸々の潜在印象によってアーラヤ識を長養する。¹¹³

ここでは、対象を判別しながら活動している意識は、潜在印象でアーラヤ識を長養する、とされる。すなわち、活動している意識がアーラヤ識を長養するというのである。この記述と上記の引用箇所〈例 2〉の①を合わせて考えれば、「意識が活動しているとき、つまり意識が対象を分別しているとき、その意識は潜在印象をもってアーラヤ識を長養する」ことになる。

◆ 要約 以上をまとめると、次のようになる。

¹¹¹ 意識が vikalpaka であることは『中辺分別論』 III.22 でも確認できる。本論文 p.18 参照。

¹¹² LAS p.126.11–12: matpravacane punar mahāmate vikalpakasya manovijñānasya vyāvṛttir nirvāṇam ity ucyate |

¹¹³ LAS pp.126.18–127.1: manovijñānaṃ punar mahāmate viṣayaparichedābhiniveśena pravartamānaṃ vāsanābhir ālayavijñānaṃ prapuṣṅāti |

高崎 [1981c] , 久保田 [1991] 参照。

- ・「対象の分別を原因とするものである分別事識」とは「対象の分別」は意識の活動であり、そのような「意識の活動によって長養されるアーラヤ識」とは、「対象の分別によって長養されるアーラヤ識」ともいえるであろう。すなわち、「対象の分別が原因でアーラヤ識が長養される」ということなのである。したがって、「対象の分別を原因とする」分別事識は、同じく「対象の分別を原因とする」アーラヤ識を指していると考えられる。

アーラヤ識のことである。

■ 無始時來の戲論の潜在印象

それでは次に、「無始時來の戲論の潜在印象」(anādikālaprapañcavāsanā) という原因について検討する。

◆ 『楞伽經』

「無始時來の戲論の潜在印象」に関連して、次のような説明がある。

〈例 5〉 無始時來の種々の戲論の麁重の潜在印象によって印象づけられたものであり、アーラヤ識と呼ばれるものである [如来藏] ……¹¹⁴

ところで、すでに前章 2.2 で検討したように、ここで、「無始時來の戲論の麁重の潜在印象によって印象づけられたもの」が指すのは「アーラヤ識」である。したがって、上記の〈例 5〉は、「アーラヤ識は、無始時來の戲論の麁重の潜在印象によって印象づけられたものである。」となる。

〈例 2〉の②の記述、「分別事識は、無始時來の戲論の潜在印象を原因とするものである。」と合わせて考えると、「分別事識」とアーラヤ識はいずれも、「無始時來の戲論の潜在印象」と緊密に関係していることが分かる。

◆ 『顯揚聖教論』

次に、唯識文献の一つである『顯揚聖教論』を取り上げて「分別事識」とアーラヤ識との関連性を検討する。『顯揚聖教論』には、「分別事識」の内容を確定するにあたり、注目すべき以下の記述が見られる。

¹¹⁴ LAS p.220.13–14: anādikālavividhaprapañcadauṣṭhulyavāsanāvāsita ālayavijñānaśabdito……

〈例 6〉 アーラヤ識とは、前 [世] に作られ増長した業と煩惱が条件となり、無始時來の戲論の潜在印象が原因となって生ずるものを言う。¹¹⁵

このように、『顕揚聖教論』に見られるアーラヤ識の説明では、下線部がこれまで見てきた『楞伽經』の説く「分別事識」の内容と重なることがわかる。すなわち、

〈例 2〉の②：分別事識は、無始時來の戲論の潜在印象を原因とするものである。

〈例 6〉：アーラヤ識は、無始時來の戲論の潜在印象が原因となって生ずるものを言う。

となる。したがって、「無始時來の戲論の潜在印象」を原因とする「分別事識」と、「無始時來の戲論の潜在印象」が原因となって生ずるアーラヤ識は、同じものであると考えられる。

◆要約 以上の要点をまとめる。

- ・「無始時來の戲論の潜在印象」という記述との関連から、「分別事識」はアーラヤ識を指していると考えられる。

2.3.4.4 まとめ

本節では、八識の分類法の一つとして挙げられる「現識と分別事識」の中、「分別事識」の意味を、『楞伽經』の記述に沿って検討した。要点を整理すると次のようになる。

■「分別事識」の原因

まず、『楞伽經』の説明によれば、「分別事識」の原因は二つであって、「対象の分別」(viṣayavikalpa)と「無始時來の戲論の潜在印象」(anādikālaprapañcavāsānā)である。

■「分別事識」の意味

¹¹⁵ 『顕揚聖教論』大正蔵 No.1602, p.480c3-4: 阿頼耶識者、謂先世所作増長業煩惱為縁、無始時來戲論熏習為因所生。

その中「対象の分別」とは、『楞伽經』の用例によれば、意識の機能を指している。そして、対象を分別する意識の活動によってアーラヤ識が長養される、と説かれていることから「分別事識」はアーラヤ識を意味していると考えられる。

次に「無始時來の戲論の潜在印象」に関連する用例は『顯揚聖教論』にも見出され、『楞伽經』では「分別事識」の原因として説明されている「無始時來の戲論の潜在印象」が、そこではアーラヤ識発生の原因として述べられている。したがって、「分別事識」がアーラヤ識を意味していることが他の関連する唯識文献によって裏づけられた。

2.3.5 小結

以上、『楞伽經』の特徴的な術語の一つとしてよく言われる「分別事識」の考察のため、「八識説」と「転識とアーラヤ識」を検討し、その結果を踏まえた上で「分別事識」とアーラヤ識の関連性を確認した。以下においてそれをまとめて本章の小結とする。

1. まず、『楞伽經』には八識が説かれており、「八識」あるいは「八識身」という言葉で、識が八つであることを明記している。
2. その八識の区分法の中には、他の唯識文献とも共通している「転識とアーラヤ識」という分け方がある。『楞伽經』では、転識を七転識といい、八識をアーラヤ識とそれ以外の識、つまり七転識に分けている。『三性論』と安慧の『中辺分別論疏』では『楞伽經』と同じく七転識を説いているが、無着の『撰大乘論』や世親の『中辺分別論』には、転識の数について具体的な説明が見られない。
3. 『楞伽經』の説明によれば、「分別事識」は、「対象の分別」(viṣayavikalpa)と「無始時來の戲論の潜在印象」(anādikālaprapañcavāsanā)とを原因とするものとされる。その中「対象の分別」とは、意識の機能を意味している。そのような、対象を分別する意識の活動によってアーラヤ識が長養される、と説かれていることから「分別事識」はアーラヤ識を意味していると考えられる。次に「無始時來の戲論の潜在印象」に関連する用例は『顯揚聖教論』にも見られ、『楞伽經』では「分別事識」の原因とされている「無始時來の戲論の潜在印象」が、『顯揚聖教論』ではアーラヤ識発生の原因とされている。したがって、「分別事識」がアーラヤ識を意味していることが他の唯識文献によって裏づけられた。

4. 以上のことから、「分別事識」に限定して言えば、『楞伽經』の識説は、術語の独自性は認められるものの、内容の相違までは認められない。すなわち、「分別事識」という、他の唯識文献では例を見ない独自の術語が使われてはいるが、その内容を分析してみれば、他の唯識文献でもよく見られる基本的な術語であるアーラヤ識の説明と「分別事識」に関する説明が一致する例がある。

3 結論

従来、『楞伽經』の識説については、術語や説明の内容、学説の構成の特徴から、弥勒・無著・世親に帰せられる初期唯識文献の教説とは系統を異にするものであるとの見解がある。また、『楞伽經』の識説に見られる、他の唯識文献と異なる恣意的な解釈などから、『楞伽經』の識説は、独自の発展を遂げたものでなく、既存の瑜伽行派の識説からの借用であると指摘する研究もある。このような、未だ確定されていない『楞伽經』の識説の特徴を調べるためには、『楞伽經』の主要な術語を中心に、その用例を詳細に検討する必要がある。

したがって、本論文では、『楞伽經』の説くアーラヤ識に焦点を当て、関連する他の唯識文献と比較しながら、アーラヤ識に言及する『楞伽經』の用例を検討し、『楞伽經』におけるアーラヤ識の導入の恣意性や独自性に関して考察することを課題とした。以下において、その結果をまとめる。

■「身体・享受(物)・場所」とアーラヤ識の関係

1. まず、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の3語からなる複合語は、『楞伽經』では基本的に「三界唯心」の文脈において説明されており、その用例を検討した結果、「三界に属するもの」として考えられていることが分かった。そして、複合語を構成しているそれぞれの言葉の意味については、関連する初期唯識文献との比較検討によって、deha は身体、pratiṣṭhā は器世間であることが分かった。ただし、bhoga については文献によって相違があり、認識（五識あるいは六識）として解釈する場合と、認識対象（五境あるいは六境）として解釈する場合がある。『楞伽經』では、その両方を指していると推定される。したがって、本論文では、bhoga の持つ、認識と認識対象としての意味を活かし、「deha-bhoga-pratiṣṭhā」に対して「身体・享受(物)・場所」という訳語を与えた。
2. 次に、アーラヤ識と「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の関係を考察した結果によれば、アーラヤ識は「deha-bhoga-pratiṣṭhā」として顕現するものであることが分かる。また、依他起性を説明する文脈において見られる用例の分析からは、『楞伽經』のアーラヤ識に関する捉え方が、他の関連する唯識文献におけるアーラヤ識の理解と相違ないと考えられる。
3. 最後に、弥勒・無著・世親に帰せられる初期唯識文献（論書）及びその註釈文献の中には、部分的ではあるが deha, bhoga, pratiṣṭhā の語が確認できる。このことから、『楞伽經』と唯識文献間の関連性が伺えるが、その中でも特に、複合語の形が

見られる文献、例えば、「pratiṣṭhā-deha-bhoga」を説いている世親の『中辺分別論積』と、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」の述べられている安慧の『阿毘達磨雜集論』は、言葉遣いからして、最も『楞伽經』に近い文献であると考えられる。また、『楞伽經』のアーラヤ識と関連する用例の中に「虚妄遍計所執性」(abhūtaparikalpitasvabhāva) という術語が見られることから、『摂大乘論』との関連性が伺える。これは注目に値する。

■ 如来蔵とアーラヤ識の関係

1. 『楞伽經』の中で見られる如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述は、次の3つの類型にまとめられる。
 - ・アーラヤ識と呼ばれる如来蔵
 - ・如来蔵と呼ばれるアーラヤ識
 - ・如来蔵であるアーラヤ識
2. 如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述は、「無明住地」(avidyāvāsabhūmi)をはじめ「四住地」のような、『勝鬘經』由来の術語と深く関係していることから、『勝鬘經』との関連性が伺える。
3. 『楞伽經』に見られる「無明住地」という術語には、その原語をめぐって検討すべき問題がある。翻訳年代が古い漢訳やチベット語訳によれば、avidyāvāsabhūmi(「無明住地」と考えられるが、しかし、サンスクリット写本の読みや『楞伽經』の用例の分析によれば、avidyāvāsanābhūmi(「無明習気地」)の可能性も否定できない。

■ 「分別事識」とアーラヤ識の関係

1. まず、『楞伽經』には八識が説かれており、「八識」あるいは「八識身」という言葉で、識が八つであることを明記している。
2. その八識の区分法の中には、他の唯識文献とも共通している「転識とアーラヤ識」という分け方がある。『楞伽經』では、転識を七転識といい、八識をアーラヤ識とそれ以外の識、つまり七転識に分けている。『三性論』と安慧の『中辺分別論積疏』では『楞伽經』と同じく七転識を説いているが、無着の『摂大乘論』や世親の『中辺分別論積』には、転識の数については具体的な説明が見られない。
3. 『楞伽經』の説明によれば、「分別事識」は、「対象の分別」(viṣayavikalpa)と「無始時來の戲論の潜在印象」(anādikālaprapañcavāsanā)とを原因とするものとされる。その中「対象の分別」とは、意識の機能を意味している。そのような、対象を分別する意識の活動によってアーラヤ識が長養される、と説かれていることから「分別事識」はアーラヤ識を意味していると考えられる。次に「無始時來の戲論の

潜在印象」に関連する用例は『顕揚聖教論』にも見られ、『楞伽経』では「分別事識」の原因とされている「無始時來の戲論の潜在印象」が、『顕揚聖教論』ではアーラヤ識発生の原因とされている。したがって、「分別事識」がアーラヤ識を意味していることが他の唯識文献によって裏づけられた。

以上によって、『楞伽経』に説かれているアーラヤ識は、既存の瑜伽行派の術語を採用したものではあるが、『楞伽経』がそれを導入する際に恣意的かつ独自の解釈を施していることが分かる。これが『楞伽経』の説く唯識説の一つの特徴であると考えられる。

本論文では、アーラヤ識に限定して『楞伽経』の識説を考察した。経典全体の識説を理解するためには、他の重要な術語、例えば、五法、三性説、二無我などに関する詳細な検討が望まれるが、これらは今後の課題としたい。

テキスト・訳註研究

凡例

【サンスクリットテキスト】

1. この校訂テキストは南條校訂 *Laṅkāvatārasūtra* (Nj) の第二章「集一切法品」の pp.37-49 までの改訂テキストである。

2. テキスト作成にあたって使用した写本と略号は次のようである。

R	龍谷大学所蔵写本(『梵文佛典写本聚英』)
T3	東大写本 No.328
T4	東大写本 No.329
T6	東大写本 No.332
T7	東大写本 No.327

(*写本の略号に付した番号は高崎 [1981a] による.)

3. 写本の異読については、基本的に R, T6, T7 の読みを提示した。必要に応じて T3, T4 の読みを提示する。

4. 異読を提示する際は、まず、テキストで採用した読みを提示し、その直後にその読みの根拠となる写本を略号で示し、その後セミコロン (;) で区切った上で異読を提示した。不明な文字は () の中に入れて示した。

5. *tatva*, *satva* はそれぞれ正規形の *tattva*, *sattva* に改めた。r の後の子音重複については、重複しない形に改めた。文末の *anusvāra* は m に改めた。これらは一々注記しない。

【チベット語訳テキスト】

1. テキスト作成にあたって使用した版本と略号は次のようである。

D	sDe gde Edition, No.107
P	Peking Edition, No.775

2. 校訂にあたって、D を底本とし、P の異読をあげておいた。

【漢訳】

1. 漢訳は、求那跋陀羅訳、菩提留支訳、実叉難陀訳の順にあげておく。

Chapter II Śaṭṭriṃśatsāhasrasarvadharmasamuccaya

§ 1 [R:16a4, T3:20b5, T4:14b1, T6:18b4, T7:23a4]

1.1

atha khalu mahāmatir bodhisattvo mahāsattvaḥ punar api bhagavantam etad avocat /¹ katividho² bhagavan vijñānānām³ utpādashitinirodho bhavati /⁴ bhagavān āha /⁵ [T3:21a] dvividho mahāmate vijñānānām utpattisthitinirodho⁶ bhavati⁷ na [T7:23b] ca tārkikā⁸ avabudhyante⁹ yad uta prabandhanirodho lakṣaṇanirodhaś ca [R:16b] /¹⁰ dvividha utpādo¹¹ vijñānānām¹² prabandhotpādo¹³ lakṣaṇotpādaś¹⁴ ca /¹⁵ dvividhā sthitiḥ¹⁶ prabandhasthitir¹⁷ lakṣaṇasthitiś¹⁸ ca /¹⁹

1.2

trividham²⁰ vijñānaṃ pravṛttilakṣaṇaṃ karmalakṣaṇaṃ jātila[T6:19a]kṣaṇaṃ ca /²¹

1.3

dvividham mahāmate vijñānaṃ²² saṃkṣepaṇa²³ aṣṭalakṣaṇoktaṃ

¹ /] T7; // R,T6

² -dho] R,T7; -dhau T6

³ vijñānānām] R,T3,T6; vijñānām T7

⁴ /] T7; // R,T6

⁵ /] T7; // R,T6

⁶ -nirodho] R,T3,T7; -rodho T6

⁷ -ti] R,T6; -ti / T7

⁸ tārkikā] T6,T7; tā(kkim)kāḥ R,T3

⁹ -te] R; -te // T6; -te / T7

¹⁰ /] Nj; om. / R,T6,T7

¹¹ utpādo] R,T3,T6; utpādo nirodhānām T7

¹² vijñānānām] R,T3; vijñānām T6; om. vijñānānām T7

¹³ prabandhotpādo] R,T3,T6; prabandhotpādaś T7

¹⁴ lakṣaṇotpādaś] R,T3,T6; om. lakṣaṇotpādaś T7

¹⁵ om. / R,T6,T7

¹⁶ sthitiḥ] R,T6; sthitiḥ / R,T7; sthitaḥ / T3

¹⁷ prabandhasthitir] R; prabandhasthiti T3,T6; prabandhasthitir T7

¹⁸ lakṣaṇasthitiś] R,T3,T7; lakṣaṇāsthitiś T6

¹⁹ om. / R,T6,T7

²⁰ trividham] T6,T7; trividham R,T3

²¹ /] Nj; om. / R,T4,T6,T7

²² vijñānaṃ] R,T3,T4,T7; vijñāna T6

²³ saṃkṣepaṇa] R,T4,T7; saṃkṣapaṇa T3; saṃkṣepaṇa T6

khyātivijñānaṃ¹ vastuprativikalpavijñānaṃ² ca /³ yathā mahāmate
darpaṇasya⁴ rūpagrahaṇam evaṃ⁵ khyātivijñānasyākhyāsyati⁶ khyātivijñānaṃ
ca mahāmate⁷ vastuprativikalpavijñānaṃ⁸ ca dve 'py⁹
ete¹⁰ 'bhinnalakṣaṇe¹¹ 'nyonyahetuke /¹² tatra¹³ khyātivijñānaṃ¹⁴
mahāmate 'cintyavāsanāpariṇāmahetukam¹⁵ vastuprati(Nj38)vikalpa¹⁶-vijñānaṃ¹⁷
ca¹⁸ mahāmate viṣayavikalpahetukam¹⁹ anādikālaprapaṇcavāsanāhetukam ca
//²⁰

1.4

tatra sarvendriyavijñānanirodho²¹ mahāmate²² yad
utā[T7:24a]la[T3:21b]yavijñānasyā[T4:15a]bhūta²³-parikalpavāsanāvaicitrya²⁴-nirodhaḥ
²⁵ eṣa hi mahāmate lakṣaṇanirodhaḥ²⁶ /²⁷ prabandhanirodhaḥ punar
mahāmate yasmāc ca pravartate /²⁸ yasmād iti mahāmate yadāśrayeṇa
yadālabanena²⁹ ca /³⁰ tatra yadāśrayam³¹

¹ -vijñānaṃ] Nj; -vijñānaś ca R,T3,T4; -vijñānaṃ ca T6; -vijñāna T7

² -vijñānaṃ] T6; -vijñānaś R,T3,T4,T7

³ /] Nj; om. / R,T3,T4,T6,T7

⁴ darpaṇasya] R,T7; darpaṇasya T3,T4,T6

⁵ evaṃ] Nj; eva R,T3,T4,T7; evaḥ T6

⁶ -vijñānasyākhyāsyati] T3,T4,T7; -vijñānasya khyāto R,T6

⁷ ins. / T7

⁸ -vikalpa-] R,T3,T4,T6; -vilpa- T7

⁹ 'py] T6; apy R,T3,T7; avy T4

¹⁰ ete] T7; ate R,T3,T4,T6

¹¹ -lakṣaṇe] R,T3,T4,T7; -lakṣaṇo // T6

¹² /] Nj; om. / R,T3,T4,T6,T7

¹³ tatra] R,T3,T6,T7; (.)atra T4

¹⁴ -vijñānaṃ] R,T6,T7; -vijñānam T3,T4

¹⁵ -hetukam] R,T3,T4,T6,T7; -hetukam Nj

¹⁶ -vikalpa] R,T3,T4,T6; -vilpa T7

¹⁷ ins. khyātivijñānaṃ R,T3,T4,T6,T7

¹⁸ ca] T6; cai R,T3,T4; caitan T7

¹⁹ viṣaya-] R,T3,T6,T7; (.)iṣaya- T4

²⁰ //] Nj; / R; om. // T3,T4,T6,T7

²¹ sarvendriya-] T6,T7; sarvendriye- R,T3; sarvendriye- T4

²² ins. / T6

²³ utālayavijñānasyābhūta] R,T3,T4,T6; utālayavijñānarasya abhūta T7

²⁴ -vaicitrya] R,T3,T4,T6; -vacitrya T7

²⁵ ins. / T6

²⁶ lakṣaṇanirodhaḥ] R,T3,T4,T7; lakṣaṇānirodhaḥ T6

²⁷ /] Nj; om. / R,T3,T4,T6,T7

²⁸ om. / R,T3,T4; // T6T7

²⁹ -ālabanena] R,T3,T4; -ālabanena T6; -ālabanena T7

³⁰ om. / R,T3,T4,T6,T7

³¹ -āśrayam] R,T3,T7; -āśrayem T4; -āśrayam T6

anādi¹-kālAprapañcadauṣṭhulya²-vāsanā³ yadālanbanam⁴
svacittadr̥syavijñānaviṣaye⁵ vikalpāḥ⁶ /⁷

1.5

tad yathā mahāmate mṛtparamāṇubhyo mṛtpiṇḍo na cānyo nānanyas⁸
tathā⁹ suvarṇam¹⁰ bhūṣaṇāt¹¹ /¹² yadi ca¹³ mahāmate mṛtpiṇḍo¹⁴
mṛtparamāṇubhyo 'nyah¹⁵ syāt tair nārabdhah¹⁶ syā[T6:19b]t¹⁷ sa
cārabdhas¹⁸ tair mṛ[R:17a]tparamāṇubhiḥ¹⁹ tasmān nānyah²⁰ /²¹ athānanyah
syāt²² mṛtpiṇḍaparamāṇvoḥ²³ pratibhāgo na syāt /

1.6

evam eva mahāmate pravṛttivijñānāny ālayavijñānajātilakṣaṇād²⁴ anyāni²⁵
syur²⁶ anālayavijñānahetukāni²⁷ syuḥ /²⁸ athānanyāni²⁹
pravṛttivijñānanirodha³⁰ āla[T7:24b]yavijñānanirodhaḥ³¹ syāt sa ca na¹

¹ anādi] R,T6,T7; anodi T3; anodi T4

² -dauṣṭhulya] Nj; -dausthulya R; -dauḥṣṭhulya T3; -dauṣṭhulya T6; -dauḥsthulya T4,T7

³ ins. vaicitrya T6

⁴ yadālanbanam] R,T4; ālanbanam T7

⁵ -ye] R,T4,T6; -ya T7

⁶ vikalpāḥ] Nj; vikalpās R,T3,T4,T7; vikalpaḥ T6

⁷ om. / R,T3,T4,T7

⁸ nānanyas] R,T3,T7; nānanyah / T6

⁹ tathā] R,T3,T7; yathā T6

¹⁰ suvarṇam] R,T7; suvarṇam T3; suvarṇa T6

¹¹ bhūṣaṇāt] R,T3,T7; bhūṣaṇād T6

¹² om. / R,T3,T6

¹³ om. ca T6; va T7

¹⁴ -piṇḍo] R,T6; -piṇḍah R,T3,T7

¹⁵ 'nyah] Nj; nyah R,T3,T6,T7

¹⁶ nārabdhah] R,T3,T7; nālabdhah T6

¹⁷ ins. / T7

¹⁸ cārabdhas] R,T6; vārabdhas T7

¹⁹ -paramāṇubhiḥ] R,T3,T7; -paramāṇubhis T6

²⁰ nānyah] R,T3; nānyathāḥ T6; nānya T7

²¹ om. / R,T3,T7

²² syāt] R,T6; syān T7

²³ mṛtpiṇḍaparamāṇvoḥ] R,T3; mṛtpiṇḍaparamāṇoḥ T4; mṛtpiṇḍālanbanenah T6;
mṛtpiṇḍaparamāśvoḥ T7

²⁴ -lakṣaṇād] Nj; -lakṣaṇād yady R; -lakṣaṇādy T3,T7; -lakṣaṇāni yady T6

²⁵ anyāni] R,T3,T7; anyā T6

²⁶ syur] R,T3,T7; syuḥ / T6

²⁷ -hetukāni] R,T3,T6; -hetuni T7

²⁸ om. / R,T3

²⁹ athānanyāni] R,T3,T7; athānyāni T6

³⁰ -nirodha] Nj; -nirodhe R,T3,T4,T6,T7

³¹ -nirodhaḥ] R,T6; -nirodheḥ T3; -nidhaḥ T7

bhavati (*svajātilakṣaṇanirodhaḥ² /³ tasmān⁴ mahāmate na⁵)*
svajātilakṣaṇanirodho⁶ vijñānā[T3:22a]nām kiṃ tu karmalakṣaṇanirodhaḥ⁷ /⁸
svajātilakṣaṇe punar nirudhyamāna⁹ ālayavijñānanirodhaḥ¹⁰ syāt /¹¹
ālaya(Nj39)vijñāne punar nirūpyamāne¹² nirviśiṣṭas¹³
tīrthakarocchedavādenāyaṃ¹⁴ vādaḥ syāt /¹⁵ tīrthakarāṇām mahāmate ayam
vādo¹⁶ yad uta viṣayagrahaṇoparamād¹⁷ vijñānaprabandhoparamo bhavati
vijñā[T4:15b]naprabandhoparamād anādikālaprabandhavyucchittiḥ syāt /¹⁸

1.7

kāraṇataś¹⁹ ca mahāmate tīrthakarāḥ²⁰ prabandhapravṛttiṃ varṇayanti na
cakṣurvijñānasya²¹ rūpālokasamudayata²² utpattiṃ²³ varṇayanti²⁴ anyatra
kāraṇataḥ /²⁵ kāraṇaṃ punar mahāmate
pra²⁶-dhānapuruṣeśvara²⁷-kālānu²⁸-pravādāḥ //²⁹

¹ om. na T6

² -nīrodhaḥ] R,T3; -nīrodhas T6,T7

³ om. / R,T3,T6,T7

⁴ tasmān] T3,T7; tasmāt R,T6

⁵ om. (*.. ..*) R

⁶ svajātilakṣaṇanirodho] R,T3,T4,T7; svajātilakṣaṇānīrodhau T6

⁷ karmalakṣaṇa-] R,T3,T4; karmalakṣaṇā- T6; lakṣaṇa- T7

⁸ om. / R,T3,T6,T7

⁹ nirudhyamāna] Nj; nirupyamāne R,T3,T6; nirupyamānaṃ T4; nirudhyamāne T7

¹⁰ ālayavijñānanīrodhaḥ] R,T3,T7; ālayāvijñānanīrodhaḥ T6

¹¹ om. / R,T3,T7

¹² nirūpyamāne] Nj; nirupyamāne R,T3,T4; nirudhyamāne T6,T7

¹³ nirviśiṣṭas] T7; nirviśiṣṭhaḥ R,T3

¹⁴ tīrtha-] R,T6; tīrthya- T7

¹⁵ om. / T3,T6,T7

¹⁶ vādo] Nj; vādaḥ R,T3,T7; vādaḥ / T6

¹⁷ -ād] Nj; -āt R,T3,T4; -āt / T6,T7

¹⁸ /] R,T7; // T6

¹⁹ -taś] R,T7; -ṇaś T6

²⁰ tīrthakarāḥ] R,T6; tīrthyakarāḥ T7

²¹ cakṣurvijñānasya] R,T7; cakṣūvijñānasya T3

²² rūpālokasamudayata] Nj; rūpālokasamudrapa(..)ta R; rūpālokasamudraparrvata T3;

rūpālokasamudaya T6; lokālokasamudraparrvata T7

²³ utpattiṃ] R,T7; utparttiṃ T6

²⁴ ins. / T7

²⁵ om. / R,T3,T6,T7

²⁶ pra] R,T6; praṇi T7

²⁷ puruṣeśvara] Nj; puruṣaścara T3; puruṣaścira R,T6,T7

²⁸ -aṇu] R,T6,T7; -anu Nj.

²⁹ //] T6; / R,T3,T7

§ 2 [R:17a6, T3:22a4, T4:15b2, T6:19b6, T7:24b5]

2.1

punar aparaṃ mahāmate¹ saptavidho² bhāvasvabhā[T6:20a][T7:25a]vo
bhavati³ yad uta samudayasvabhāvo⁴ bhāvasvabhāvo⁵ lakṣaṇasvabhāvo⁶
mahābhūtasvabhāvo⁷ hetusvabhāvaḥ⁸ pratyayasvabhāvo⁹ niṣpattisvabhāvas¹⁰ ca
[R:17b] saptamaḥ¹¹ //¹²

2.2

punar aparaṃ mahāmate¹³ saptavidhaḥ paramārtho¹⁴ yad uta cittagocaro¹⁵
jñānagoca[T3:22b]raḥ¹⁶ prajñāgocaro¹⁷ dṛṣṭidvayagocaro¹⁸
dṛṣṭidvayātikrāntagocaraḥ¹⁹ suta²⁰-bhūmyanukramaṇa²¹-gocaraḥ²² tathāgatasya²³
pratyātmagatigocaraḥ //²⁴

2.3

(Nj40) etan²⁵ mahāmate atītānāgatapratyutpannānām²⁶ tathāgatānām arhatām²⁷

¹ mahāmate] R,T7; mahāmahāmate T6

² -do] R,T7; -dau T6

³ ins. / T6,T7

⁴ -vo] Nj; -vaḥ R,T3; om. -svabhāvo T6; -vaḥ / T7

⁵ -vo] T6; -vaḥ R,T3,T7

⁶ lakṣaṇasvabhāvo] Nj; lakṣaṇasvabhāvaḥ R,T3; lakṣaṇasvabhāvaḥsvabhāvo T6; lakṣaṇasvabhāvaḥ / T7

⁷ -vo] Nj; -vaḥ R,T3,T6; -vaḥ / T7

⁸ hetusvabhāvaḥ] T6; hetubhāvaḥ R,T3,T7

⁹ -svabhāvo] Nj; -bhāvaḥ R; -bhāvo T3; -svabhāva T6; -bhāvaḥ / T7

¹⁰ -svabhāvas] T6; -bhāvas R,T3,T7

¹¹ saptamaḥ] R,T4,T6; saptaptaḥ T7

¹² //] T6; // // R,T4,T7

¹³ mahāmate] R,T7; mahāmahāmate T6

¹⁴ -tho] Nj; -thaḥ R,T3; -thaḥ / T6,T7

¹⁵ -ro] Nj; -raḥ R,T3,T7; -raḥ / T6

¹⁶ ins. / T6,T7

¹⁷ -ro] Nj; -raḥ R,T3; -raḥ / T6,T7

¹⁸ -ro] Nj; -raḥ R,T3; -raḥ / T6,T7

¹⁹ ins. / T6,T7

²⁰ suta] Nj; sūtra R,T3; sūtre T6; sūtra sutra T7

²¹ -maṇa] R,T7; -meṇā T6

²² ins. / T6,T7

²³ tathāgatasya] R,T7; tathāgata T6

²⁴ //] R,T6; / T7

²⁵ etan] Nj; evam R,T3; evam etat T6; evaṃ T7

²⁶ -aṃ] R,T6; -ān T3,T7

²⁷ arhatām] T6,T7; aharntām R; arhantām T3

samyaksambudhānām¹ bhāvasvabhāvaparamārthahṛdayam² yena³ samanvāgatās
tathāgatā laukikalokottaratamān⁴ dharmān āryeṇa⁵ prajñācakṣuṣā
svasāmānyalakṣaṇapatitān⁶ vyavasthāpayanti /⁷ tathā ca vyavasthāpayanti
yathā tīrthakaravādakudṛṣṭisādhāraṇā⁸ na bha[T7:25b]vanti /⁹

2.4

katham¹⁰ ca mahāmate tīrthakaravādakudṛṣṭisādhāraṇā¹¹ bhavanti¹² yad uta
svacittaviṣayavikalpadṛṣṭyanavabodhanād¹³ vijñānānām svacittadrśyamātrān
avatāreṇa mahāmate bālapṛthagjanā
bhāvā[T4:16a]bhāvasvabhāvaparamārthadrṣṭidvayavādinō¹⁴ bhavanti //¹⁵

§ 3 [R:17b5, T3:22b5, T4:16a1, T6:20a6, T7:25b2]

3.1

punar aparaṃ [T6:20b] mahāmate vikalpabhavatrayaḍukhavinivartanam
ajñānatṛṣṇākarmapratyayavinivṛttim¹⁶ sva[T3:23a]cittadrśyamāyāviṣayānudarśanam
bhāṣiṣye /¹⁷

3.2

ye kecin¹⁸ mahāmate śramaṇā¹⁹ vā brāhmaṇā²⁰ vābhūtvā¹ śraddhā²

¹ -sambuddhānām] R,T3,T6,T7; ins. bhagavatām T7

² -hṛdayam] R; -hṛdayena T6; -hṛdayam / T7

³ ins. bhāvasvabhāvaparamārthahṛdayena R,T3,T7; om. yena T6

⁴ -mān] R,T6,T7

⁵ āryeṇa] R,T6,T7; āryaṇa T3

⁶ -lakṣaṇapatitān] R,T7; -lakṣaṇāpatitām T6

⁷ om. / R,T3,T6,T7

⁸ tīrtha-] R,T6; tīrthya- T7

⁹ om. / R,T3,T6,T7

¹⁰ -m] R,T3,T6, T7

¹¹ tīrthakaravāda-] R,T3; tīrthakaravādā- T6; tīrthyakaravāda- T7

¹² ins. / T6,T7

¹³ -dṛṣṭyanavabodhanād] Nj; -dṛṣṭyanavabodhanāt R; -drnavabodhanāt T3; -dṛṣṭyānavabodhanād T6;
-navabodhāt / T7

¹⁴ -vādinō] R,T3,T7; -vānino T6

¹⁵ //] T6; / R,T3,T7

¹⁶ -pratyayavinivṛttim] R; -vinivṛtti T3; -pratyayavinivṛtti T6,T7

¹⁷ /] Nj; om. / R,T3,T7; // T6

¹⁸ kecin] R,T7; kecit T3,T6

¹⁹ śramaṇā] R,T3,T7; śramaṇo T6

²⁰ brāhmaṇā] R,T3,T6; brāhmaṇo T6

hetuphalābhivvyaktidravyam³ ca kālāvasthitam pratyayeṣu ca
skandhadhātāvāyatanānām utpādasthitim⁴ cecchanti bhūtvā ca vyayam / te⁵
mahāmate⁶
saṃtati⁷-kriyotpādabhaṅgabhava⁸-nirvāṇamā[R:18a]rgakarmaphalasatyavināśoccheda⁹-
vādino bhavanti¹⁰ /¹¹ (Nj41) tat kasya hetor¹² yad idaṃ
pratyakṣānupalabdher¹³ ādyadarśanābhāvāt¹⁴ /¹⁵

3.3

tad yathā mahā[T7:26a]mate ghaṭakapālābhāvo¹⁶ ghaṭakṛtyam¹⁷ na karoti¹⁸
nāpi dagdhabījam¹⁹ aṅkurakṛtyam karoti / evam²⁰ eva mahāmate ye
skandha²¹-dhātāvāyatana²²-bhāvā niruddhā nirudhyante nirottyante²³
svacittadṛśya²⁴-vikalpadarśana²⁵-hetutvān²⁶ nāsti²⁷ nairantaryapravṛtīh²⁸ //²⁹

3.4

yadi punar mahāmate abhūtvā śraddhā³⁰ vijñānānām³¹

¹ vābhūtvā] Nj; vā abhūtvā R,T3,T7; vā abhūtvā sarvā T6

² om. śraddhā T6

³ -vyakti-] R,T6,T7; -vyaktivyañja- T3

⁴ utpādasthitim] R,T3; utpādamsthitim T6; utpādasthitim T7

⁵ vyayam / te] Nj; vyayante R,T3,T6; vyayante // T7

⁶ ins. / T6

⁷ saṃtati] R,T6,T7; santiti T3

⁸ -bhaṅgabhava] Nj; -bhaṅgava R; -bhagava T3; -bhaṅgam T6; -bhaṅga T7

⁹ vināśoccheda] T6; vināśaccheda T3; vināśoccheda R,T7

¹⁰ bhavanti] R,T3; bhavivanti T6; bhavaṃti T7

¹¹ /] R; om. / T3; // T6,T7

¹² hetor] R,T7; hetoḥ / T6

¹³ -r] Nj; -ḥ R,T6,T7

¹⁴ ādyadarśanābhāvāt] R,T3; ādyadarśanābhāt T6; āyadarśarā T7

¹⁵ /] Nj; om. / R,T7; // T6

¹⁶ ghaṭakapālābhāvo] Nj; ghaṭakapālābhāvah R,T3,T7; ghaṭakapālābhāvā T6

¹⁷ -m] R,T6; -n T3,T7

¹⁸ karoti] R,T3; karo T6; karoti / T7

¹⁹ dagdhabījam] R,T3,T7; dagdhambījam T6; dagdhavījam Nj

²⁰ evam] R,T3,T6; evaṃm T7

²¹ skandha] R,T6; ndha T3; skaṃdha T7

²² āyatana] R,T3,T7; āyana T6

²³ ins. / T7

²⁴ om. dṛśya R

²⁵ -na] Nj; -nā R,T3,T6,T7

²⁶ -ān] R,T3,T6; -āt T7

²⁷ ins. teṣāṃ R,T3,T6; ins. teṣān T7

²⁸ -ḥ] R,T3,T7; -r T6

²⁹ //] Nj; om. // R,T6; / T7

³⁰ śraddhā] R,T3,T7; saddhānānām T6

³¹ om. vijñānānām T6

trisaṃgatipratyayakriyāyogenotpattir¹ abhaviṣyad² asatām api mahāmate
kūrmāromnām³ utpattir⁴ abhaviṣyat⁵ sikatābhyo vā tailasya /⁶ [T3:23b]
pratijñāhānir⁷ niyamanirodhaś⁸ ca mahāmate prasajyate⁹
kriyākarma¹⁰-karaṇavaiyarthyaṃ¹¹ sadasato¹² bruva[T6:21a]taḥ¹³ /¹⁴ teṣām api
mahāmāte trisaṃgatipratyayakriyāyogenopadeśo¹⁵ vidyate
hetuphalasvalakṣaṇatayā atītānāgatapratyutpannāsatsal¹⁶-lakṣaṇāstītām¹⁷
yuktyāgamais tarkabhūmau vartamānā¹⁸ sva[T4:16b]dr̥[T7:26b]ṣṭidoṣavāsanatayā
nirdeksyanti /¹⁹ evam eva mahāmate bālaprthagjanāḥ kudr̥ṣṭidaṣṭā²⁰
viṣamamatayo²¹ ṛjñaiḥ²² praṇītam sarvajñapraṇītam²³ iti vaksyanti //²⁴

3.5

ye²⁵ punar anye mahāmate śramaṇā²⁶ vā²⁷ brāhmaṇā vā
niḥ²⁸-sva(Nj42)bhāvaghanālātacakragandharvanagarā²⁹-nutpāda³⁰-māyāmarīcyudaka³¹-c
andrasvapnasvabhāva³²-bāhyaci[R:18b]ttadr̥śyavikalpā¹-nādikālaprapañcadarśanena

¹ trisaṃgatipratyaya-] T3,T7; trisaṃgatipratyaya- R; trisaṃgatipratyayaḥ- T6

² -d] Nj; -t R; -t / T6,T7

³ kurumāromnām] R,T7; kurumāromām T6

⁴ -pattir] R,T6; pahir T7^{ac}

⁵ -yat] T3,T6; -yate R; -yat / T7

⁶ om. / R,T6,T7

⁷ -nir] Nj; -ni T6; -niḥ R,T3,T7

⁸ -nirodhaś] T7; -virodhaś R,T6

⁹ ins. / T7

¹⁰ om. karma T6

¹¹ -vaiyarthyaṃ] Nj; -vaiyarthyeṇ ca T3; vaiyarthyaṃ ca T6; -vaiyarthyaṇ ca R,T7

¹² -o] T6; -oḥ R,T7

¹³ bruvataḥ] R,T3;brūvatas R,T6,T7

¹⁴ om. / R,T6,T7

¹⁵ tri-] T6,T7; tr- R

¹⁶ -utpannāsatsal] Nj; -utpannātsaṃdarśana R,T6; -utpannādarśana T3; -utpannātsaṃdarśane T7

¹⁷ -stītām] Nj; -sthitā R,T6,T7

¹⁸ -nā] R,T7; -nāḥ T6

¹⁹ om. / T6

²⁰ -daṣṭā] R; -dr̥ṣṭā T6,T7

²¹ -yo] Nj; -yaḥ R,T6; -yaḥ / T4,T7

²² ṛjñaiḥ] Nj; ajñaiḥ R,T4,T6,T7

²³ sarvajñapraṇītam] R,T3,T7; sarvajñāḥ praṇītam T6

²⁴ //] Nj; om. // R,T7; / T6

²⁵ ins. vā R,T6,T7

²⁶ śramaṇā] T7; śravaṇā R,T6

²⁷ om. vā T6

²⁸ niḥ] R,T6; ni R,T7

²⁹ rā] R,T7; rare T6

³⁰ -da] R,T6; -va T7

³¹ -ka] T6,T7; -kaṃ R

³² -va] Nj; -vā R,T7; om. svabhāva T6

svacittavikalpapratyayavinivṛttirahitā²
 parikalpitābhidhānalakṣyalakṣaṇābhidheyarahitā³ dehabhogapraṭiṣṭhābham⁴
 ālayavijñānam⁵ viṣayagrāhyagrāhakavisamṣyuktam nirābhāsagocaram
 utpādasthitibhaṅgavarjyam sva[T3:24a]cittotpādānugataṃ⁶ vibhāvaiṣyanti⁷ na
 cirāt te mahāmate⁸ bodhisattvā⁹ mahāsattvāḥ saṃsāranirvāṇasamatāprāptā
 bhaviṣyanti /¹⁰

3.6

mahākaruṇopāyakaūśalyānābhogagate[T7:27a]na¹¹ mahāmate prayogena
 sarvasattvamāyāpratibimba¹²-samatayā¹³-anārabdhapratyayatayā[T6:21b]dhy¹⁴-ātmabāh
 ya¹⁵-viṣayavimuktatayā¹⁶ cittabāhyādarśanatayā¹⁷ ānimittādhiṣṭhānānugatā¹⁸
 anupūrveṇa bhūmikrama¹⁹-samādhiṣayānugamanatayā²⁰
 traidhātuka²¹-svacittatayā²²-dhimuktitaḥ pravivibhāvayamānā māyopamasamādhiṃ²³
 pratilabhante /²⁴

3.7

svacittanirābhāsamātrāvātāreṇa prajñāpāramitāvihārānuprāptā
 utpādakriyāyogavirahitāḥ samādhivajrabimbopamaṃ²⁵ tathāgatakāyānugataṃ²⁶

¹ -vikalpa] R,T7; -vilpe T6

² -tāḥ] R,T7; -tā T6

³ parikalpitābhidhāna-] Nj; parikalpitābhidhānā- R,T4,T6,T7

⁴ -praṭiṣṭhābham] R,T7; -praṭiṣṭhānam T6; -praṭiṣṭhāsam Nj

⁵ -nam] R,T7; -na T6

⁶ taṃ] R,T7; ta T6

⁷ -yanti] R,T6; -yaṃti / T7

⁸ om. mahāmate T6

⁹ om. bodhisattvā T6

¹⁰ /] T7; om. / R; // T6

¹¹ -śalyā-] R,T7; -śale- T6

¹² -bimba] R,T6,T7; -vimba Nj.

¹³ ins. prati T7

¹⁴ -tayādhy] Nj; -tayā 'dhy T6; -tayā adhy R,T7

¹⁵ -bāhya] R,T6,T7; -vāhya Nj.

¹⁶ -vimuktatayā] T3,T6; -muktatayāT7; -tayā R

¹⁷ cittabāhyā-] R,T6,T7; cittavāhyā- Nj.

¹⁸ -adhiṣṭhānā-] R,T6,T7; -adhiṣṭhānā- Nj.

¹⁹ -ma] R,T7; -maḥ T6

²⁰ -tayā] T3,T6,T7; -māya R

²¹ -ka] R,T7; -kaṃ T6

²² -tayā] R,T7; -māyā T6

²³ māyopamasamādhiṃ] R; māyopamāṃ samādhiṃ samādhiṃ T6; māyopamaṃ samādhiṃ T3,T7

²⁴ om. / R,T6

²⁵ -bimbo-] R,T6; -biṃbo- T7; -vimbo- Nj

²⁶ tathāgata-] R,T6; tathāvāta- T7

tathatānirmāṇānuga[T4:17a]taṃ balābhijñāvaśitākṛpākaruṇopāyamaṇḍitaṃ¹
sarbubuddhakṣe²-tratīrthyāyatanopagataṃ³ (Nj43) cittamanomanovijñānarahitaṃ⁴
parāvṛtṭyānuśrayānupūrvakaṃ⁵ tathāgata[T3:24b]kāyaṃ mahāmate te⁶
bodhisattvāḥ pratilapsya[R:19a]nte /⁷ tasmāt tarhi mahāmate bodhisattvair⁸
ma[T7:27b]hāsattvaiḥ⁹ tathāgatakāyānugamena¹⁰ pratilābhinā
skandhadhātṽyātanacittahetupratyayakriyāyogotpādasthitibhaṅgavikalpaprapaṇcarahita
ir bhavitavyaṃ¹¹ cittamātrānusāribhiḥ¹² //¹³

anādikālaprapaṇcadauṣṭhulyavikalpavāsanāhetukaṃ¹⁴ tribhavaṃ¹⁵ paśyato¹⁶
nirābhāsabuddhabhūmyanutpādasmarāṇatayā¹⁷ pratyātmāryadharmagatīṃgataḥ¹⁸
svacittavaśavarty¹⁹ anābhoga[T6:22a]caryāgatīṃgato²⁰ viśvarūpamaṇisadr̥ṣaḥ²¹
sūkṣmaiḥ²² sattvacittānupraveśakair²³ nirmānavigrahaiś cittamātrāvadhāraṇatayā²⁴
bhūmikramānusamdhau pratiṣṭhāpayati /²⁵ tasmāt tarhi mahāmate
bodhisattvena mahāsattvena svasiddhāntakuśalena bhavitavyaṃ //²⁶

§ 4 [R:19a4, T3:24b5, T4:17a5, T6:22a2, T7:27b5]

¹ -jñāvaśitā-] T7; -jñāvaśitā- R; -jñāvaśitā- T6

² -ṣe] R,T7; -ṣa T6

³ -taṃ] R; -maṃ T6,T7

⁴ cittamanomamo-] R,T3,T7; cittamanagato- T6

⁵ ins. / T7

⁶ om. te T6

⁷ om. / R,T7

⁸ -vair] R,T7; -va T6

⁹ -s] R,T6,T7; -ḥ Nj.

¹⁰ -gamena] R,T3,T7; -gama T6

¹¹ ins. // R; ins. / T7

¹² cittamātrānusāribhiḥ] R,T7; cittatātrānusāribhiḥ T6

¹³ -bhiḥ //] Nj; -bhiḥ / R; -bhiḥ T6; -bhir T7

¹⁴ -vāsanā-] R,T6,T7; -vāsana- Nj.

¹⁵ tribhavaṃ] R,T7; bhavaṃ T6

¹⁶ -to] Nj; -taḥ R,T7; -taḥ / T6

¹⁷ nirābhāsabuddhabhūmyanutpāda-] R,T7; nirābhāsabhūmyanutpāda- T6

¹⁸ pratyātmāryadharmagatīṃgataḥ] R,T7; pratyātmāryagatīṃgataḥ T6

¹⁹ -vaśavarty] Nj; -vasavartī R,T4,T6; -vaśavartī T7

²⁰ -to] Nj; -taḥ / T6; -taḥ R,T7

²¹ -śaḥ] R; -śaṃ T6; -śaḥ / T7

²² sū-] T7; sū- R,T6

²³ -r] R,T7; -ḥ T6

²⁴ -āvadhāraṇatayā] R,T3,T7; -āvaraṇatayā T6

²⁵ /] Nj; om. / R,T7; // T6

²⁶ //] R,T4,T6; // // T7

4.1

punar api mahāmatir āha /¹ deśayatu me² bhagavaṃś³
cittamanomanovijñāna⁴-pañcadharmasvabhāvalakṣaṇakusumadharmaparyāyaṃ
buddhabodhi[T3:25a]sattvā[T7:28a]nuyātaṃ svacittadṛśyagocaraviśaṃyojanaṃ⁵
sarvabhāṣya⁶-yuktitattvalakṣaṇa⁷-vidāraṇaṃ⁸ sarvabuddhapravacanahr̥dayaṃ⁹
laṅkāpurigirimalaye¹⁰ nivāsino bodhisattvān
ārabhyodadhi¹¹-taraṅgāla(Nj44)yavijñānagocaraṃ dharmakāyaṃ tathāgatānugītaṃ
prabhāṣasva //¹²

4.2.1

atha khalu bhagavā[T4:17b]n punar eva mahāmatim bodhisattvaṃ
mahāsattvaṃ¹³ etad abocat /¹⁴ caturbhir¹⁵ mahātate kāraṇaiś
cakṣurvijñānaṃ¹⁶ pravartate /¹⁷ katamaiś caturbhi[R:19b]r¹⁸ yad uta¹⁹
svacittadṛśyagrahaṇānabodhato²⁰ 'nādi²¹-kālaprapañcadauṣṭhulyarūpavāsanābhiniveśa
to²² vijñānaprakṛtisvabhāvato²³ vicitarūpalakṣaṇakautūhalataḥ²⁴ /

4.2.2

ebhir mahāmate caturbhiḥ kāraṇair oghāntarajalasthānīyād²⁵ ālayavijñānāt

¹ /] T7; // R,T6

² om. me R

³ -vaṃś] T6,T7; -vaṃ R

⁴ cittamamomanovijñāna] R,T3,T7; cittamanovijñānaṃ T6

⁵ ins. / R

⁶ -ṣya] Nj; -ṣyaṃ R,T6,T7

⁷ -lakṣaṇa] T6; -rakṣaṇa R; -takṣaṇa T7

⁸ -vidāraṇaṃ] R,T3,T7; -vicāraṃ T6

⁹ -pravacanahr̥dayaṃ] R,T6; -pravacanamhr̥dayaṃ T7

¹⁰ -purigirimalaye] T7; -puligirimalaye R; -purimalaya T6

¹¹ ārabhyodadhi] Nj; ārabhya udadhi R,T6,T7

¹² //] R,T6; / T7

¹³ om. mahāsattvaṃ T6,T7

¹⁴ /] T7; // R,T6

¹⁵ -bhir] T6,T7; -bhi R

¹⁶ cakṣur-] T6,T7; cakṣuḥ- R

¹⁷ om. / R

¹⁸ -bhi] T6,T7; -bhir R

¹⁹ caturbhir yad uta] R; caturbhiḥ / yad uta T6; caturbhidut / T7

²⁰ -grahaṇānabodhato] Nj; -grahaṇānavabodhataḥ R,T3,T4; -graṇāvabodhataḥ / T6;

-grahaṇānavabodhataḥ / T7

²¹ 'nādi-] Nj; anādi- R,T4,T6,T7

²² -veśato] Nj; -veśataḥ R,T4; -veśitaḥ / T6; -veśataḥ / T7

²³ -to] Nj; -taḥ R,T4,T6,T7

²⁴ -lataḥ] R,T7; -rataḥ T6

²⁵ oghāntara-] R,T3,T7; oghītara- T6

pravṛttivijñānatarāṅga utpadyate /¹ yathā ma[T6:22b]hāmāte cakṣurvijñāna²
 evaṃ sarvendriyaparamāṇuromakū[T7:28b]peṣu³ yugapat⁴
 pravṛttikramaviṣayādarśabimbadarśanavat⁵ udadheḥ⁶ pa[T3:25b]vanāhatā iva
 mahāmāte viṣayapavanacittodadhitarāṅgā avyucchinna hetukriyālakṣaṇā⁷
 anyonyavinirmuktāḥ⁸ karmajātilakṣaṇasuvinibaddhāḥ⁹ /¹⁰

4.2.3

rūpasvabhāvānavadhāriṇo mahāmāte pañcavijñānakāyāḥ pravartante /¹¹ saha
 tair eva mahāmāte pañcabhir¹² vijñānakāyair¹³
 hetuviṣayaparicchedalakṣaṇāvadhārakam nāma manovijñānam taddhetujaśarīram¹⁴
 pravartate /¹⁵ na ca teṣāṃ tasya caivaṃ bhavati¹⁶ vayam
 atrānyonyahetukāḥ svacittadrśyavikalpābhiniveśapavṛttā¹⁷ iti //¹⁸
 atha cānyonyābhinnalakṣaṇasahitā pravartante¹⁹ vijñaptivi(Nj45)ṣayaparicchede²⁰
 /²¹

4.2.4

tathā ca pravartamānāḥ pravartante yathā samāpannasyāpi yoginaḥ
 sūkṣmagativāsanāpravṛttā²² na prajñāyante /²³ yogināṃ caivaṃ²⁴ bhavati²⁵

¹ om. / R, T6

² -na] Nj; -nena R, T3, T4, T6, T7

³ -paramāṇu-] T6; -paramānu- R, T7

⁴ -at] T6, T7; -an R

⁵ ins. / T6

⁶ udadheḥ] R, T7; udadhe T6

⁷ avyucchinna-] R, T6; abhyucchinna- T7

⁸ anyonya-] T6, T7; anyonanya- R

⁹ -lakṣaṇa-] R, T6; -lakṣaṇe- T7

¹⁰ -suvinibaddhāḥ /] em.; -sunibaddha] T6; -suvinibaddha] R, T7, Nj

¹¹ /] T7; om. / R, T6

¹² -bhir] R, T7; -bhi T6

¹³ -ir] R, T7; -iḥ T6

¹⁴ -hetujaśarīram] Nj; -hetuśari T6; -hetuśarīram R, T7

¹⁵ /] T6, T7; om. / R

¹⁶ ins. / T7

¹⁷ -vṛttā] R, T7; -varttā T6

¹⁸ //] R, T6; / T7

¹⁹ -ante] T6; -ate R, T7

²⁰ -viṣaya-] T6; -viṣaye- R, T7

²¹ om. / R, T6, T7

²² sūkṣmagativāsanā-] Nj; sūkṣmagativāsanā- R, T6; sūkṣmagativāsanā- T4; sūkṣmagativāsanā- T7

²³ /] T7; om. / R, T6

²⁴ -vaṃ] Nj; -va R, T4, T6, T7

²⁵ ins. / T7

nirodha vijñānā[T7:29a]ni samāpatsyāmaha¹ [R:20a] i[T4:18a]ti /² te³
cāniruddhair⁴ eva vijñānaiḥ samāpadyante vāsanābījānirodhād⁵ aniruddhā
viṣayapravṛttagrahaṇavaikalyā[T3:26a]n⁶ niruddhāḥ /⁷

4.2.5

evaṃ sūkṣmo⁸ mahāmate ālayavijñānagatipracāro yat tathāga[T6:23a]taṃ
sthāpayitvā bhūmipraṭiṣṭhitāṃś ca bodhisattvān na sukaram anyaiḥ
śrāvakaप्रत्येकबुद्धातिरथययोगयोगिभिर अभिगन्तुं⁹
samādhiprajñābalādhānato 'pi vā paricchettum¹⁰ /¹¹ anyatra¹²
bhūmilakṣaṇa¹³-prajñājñānakauśala¹⁴-padaprabhedaviniścayajinānanta¹⁵-kuśalamūlopac
ayasvacittadṛśyavikalpaprapaṇcavirahitair¹⁶ vanagahanaguhālayāntargatair¹⁷
mahāmate hīnotkr̥ṣṭamadyamayogayogibhiḥ na¹⁸ śakyam
svacittavikalpadṛśyadhārādṛṣṭum¹⁹ /²⁰

4.2.6

anantakṣetrajinābhiṣekavaśitābalābhijñāsamādhayaḥ²¹ prāptum /²²
kalyāṇamitrajinapuraskṛtair²³ mahāmate śakyam [T7:29b] cittamanovijñānam
svacittadṛśyasvabhāvagocaravikalpasamsārabhavodadhiṃ karmatṛṣṇājñānāhetukaṃ

¹ -ha] R,T7;-he T6

² om. / R,T6,T7

³ te] R,T6; ne T7

⁴ cāniruddhair] R,T3,T7; cānirodhair T6

⁵ -bījā-] R,T6,T7; -vījā- Nj.

⁶ -vṛttagrahaṇavaikalyān] R; -savṛttavaikalyaprahaṇāgrahaṇavaikalyān T3; -vṛttigrahaṇavaikalyā T6;
-vṛttirvaikalyagrahaṇān T7

⁷ /] T6,T7; om / R

⁸ sūkṣmo] T7; śūkṣmā R,T6

⁹ abhigantum] Nj; adhigantum R,T4,T6,T7

¹⁰ paricchettum] Nj; paricchetum R,T4,T6; panicchetum T7

¹¹ /] Nj; om. / R,T4,T6,T7

¹² anyatra] R,T6; anya T7

¹³ -ṇa] R,T7; -ṇam T6

¹⁴ -śāla] R; -śālya T6,T7

¹⁵ -viniścayajinānanta] Nj; -viniścayajñānāmbha R,T3,T4; -viniścayajñānāmbha T6;
-viniścayajñānāmbha T7

¹⁶ -ir] T6,T7; -iḥ R

¹⁷ guhālayāntargatair] R,T7; guhālatāntargatair T6

¹⁸ om. na R,T6

¹⁹ -dhārādṛṣṭum] R,T7; -dhārādṛṣṭum T4; -dhārāṃpraṣṭum T6 ; -dhārādṛṣṭ Rj

²⁰ ins. /] em.; om. / R,T4,T6,T7,Nj

²¹ -vaśitā-] T7; -vasitā- R,T6

²² ins. / T7; om. / R,T6

²³ -ir] T6; -iḥ R,T7

tartum /¹ ata² etasmāt³ kāraṇāt mahāmate yoginā kalyānamitrajīnayoḡe⁴
(Nj46) yogah⁵ prārabdhavyah //⁶

§ 5 [R:20a6, T3:26a5, T4:18a6, T6:23a5, T7:29b2]

5

atha khalu bhagavāms⁷ tasyāṃ velāyāṃ imā⁸ gāthā⁹ [T3:26b] abhāṣata¹⁰
//¹¹

tarāṅgā¹² hy udadher¹³ yadvat pavanapratyayeritāḥ¹⁴ /
nṛtyamānāḥ¹⁵ pravartante vyucchedaś ca na vidyate //¹⁶ 99 //
ālayaughas¹⁷ ta[R:20b]thā nityaṃ viṣayapavaneritaḥ¹⁸ /¹⁹
citrais²⁰ tarāṅgavijñānair nṛtyamānaḥ²¹ prava[T6:23b]rtate //²² 100 //
nīle rakte 'tha lavaṇe²³ śāṅkhe²⁴ kṣīre ca śārkare²⁵ /²⁶
kaṣāyaiḥ²⁷ phalapuṣpādyaiḥ kiraṇā yatha bhāskare //²⁸ 101 //
na cānyena ca [T4:18b] nānanyena²⁹ tarāṅgā hy udadher matā¹ /²

¹ om. / R, T6, T7

² ata] T6, T7; atra R

³ etasmāt] R, T7; tasmāt T6

⁴ -jīnayoḡe] T7; -jīnayoḡa R; -jīnayoḡayoḡe T6

⁵ om. yogah T6

⁶ //] R, T6; / T7

⁷ -āms] T6, T7; -ām R

⁸ imā] R, T7; imāṃ T6

⁹ gāthā] R, T7; gāthāṃ T6

¹⁰ ta] R, T7; taḥ T6

¹¹ //] R, T6; / T7

¹² tarāṅgā] R, T7; taraṃ T6

¹³ udadher] R, T7; udadheḥ T6

¹⁴ -āḥ] T7; -ā R, T6

¹⁵ -āḥ] R, T7; -ā T6

¹⁶ //] T6; om. // R; / T7

¹⁷ ālayaughas] T7; ālayoḡhas R, T6

¹⁸ viṣayapavaneritaḥ] R, T7; viṣayaḥ pavanoritaḥ T6

¹⁹ om. / R

²⁰ citrais] T3, T4, T7; cittais T6

²¹ -naḥ] R, T7; -na T6

²² //] T6; om. // R; / T7

²³ lavaṇe] R, T7; lavane T6

²⁴ śāṅkhe] R, T7; śāṅkhye T6

²⁵ śārkare] R, T7; śārkare T6

²⁶ om. / R

²⁷ kaṣāyaiḥ] T6, T7; kāṣāyaiḥ R

²⁸ //] T6; om. // R; / T7

²⁹ nānanyena] R, T3, T4; nānātve T6; nānanye T7

vijñānāni tathā sapta cittena saha³ saṃyutāḥ //⁴ 102 //
 udadheḥ pariṇāmo 'sau taraṅgāṇām⁵ vicitratā⁶ /⁷
 ālayaṃ hi tathā citraṃ vijñānākhyam pravartate //⁸ 103 //
 cittaṃ manaś ca vijñānaṃ lakṣaṇārthaṃ pra[T7:30a]kalpyate /⁹
 abhinnalakṣaṇā hy aṣṭau¹⁰ na lakṣyā na ca lakṣaṇam¹¹ //¹² 104 //
 udadheś ca taraṅgāṇām yathā nāsti viśeṣaṇam¹³ /¹⁴
 vijñānānām tathā citteḥ¹⁵ pariṇāmo na¹⁶ labhyate¹⁷ //¹⁸ 105 //
 cittena cīyate karma manasā ca vicīyate¹⁹ /²⁰
 vijñānena vijānāti dr̥ṣyaṃ kalpeti pañcabhiḥ //²¹ 106 //
 (Nj47) nīlāraktaprakāraṃ²² hi vijñānaṃ²³ khyāyate nṛṇām /²⁴
 taraṅgacittasādharmyaṃ vada kasmān²⁵ ma[T3:27a]hāmate //²⁶ 107 //
 nīlāraktaprakāraṃ²⁷ hi taraṅgeṣu²⁸ na vidyate /²⁹
 vṛttīś ca varṇyate³⁰ cittaṃ³¹ lakṣaṇārthaṃ hi bālīśān³² //³³ 108 //
 na tasya vidyate vṛtṭiḥ svacittaṃ grāhyavarjitaṃ /¹

-
- ¹ -ā] R; -āḥ T6,T7
² /] T7; om. / R; // T6
³ saha] R,T3,T7; sama T6
⁴ //] T6; om. // R; / T7
⁵ -ṇām] R,T7; -nām T6
⁶ vicitratā] R,T7; vicitritāḥ T6
⁷ om. / R
⁸ //] T6; om. // R; / T7
⁹ om. / R
¹⁰ ins. // R
¹¹ -am] Nj; -ām T4; -ā T6; -āḥ T7
¹² //] Nj; om. // R,T4,T6; / T7
¹³ viśeṣaṇam] T7; viśeṣaṇā R; viśeṣaṇām T6
¹⁴ om. / R
¹⁵ -eḥ] Nj; -e R,T4,T6,T7
¹⁶ om. na T6
¹⁷ labhyate] T3,T7; nopalabhyate T6
¹⁸ om. // R,T7
¹⁹ vicīyate] T4; viyate T3; vidhīyate T6,T7
²⁰ om. / R,T4
²¹ //] T4; om. // R; / T6,T7
²² -raṃ] T7; -re T6
²³ vijñānaṃ] T7; vijñānā T6
²⁴ om. / R
²⁵ kasmān] T7; kasmāt T6
²⁶ //] T6; om. // R; / T7
²⁷ -raṃ] T7; -re T6
²⁸ taraṅgeṣu] T6; taraṅgeṣu T7
²⁹ om. / R
³⁰ varṇyate] T6; varṇate T7
³¹ cittaṃ] Nj; citte R,T4,T6,T7
³² bālīśān] T4; bālīśāṃ T6; bālīśāḥ T7
³³ //] T6; om. // R,T4; / T7

grāhye sati hi vai grāhas² taraṅgaiḥ³ saha sādhyate //⁴ 109 //
 dehabhogapraṭiṣṭhānaṃ vijñānaṃ khyāyate nṛṇāṃ /⁵
 tenāsya dṛśyate vṛttis taraṅgaiḥ saha sādṛśā⁶ //⁷ 110 //
 udadhis taraṅgabhā[T6:24a]vena nṛtyamāno vibhāvyate /⁸
 ālayasya tathā vṛtṭiḥ kasmād⁹ buddhyā¹⁰ na gamyate //¹¹ 111 //
 bālānāṃ buddhi[R:21a]vaikalyād¹² āla[T7:30b]yaṃ hy udadhir¹³ yathā /¹⁴
 taraṅgavṛttisādharmyaṃ¹⁵ dṛṣṭāntenopanīyate //¹⁶ 112 //
 udeti bhāskaro yadvat samahīnottame jane¹⁷ /¹⁸
 tathā tvam lokapadyota tattvaṃ deśesi¹⁹ bālīśān²⁰ //²¹ 113 //
 (Nj48) kṛtvā dharmeṣv²² avasthānaṃ²³ kasmāt tattvaṃ na bhāṣase /²⁴
 bhāṣase yadi vā²⁵ tattvaṃ citte tattvaṃ na vidyate //²⁶ 114 //
 udadher yathā taraṅgā hi darpaṇe supine yathā /²⁷
 [T4:19a] dṛśyanti yugapatkāle²⁸ tathā²⁹ cittaṃ svagocare //³⁰ 115 //
 vaikalyād³¹ viśayānāṃ hi kramavṛtṭyā pravartate /³²

¹ om. / R

² grāhas] T7; grāhyas T6

³ taraṅgaiḥ] T7; uragaiḥ T6

⁴ //] T6; om. // R; / T7

⁵ om. / R

⁶ sādṛśā] R; sādṛśāḥ T6,T7. ‘tenāsya dṛśyate vṛttis taraṅgaiḥ saha sādṛśāḥ’ is repeated in T6.

⁷ //] T6; om. // R; / T7

⁸ /] T7; om. / R; // T6

⁹ kasmād] R,T6; kasyād T7

¹⁰ buddhyā] R,T7; buddhaṃ T6

¹¹ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

¹² -ād] R,T7; āt T6

¹³ udadhir] Nj; udadher R,T4,T6,T7

¹⁴ /] T7; om. / R; // T6

¹⁵ -dharmaṃ] T6;-dharmyaṃ R; -dharmaṃ T7

¹⁶ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

¹⁷ jane] R,T6,T7; jine Nj.

¹⁸ /] T7; om. / R; // T6

¹⁹ deśesi] R,T6; deśetpi T7

²⁰ bālīśān] R,T7; bālīnān T4; bālīśāt T6

²¹ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

²² dharmeṣv] R,T7; dharmesv T6

²³ -aṃ] R,T6,T7; -āṃ Nj.

²⁴ /] T7; om. / R; // T6

²⁵ vā] Nj; vai R,T4,T6,T7

²⁶ //] Nj; om. // R; / T4,T6,T7

²⁷ /] T7; om. / R; Verse 115ab is ‘yathā taraṅgā udadhe darpaṇe supine yathā //’ in T6

²⁸ -kāle] R,T7; -kālaṃ T6

²⁹ tathā] R,T7; yathā T6

³⁰ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

³¹ vaikalyād] R; vaikalyod T6; vaikalpyād T7

³² /] T7; om. / R; // T6

vijñānena vijānāti manasā manyate punaḥ //¹ 116 //
 pañcānām khyāyate dṛśyaṃ kra[T3:27b]mo nāsti samāhite /²
 citrācāryo³ yathā kaścic⁴ citrāntevāsiko 'pi vā //⁵ 117 //
 citrārthe nāmayed raṅgān⁶ deśayāmi⁷ tathā hy aham⁸ /⁹
 raṅge¹⁰ na¹¹ vidyate citraṃ na bhūmau na ca bhājane //¹² 118 //
 sattvānām karṣaṇārthāya raṅgiś citraṃ vikalpyate /¹³
 deśanā vyabhicāraṃ¹⁴ ca tattvaṃ hy akṣaravarjitaṃ¹⁵ //¹⁶ 119 //
 kṛtvā dharmeṣv avasthānaṃ¹⁷ tattvaṃ¹⁸ deśemi¹⁹ yoginām /²⁰
 tattvaṃ pratyātmaga[T7:31a]tikaṃ kalpyakalpena²¹ varjitaṃ //²² 120 //
 deśemi jinaputrāṇaṃ neyaṃ bālāna deśanāḥ²³ /²⁴
 vicitrā hi ya[T6:24b]thā māyā dṛśyate na ca vidyate //²⁵ 121 //
 deśanāpi tathā citrā deśyate vyabhicāriṇī²⁶ /²⁷
 (Nj49) deśanā hi yad anyasya tad anyasyāpy adeśanā //²⁸ 122 //
 āture²⁹ āture³⁰ yadvad³¹ bhiṣag dravyaṃ prayacchati /³²

¹ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

² /] T7; om. / R; // T6

³ -yo] R,T6; -yau T7

⁴ kaścic] R,T7; kaścit T6

⁵ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

⁶ raṅgān] R,T7; rāgām T6

⁷ deśayāmi] T6,T7; desayāmi R

⁸ aham] R,T7; ayaṃ T6

⁹ /] T7; om. / R; // T6

¹⁰ raṅge] R,T6; raṅgeṇe T7

¹¹ om. na T7

¹² //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

¹³ /] T7; om. / R; // T6

¹⁴ -raṃ] R,T7; -rī T6

¹⁵ akṣara-] R,T6; akṣana- T7

¹⁶ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

¹⁷ -naṃ] R,T7; -nām T6

¹⁸ tattvaṃ] R,T6; tattvan T7

¹⁹ deśemi] R,T6; deśāmi T7

²⁰ /] T7; om. / R,T4; // T6

²¹ kalpyakalpena] R; kalpyakalyaṃna T6; kalpyakalpana T7

²² //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

²³ deśanāḥ] R,T6; deśanā T7

²⁴ /] T7; om. / R; // T6

²⁵ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

²⁶ vyabhicāriṇī] R,T6; vyaticāriṇī T4,T7

²⁷ /] T7; om. / R,T4; // T6

²⁸ //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

²⁹ āture] T6,T7; ātule R,T4

³⁰ āture] R,T4,T6; nāture T7

³¹ yadvad] T7; yadvañ ? R; yadvat T6

³² /] T7; om. / R; // T6

buddhā hi tadvat sattvānām cittamātram¹ vadanti vai //² 123 //
tārikānām aṣṣayam śrāvakānām na [R:21b] caiva hi /³
yam deśayanti vai nāthāḥ⁴ pratyātmagatigocaram //⁵ 124 //

¹ cittamātram] R,T7; citramātram T6

² //] Nj; om. // R,T4; / T6,T7

³ /] T7; om. / R; // T6

⁴ nāthāḥ] T7; nāthā T6

⁵ //] T6; / R,T7

'phags pa lang kar gshegs pa'i theg pa chen po'i mdo¹

II Chos thams cad bsdu pa (D63b6–74a3, P69b2–80b6)

1. 1

[D69a5, P75b3] [Nj37.6] de nas yang byang chub [D69a6] sems dpa' sems dpa' chen po blo gros chen pos [P75b4] bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to // bcom ldan 'das rnam par shes pa rnam kyis kyi skye ba dang / gnas pa dang / 'gag pa rnam pa du mchis / bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa / blo gros chen po rnam par [P75b5] shes pa rnam kyis kyi skye [D69a7] ba dang / gnas pa dang / 'gag pa la rnam pa gnyis yod ²de ³rtog ge pa³ rnam kyis khong du mi chud do // 'di lta ste / rgyun 'gag pa dang / mtshan nyid 'gag pa'o // rnam par shes pa rnam kyis kyi skye ba yang [P75b6] rnam pa gnyis te / rgyun skye ba dang / mtshan nyid skye ba'o // gnas pa'ang [D69b1] rnam pa gnyis te / rgyun gnas pa dang / mtshan nyid gnas pa'o //

1. 2

blo gros chen po rnam par shes pa ni⁴ rnam pa gsum ste / 'jug pa'i mtshan nyid dang / [P75b7] las kyi mtshan nyid dang / rigs kyi mtshan nyid do //

1. 3

blo gros chen po mtshan nyid brgyad du gsungs pa'i rnam par shes pa ni mdor [D69b2] rnam pa gnyis te / snang ba'i rnam par shes pa dang / dngos po so sor rnam par rtog pa'i [P75b8] rnam par shes pa'o // blo gros chen po ji ltar me long la gzugs bzhin du snang ba la snang ba'i rnam par shes pa 'dzin te / blo gros chen po snang ba'i rnam par shes pa dang / dngos po so sor rnam par [D69b3] rtog pa'i rnam par [P76a1] shes pa de gnyis ni mtshan nyid tha mi dad cing gcig gi rgyu gcig go //⁵ blo gros chen po de la snang ba'i rnam par shes pa ni bsam gyis mi khyab pa'i bag chags yongs su 'gyur ba'i rgyu las byung ba'o // [Nj38] blo gros chen [P76a2] po dngos po so sor rnam par rtog pa'i rnam par shes pa ni [D69b4] yul la rnam par rtog pa'i rgyu las byung ba dang / thog ma med pa'i dus kyi spros pa'i bag chags kyi rgyu las byung ba'o //

1. 4

¹ Ārya-laṅkāvatāra-mahāyānasūtra

² do // P.

³ rtog pa po P.

⁴ om. P.

⁵ / P.

de la blo gros chen po dbang po'i rnam par [P76a3] shes pa thams cad 'gag pa ni 'di lta ste / kun gzhi rnam par shes pa'i yang dag pa ma yin par kun rtog pa'i bag chags [D69b5] sna tshogs 'gog pa ste / blo gros chen po 'di ni mtshan nyid 'gag pa'o // blo gros chen po rgyun [P76a4] 'gag pa ni gang las 'byung ba yin te / blo gros chen po gang las zhes bya ba ni gang la gnas pa dang / gang la dmigs pa'o // de la gang la gnas pa zhes bya ba ni thog ma med pa'i dus kyi [D69b6] spros pa gnas ngan len gyi bag [P76a5] chags so // gang la dmigs pa zhes bya ba ni bdag gi sems snang ba rnam par shes pa'i yul du rnam par rtog pa'o //

1. 5

blo gros chen po 'di lta ste dper na / 'jim pa'i rdul phra rab dang / 'jim pa'i gong bu ni gcig pa yang [P76a6] ma yin /⁶ tha dad pa yang ma yin [D69b7] pa dang / ji ltar gser dang rgyan bzhin te /⁷ blo gros chen po ci ste 'jim pa'i gong bu 'jim pa'i rdul phra rab dang tha dad pa zhig yin na ni de dag las brtsams pa ma yin par 'gyur na / de ni 'jim [P76a7] pa'i rdul phra rab de dag las kyang brtsams pas na / de'i phyir tha⁸ dad pa ma yin no //⁹ de ste¹⁰ [D70a1] tha dad pa ma yin na ni 'jim pa'i gong bu dang / rdul phra rab tu bye brag med par 'gyur ro //

1. 6

de bzhin du blo gros chen po 'jug pa'i [P76a8] rnam par shes pa rnam kun gzhi rnam par shes pa'i rigs kyi mtshan nyid dang¹¹ gal¹² te tha dad pa yin na ni kun gzhi rnam par shes pa'i rgyu las [D70a2] 'byung bar mi 'gyur ro // de ste tha dad pa ma yin na ni 'jug pa'i [P76b1] rnam par shes pa 'gags na kun gzhi rnam par shes pa 'ang 'gag par 'gyur na / de ltar bdag gi rigs kyi mtshan nyid 'gag par yang mi 'gyur te / de'i phyir blo gros chen po rnam par shes pa rnam kyi rang gi rigs [P76b2] kyi [D70a3] mtshan nyid 'gag par mi 'gyur gyi las kyi mtshan nyid ni 'gag go //¹³ rang gi rigs kyi mtshan nyid 'gags na kun gzhi rnam par shes pa 'ang 'gag par 'gyur te / [Nj39] blo gros chen po kun gzhi rnam par shes pa [P76b3] 'gags na ni smra ba 'di yang mu stegs byed pa'i chad par smra ba dang khyad par med [D70a4] par 'gyur ro // blo gros chen po mu stegs byed rnam kyi smra ba ni 'di lta ste / 'di ltar yul la 'dzin pa rgyun chad¹⁴ pas rnam par [P76b4] shes pa'i rgyun chad par 'gyur te / rnam par shes pa'i rgyun chad pas thog ma med pa'i dus kyi rgyun yang chad par 'gyur ba'o //

⁶ om. P.

⁷ // P.

⁸ tha mi P.

⁹ / P.

¹⁰ sto D.

¹¹ dang / P.

¹² thal D.

¹³ / P.

¹⁴ 'chad P.

1. 7

blo gros chen po mu stegs byed [D70a5] rnam ni rgyu las rgyun 'byung bar smra'i¹⁵ / rgyu ma gtogs par [P76b5] mig gi rnam par shes pa gzugs dang snang ba 'dus pa las 'byung bar mi smra ste / blo gros chen po rgyu ni gtso bo dang / skyes bu dang / dbang po dang / dus dang / rdul phra mor smra ba'o //

2. 1

gzhan yang blo gros chen po dngos [D70a6] po'i rang [P76b6] bzhin bdun yod de / 'di ltar 'du ba dngos po'i rang bzhin dang / dngos po'i rang bzhin gyi dngos po dang / mtshan nyid kyi dngos po dang / 'byung ba chen po'i rang bzhin gyi dngos po dang / rgyu'i dngos po dang / rkyen gyi dngos po dang / [P76b7] 'grub pa'i dngos po ste bdun no //

2. 2

[D70a7] blo gros chen po gzhan yang don dam pa bdun te / 'di ltar sems kyi spyod yul dang / ye shes kyi spyod yul dang / lta ba gnyis kyi spyod yul dang / lta ba gnyis las 'das pa'i spyod yul dang / [P76b8] snang ba med pa'i spyod yul dang / sras kyi sa las 'da' ba'i spyod yul dang / de bzhin [D70b1] gshegs pa'i so so rang gis rig pa'i spyod yul te /

2. 3

[Nj40] 'di dag ni blo gros chen po 'das pa dang / ma 'ongs pa dang / da ltar gyi de bzhin gshegs [P77a1] pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam kyi dngos po'i rang bzhin dang / don dam pa'i snying po yin te / dngos po'i [D70b2] rang bzhin dang¹⁶ don dam pa'i snying po de dang ldan pas de bzhin gshegs pa [P77a2] rnam 'jig rten pa dang 'jig rten las 'das pa'i mchog gi chos rang dang spyi'i mtshan nyid du gtogs pa'i rnam 'phags pa'i shes rab kyi spyang gyis rnam par 'god de / ji [D70b3] ltar mu stegs byed pa'i smra ba dang / lta ba ngan [P77a3] pa dang thun mong du mi 'gyur ba de ltar rnam par 'god do //

2. 4

blo gros chen po ji ltar na mu stegs byed pa'i smra ba dang / lta ba ngan pa dang thun mong ma yin pa yin zhe na / 'di lta ste / blo gros chen po rnam par shes pa rnam gyi¹⁷ bdag [P77a4] gi yul la [D70b4] rnam par rtog pa'i lta ba khong du ma chud pa dang / bdag gi sems snang ba tsam du mi 'jug pas byis pa so so'i skye bo rnam dngos po dang

¹⁵ 'o P.

¹⁶ dang / P.

¹⁷ kyi P.

/¹⁸ dngos po med pa'i rang bzhin don dam par lta¹⁹ ba gnyis su smra bar gyur to //

3. 1

blo [P77a5] gros chen po gzhan yang mi shes pa dang / sred pa dang / las kyi rkyen [D70b5] rnams par log pa / rnam par rtog pa / srid pa gsum gyi sdug bsngal rnam par zlog pa / rang gi sems snang ba'i yul²⁰ sgyu ma rjes su mthong ba bshad par bya'o //

3. 2

[P77a6] blo gros chen po dge sbyong ngam / bram ze gang la la ma byung ba'am / yod pa rgyu las 'bras bu mngon pa dang / dngos po [D70b6] yun du gnas pa dang / rkyen rnams las phung po dang / khams dang / skye mched rnams skye ba dang / gnas pa dang / byung [P77a7] nas kyang 'jig par 'dod de / blo gros chen po de dag ni rgyun dang / bya ba dang / skye ba dang / srid pa dang / mya ngan las 'das pa dang / lam dang / las [D70b7] dang 'bras bu dang / bden pa dang²¹ rnam par 'jig pa dang / chad par lta bar 'gyur te / [Nj41] de [P77a8] ci'i phyir zhe na / mngon sum dang /²² mi dmigs pas²³ / thog ma mthong ba med pa'i phyir ro //

3. 3

blo gros chen po 'di lta ste / gyo mo ni rdza ma med pa las²⁴ rdza ma'i bya ba mi byed do // sa bon tshig pa'ang [D71a1] myu gu'i bya ba mi byed de / blo gros chen [P77b1] po de bzhin du phung po dang khams dang / skye mched kyi dngos po de dag 'gags pa dang / 'gag pa dang / 'gag par 'gyur ba ni bdag ni sems snang ba rnam par rtog pa mthong ba'i rgyu las byung bas de dag ni rgyun mi chad par 'byung ba [D71a2, P77b2] med do //

3. 4

blo gros chen po gal te ma byung ba'am / yod pa las rnam par shes pa rnam²⁵ gsum phrad pa'i rkyen gyi byed pa ldan pa las 'byung du zin na ni blo gros chen po ru sbal gyi spu lta bu med pa rnams dang / bye ma las kyang [P77b3] 'bru mar 'byung bar 'gyur ro // blo gros chen po yod pa dang med pa [D71a3] las 'byung bar smra ba las dam bcas pa nyams pa dang / nges pa las 'gal ba dang / bya ba dang las dang²⁶ byed pa don med par

¹⁸ om. P.

¹⁹ blta P.

²⁰ yul / P.

²¹ dang / P.

²² om. P.

²³ pa dang P.

²⁴ pas P.

²⁵ rnam pa P.

²⁶ 'di P.

yang 'gyur ro²⁷ // blo gros chen [P77b4] po de dag la yang gsum phrad pa'i rkyen gyi byed pa dang ldan pas rgyu dang 'bras bu dang / rang gi mtshan nyid du ston pa yod de / 'das [D71a4] pa dang / ma 'ongs pa dang / da ltar byung ba'i yod pa dang / med pa'i mtshan nyid yod par rig [P77b5] pa dang / gzhung gis brtags pa'i sa la gnas shing rang gi lta ba nyes pa'i bag chags kyis ston te / blo gros chen po de ltar byis pa so so'i skye bo rnams nyes pa'i lta bas zin pa mi mnyam pa'i [D71a5] blo can rnams mi shes pas [P77b6] bstan pa la thams cad mkhyen pas bstan to zhes zer ro //

3. 5

blo gros chen po dge sbyong ngam bram ze [Nj42] gang la la rang bzhin med pa sprin dang²⁸ mgal²⁹ me bskor³⁰ ba dang / dri za'i grong khyer dang / ma skyes pa dang / sgyu ma dang / smig rgyu ba dang / [P77b7] chu'i zla ba dang / rmi [D71a6] lam dang / phyi rol du sems kyi snang ba rnam par rtog pa dang thog ma med pa'i dus kyi spros pa mthong bas rang gi sems snang ba /³¹ rnam par rtog pa'i rkyen phyir ldog pa med pa / yongs su brtags pa'i brjod pa dang / mtshan [P77b8] dang mtshan gyi gzhi dang / brjod par bya ba dang bral ba / lus dang [D71a7] longs spyod dang / gnas su snang ba'i kun gzhi rnam par shes pa dang /³² yul dang / gzung ba dang / 'dzin pa dang³³ rnam par bral ba / snang ba med pa'i spyod yul / [P78a1] skye ba dang gnas pa dang 'jig pa spangs pa / bdag gi sems skye ba dang ldan pa rnam par bsgom³⁴ par 'gyur te / blo gros chen [D71b1] po byang chub sems dpa' sems dpa' chen po de dag ni ring por³⁵ mi thogs par 'khor ba dang mya ngan las [P78a2] 'das pa mnyam pa nyid 'thob par 'gyur ro //

3. 6

blo gros chen po snying rje chen po dang thabs la³⁶ mkhas pa lhun gyis grub par gyur pa'i sbyor pa dang / sems can gyi khams thams [D71b2] cad sgyu ma dang / gzugs brnyan dang mnyam pa nyid dang / rkyen [P78a3] gyis ma brtsams pa dang / phyi nang gi yul rnam par dpen pa dang / sems kyi³⁷ phyi rol tu lta bas mtshan ma med pa'i byin gyi rlabs dang ldan pa rnams rim gyis sa'i rim pa ting nge 'dzin gyi yul la rjes su 'jug pa dang / [D71b3] khams gsum [P78a4] bdag gi sems sgyu mar shin tu mos par³⁸ rab tu

²⁷ te P.
²⁸ dang / P.
²⁹ 'gal P.
³⁰ skor P.
³¹ om. P.
³² om. P.
³³ dang / P.
³⁴ sgom P.
³⁵ po P.
³⁶ om. P.
³⁷ om. P.
³⁸ pas P.

sgom³⁹ pas sgyu ma lta bu'i ting nge 'dzin rab tu 'thob par 'gyur ro //

3. 7

bdag gi sems smad⁴⁰ ba med pa tsam la 'jug pas shes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas pa la⁴¹ rjes su thob pa⁴² skye ba [P78a5] dang / bya ba dang ldan pa'i byang chub [D71b4] sems dpa' rnamts ting nge 'dzin rdo rje'i gzugs lta bu de bzhin gshegs pa'i sku'i rjes su song ba de bzhin nyid kyi sprul pa dang ldan pa / stobs dang / mngon par shes pa dang / dbang dang / snying brtse ba dang / [P78a6] snying rje dang thabs kyi brgyan pa / sangs rgyas thams cad kyi zhing [D71b5] gi mu stegs can gyi gnas su nye bar 'gro ba / [Nj43] sems dang yid dang /⁴³ yid kyi rnam par shes pa dang bral pa / rim gyis gnas 'phos pa'i de bzhin gshegs pa'i sku rab tu [P78a7] 'thob par 'gyur ro // blo gros chen po de bas na byang chub sems dpa' sems dpa' chen po de bzhin gshegs [D71b6] pa'i sku'i rjes su 'brang ba rab tu 'thob pa rnamts kyi⁴⁴ phung po dang / khams dang skye mched dang / sems dang rgyu dang / [P78a8] rkyen dang bya ba dang ldan pa dang / skye ba dang gnas pa dang / 'jig par rnam par rtog pa'i spros pa dang bral bar sems tsam gyi rjes su 'brang bar bya'o // thog ma med [D71b7] pa'i dus kyi spros⁴⁵ pa'i gnas ngan len gyi bag chags 'byung⁴⁶ ba'i [P78b1] sred pa gsum po rab tu mthong nas / sangs rgyas kyi snang ba med pa / mi skye ba dran pa'i phyir 'phags pa so so rang gi chos rtogs par khong du chud pas bdag gi sems la dbang sgyur zhing / lhun gyis grub pa'i spyod pa [D72a1] rtogs par khong [P78b2] du chud pas gzugs sna tshogs kyi nor bu dang 'dra ba shin tu phra zhing sems can gyi sems kyi rjes su 'jug pa'i sprul pa'i gzugs dang / sems tsam du 'jug pas sa'i rim pa'i mtshams sbyor ba 'brel par⁴⁷ rab tu 'jog par [P78b3] 'gyur ro // blo gros chen [D72a2] po de bas na byang chub sems dpa' sems dpa' chen pos bdag gi grub pa'i mtha' la mkhas par bya'o //

4. 1

de nas yang blo gros chen pos gsol ba / bcom ldan 'das sems dang yid dang rnam par shes [P78b4] pa dang chos lnga dang / rang bzhin gyi mtshan nyid sangs rgyas dang / byang chub [D72a3] sems dpa' rnamts rjes su dong ba bdag gi sems snang ba'i spyod yul dang rnam par bral bar byed pa / brjod pa dang / rigs pa dang / de kho na nyid kyi mtshan [P78b5] nyid rnam par 'jig pa / sangs rgyas thams cad kyi gsung rab kyi snying

³⁹ bsgom P.

⁴⁰ snang P.

⁴¹ om. P.

⁴² par P.

⁴³ om. P.

⁴⁴ kyi P.

⁴⁵ sprul P.

⁴⁶ byung P.

⁴⁷ pa P.

po chos kyi nam grangs kyi me tog bshad du gsol /⁴⁸ [D72a4] lang ka'i grong rdal dang / ma la ya'i rgya mtsho la gnas pa'i byang chub sems dpa' nam kyi slad du [P78b6] [Nj44] kun gzhi nam par shes pa'i spyod yul rgya mtsho'i rlabs lta bu chos kyi sku de bzhin gshegs pas rjes su gsungs pa bshad du gsol /

4. 2. 1

da nas bcom ldan 'das kyis kyang byang chub [D72a5] sems dpa' sems dpa' chen po blo gros [P78b7] chen po la 'di skad ces bka' stsal to // blo gros chen po mig gi nam par shes pa ni rgyu bzhi dag gis 'byung ngo // bzhi gang zhe na /⁴⁹ 'di lta ste / rang gi sems snang ba la 'dzin par khong du ma chud pa dang / thog ma med pa'i dus nas [P78b8] spros [D72a6] pa'i gnas ngan len gyi gzugs kyi bag chags la mngon par zhen pa dang / nam par shes pa'i rang bzhin gyi ngo bo nyid dang /⁵⁰ gzugs nam pa sna tshogs kyi mtshan nyid la ngo mtshar du 'dzin pa yin te /

4. 2. 2

blo gros chen po rgyu bzhi [P79a1] po 'di dag gis kun gzhi nam par shes pa chu'i klung lta bu las [D72a7] 'jug pa'i nam par shes pa'i rlabs 'byung ngo // blo gros chen po mig gi nam par shes pa la ji lta ba bzhin du dbang po thams cad kyi rdul phra rab dang / [P79a2] spu'i khung bu nam la'ang de bzhin te / me long la cig⁵¹ car⁵² dang / rim gyis yul gyi gzugs snang ba dang / rgya mtsho la rlung gis [D72b1] btab pa bzhin du blo gros chen po yul gyi rlung dang / sems kyi rgya mtsho'i rlabs rgyu'i bya ba rgyun [P79a3] mchad pa'i mtshan nyid gcig dang / tha dad pa las nam par grol ba las dang rigs kyi mtshan nyid dang /

4. 2. 3

shin tu 'brel pa'i rang bzhin ngo po nyid khong du mi chud pa nam par shes pa'i tshogs [D72b2] lnga 'jug go / blo gros chen po nam [P79a4] par shes pa'i tshogs lnga po de dag dang lhan cig tu rgyu dang /⁵³ yul gyi bye brag 'byed pa'i mtshan nyid khong du chud par byed pa zhes bya ba'i yid kyi nam par shes pa de dag gi rgyu las byung ba'i bdag nyid rab tu 'jug ste / de dag dang [P79a5] de 'di snyam du bdag [D72b3] cag ni lhan cig tu phan tshun rgyur gyur cing / rang gi sems snang ba'i nam par rtog pa la mngon par zhen pas zhugs pa'o snyam du mi sems so // 'on kyang phan tshun tha mi dad pa'i mtshan nyid du lhan [P79a6] cig nam par rig pa'i yul bye brag 'byed pa la 'jug ste /

⁴⁸ // P.

⁴⁹ om. P.

⁵⁰ om. P.

⁵¹ gcig P.

⁵² char P.

⁵³ om. P.

4. 2. 4

[Nj45] de ltar 'jug pa'i tshe⁵⁴ mnyam [D72b4] par bzhag pa'i rnal 'byor can gyis kyang ji ltar shin tu phra bar rgyu ba'i bag chags 'jug pa rnam mi shes par rgyu rnal 'byor can [P79a7] rnam ni 'di ltar bdag cag rnam par shes pa rnam bkag nas snyoms par 'jug go snyam du sems kyang /⁵⁵ de dag ni rnam par shes pa ma 'gags bzhin [D72b5] du snyoms par 'jog ste / bag chags kyi sa bon ma 'gags pa'i phyir ni [P79a8] ma 'gags pa'o // yul la 'jug cing 'dzin pa med pas ni 'gags so //

4. 2. 5

blo gros chen po kun gzhi rnam par shes pa rgyu zhing 'jug pa de ltar shin tu phra bas de bzhin gshegs pa dang sa la rab tu gnas [D72b6] pa'i byang chub [P79b1] sems dpa' rnam ma gtogs par gzhan nyan thos dang / rang sangs rgyas dang /⁵⁶ mu stegs can gyi rnal 'byor gyi rnal 'byor pa rnam kyis khong du chud pa'am / ting nge 'dzin dang / shes rab kyi stobs kyis kyang rtogs par sla ba ma yin [P79b2] no // blo gros chen po gzhan [D72b7] du na sa'i mtshan nyid dang / shes rab dang / ye shes la mkhas shing /⁵⁷ tshig rab tu phye ba la rnam par gdon mi za ba rgyal ba rnam la mtha' yas pa'i dge ba'i rtsa ba bsags⁵⁸ pa / rang gi sems snang ba la [P79b3] rnam par rtog pa'i spros pa dang bral ba /

4. 2. 6

nags tshal stug po dang / phug [D73a1] dang shing khrod na gnas shing rnal 'byor rab dang 'bring dang tha ma la rnal 'byor pa rnam kyis rang gi sems kyi rnam par rtog pa snang ba'i rgyud mthong ba dang / [P79b4] zhing mtha' yas pa'i rgyal ba rnam kyis dbang bskur ba dang / dbang dang /⁵⁹ stobs dang / mngon par shes pa dang / [D73a2] ting nge 'dzin rnam kyang thob par nus so // blo gros chen po dge ba'i bshes gnyen gyi skye bo la ri mor byas pa rnam kyis⁶⁰ sems [P79b5] dang / yid dang yid kyi rnam par shes pa rang gi sems snang ba'i rang bzhin gyi spyod yul rnam par rtog pa'i 'khor ba srid pa'i rgya mtsho las dang / sred pa dang / [D73a3] mi shes pa'i rgyu las byung ba las rgal bar nus so // blo gros chen po de'i [P79b6] phyir rnal 'byor can gyis⁶¹ dge ba'i bshes gnyen gyi skye bo dang [Nj46] bsten pa'i nan tan brtsam par bya'o //

5

de nas de'i tshe bcom ldan 'das kyis tshigs su bcad pa 'di dag bka' stsal to //

⁵⁴ tshe / P.

⁵⁵ om. P.

⁵⁶ om. P.

⁵⁷ om. P.

⁵⁸ bstasgs P.

⁵⁹ om. / P.

⁶⁰ kyi P.

⁶¹ gyi P.

ji ltar rgya mtsho'i dba' [D73a4] rlabs rnams //
[P79b7] rlung gi rkyen gyis byung ba dag //
gar cing rab tu 'byung ba ni //
rgyun yang rnam par 'chad pa med // 99

kun gzhi chu po de bzhin du //
rtag tu yul gyi rlung gis bskyod //
sna tshogs rnam shes dba' rlabs rnams //
gar cing rab tu 'byung [P79b8] bar 'gyur // 100

[D73a5] sngon po dmar po lan tshwa dang //
mar dang 'o ma kha ra dang //
bska ba'i 'bras bu me tog dang //
ji ltar nyi zla'i⁶² 'od zer dang // 101

rgya mtsho yi ni dba' rlabs dag //
mi gcig tha dad min par shes //
de bzhin rnam [P80a1] shes bdun po yang //
sems dang lhan cig ldan pa'o // 102

rgya mtsho yongs su [D73a6] gyur pa ni //
dba' rlabs sna tshogs de dag ste //
rnam par shes zhes⁶³ bya ba ni //
kun gzhi de bzhin sna tshogs 'byung // 103

sems dang yid dang rnam shes [P80a2] pa //
mtshan nyid don du rab tu brtag //
brgyad po tha dad ma yin mtshan //
mtshan gyi gzhi dang mtshan nyid med // 104

rgya mtsho dang ni dba' [D73a7] rlabs rnams //
ji ltar khyad par med pa bzhin //
sems dang rnam shes de bzhin du //
yongs su gyur [P80a3] pa mi rnyed do // 105

sems ni las rnams sogs par byed //

⁶² ma'i P.

⁶³ shes P.

yid kyang rnam par sogs pa ste //
rnam par shes pas rnam par rig //
Inga po snang la rtog par byed // 106

[Nj47] sngon po dmar [D73b1] po'i⁶⁴ rnam par ni //
mi yi rnam par shes pa gda' //
dba' [P80a4] rlabs sems dang 'thun pa'i chos //
ci slad thub chen bshad du gsol // 107

sngon po dmar po'i rnam pa rnams //
dba' rlabs dag la ma mchis te //
mtshan nyid don du byis pa la //
sems kyi 'jug pa bshad [D73b2] pa'o // 108

de la 'jug [P80a5] pa med pa ste //
rang gi sems ni gzung ba spangs //
gzung ba yod na 'dzin pa yang //
dba' rlabs 'thun par sgrub par 'gyur // 109

lus dang longs spyod gnas lta bur //
mi yi rnam par shes par snang //
de phyir de yi 'jug pa ni //
[P80a6] dba' [D73b3] rlabs dag dang 'dra bar snang // 110

dba' rlabs dngos por rgya mtsho ni //
gar byed rnam par rig 'gyur na //
kun gzhi 'jug pa de bzhin du //
ci yi phyir na blos mi rig // 111

byis pa blo dang mi ldan pas //
kun gzhi rgya mtsho ji [P80a7] bzhin du //
dba' rlabs 'byung ba'i chos 'thun phyir //
[D73b4] dpe yis nye bar sbyar ba yin // 112

skye bo bzang ngan bar ma la //
gdugs 'char 'gyur ba ji bzhin du //
de bzhin 'jig rten sgron ma khyod //

⁶⁴ po P.

bus pa rnam la yang dag [P80a8] ston // 113

[Nj48] chos la rab tu bzhugs mdzad cing //
ci slad de bzhin nyid mi gsung //
de ste de bzhin nyid gsung [D73b5] na //
sems la de bzhin nyid ma mchis // 114

ji ltar rgya mtsho'i dba' rlabs dang //
me long rmi lam ji bzhin du //
cig [P80b1] cha'i dus su snang ba bzhin //
sems kyang rang gi spyod yul la // 115

yul dang rnam par mi ldan pas //
rim gyis 'jug par rab tu 'byung //
rnam par shes [D73b6] pas rnam par rig //
yid kyis de bzhin snyems par byed // 116

lnga po rnam la [P80b2] snang bar mngon //
mnyam par bzhag la rim pa med //
ri mo'i mkhan po la la'am //
ri mo mkhan gyi slob ma'ang rung // 117

ri mo'i don du tshon⁶⁵ 'gyed pa //
bshad pa 'di yang de dang 'dra //
tshon [D73b7] la ri mo yod pa min //
pir dang snod la'ang [P80b3] de bzhin med // 118

sems can drang ba'i don gyi phyir //
tshon gyis ri mo rnam par brtag //
yang dag la ni yi ge med //
bshad pa dag ni 'khrul pa'o // 119

chos rnam la ni gnas bcas shing //
rnal 'byor can la yang dag bstan //
[D74a1, P80b4] so so rang rig yang dag ni //
brtag dang rtog pas yang dag spangs // 120

⁶⁵ mtshon P.

rgyal ba'i sras la 'di bstan gyi //
byis pa rnams la bshad ma yin //
ji ltar sgyu ma sna tshogs dag //
snang yang yod pa ma yin te // 121

de bzhin bshad pa sna [P80b5] tshogs kyang⁶⁶ //
bshad [D74a2] pa rnam par 'khrul pa yin //
[Nj49] gzhan la gang zhig bstan pa de //
gzhan la bshad par mi rung ste // 122

ji ltar nad pa so so la //
sman pa sman rnams gtong ba ltar //
sangs rgyas de bzhin sems can la //
sems [P80b6] tsam du'ang rab tu gsung // 123

mgon po rnams ni gang [D74a3] gsung ba'i //
so so rang rig spyod yul ni //
rtog pa can gyi yul ma yin //
nyan thos rnams kyi'ang de bzhin min // 124

⁶⁶ dag P.

『楞伽經』第二章「一切法の集成」

1.1

[483a10] 爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。諸識有幾種生住滅。佛告大慧。諸識有二種生住滅。非思量所知。諸識有二種生。謂流注生及相生。有二種住。謂流注住及相住。有二種滅。謂流注滅及相滅。

[521c22] 爾時聖者大慧菩薩復白佛言。世尊。諸識有幾種¹生住滅。佛告聖者大慧菩薩言。大慧。諸識生住滅。非思量者之所能知²。大慧。諸識各有二種生住滅³。大慧。諸識二種滅者⁴。一者相滅。二者相續滅。大慧。諸識又二種住。一者相住。二者相續住⁵。大慧。諸識有二種生⁶。一者相生。二者相續生⁷。

[593b12] 爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。諸識有幾種生住滅。佛言。大慧。諸識有二種生住滅。非臆度者之所能知。所謂相續生及相生。相續住及相住。相續滅及相滅。

1.2

⁸諸識有三種相。謂轉相業相眞⁹相。

大慧。識有三種。何等三種。一者轉 [522a] 相識。二者業相識。三者智相識。

諸識有三相。謂轉相業相眞相。

1.3

大慧。略說有三種識。廣說有八相。何等爲三。謂眞識現識及分別事識。大慧。譬如明鏡持

¹ 有幾種=幾種有 (宋)(宮)。

² om. 大慧菩薩言。大慧。諸識生住滅。非思量者之所能知。(三)(宮)。

³ ins. 非思量者之所能知 (三)(宮)。

⁴ 二種滅者=有二種滅何等二種 (三)(宮)。

⁵ om. 大慧。諸識又二種住。一者相住。二者相續住。(三)(宮)。

⁶ ins. 何等爲二 (三)(宮)。

⁷ ins. 大慧諸識有二種住何等爲二一者相住二者相續住 (三)(宮)。

⁸ ins. 大慧 (明)。

⁹ 生 (元)。以下同様。

諸色像。現識處現亦復如是。大慧。現識及分別事識。此二壞不壞。相展轉因。大慧。不思議熏¹⁰。及不思議變。是現識因。大慧。取種種塵。及無始妄想熏。是分別事識因。

大慧。有八種識。略說有二種。何等爲二。一者了別識。二者分別事識。大慧。如明鏡中見諸色像。大慧。了別識亦如是見種種鏡像。大慧。了別識分別事識。彼二種識無差別相迭共爲因。大慧。了別識不可思議熏變因。大慧。分別事識分別取境界。因無始來戲論熏習。

大慧。識廣說有八。略則唯二。謂現識及分別事識。大慧。如明鏡中現諸色像。現識亦爾。大慧。現識與分別事識。此二識無異相互爲因。大慧。現識以不思議熏變爲因。分別事識。以分別境界及無始戲論習氣爲因。

1.4

大慧。若覆彼眞識。種種不實諸虛妄滅。則一切根識滅。大慧¹¹。是名相滅。大慧。相續滅者。相續所因滅則相續滅。所從滅及所緣滅則相續滅。大慧。所以者何。是其所依故。依者謂無始妄想熏。緣者謂自心見等識境妄想。

大慧。阿梨耶識虛妄分別種種熏滅諸根亦滅。大慧。是名相滅。大慧。相續滅者。相續因滅則相續滅。因滅緣滅則相續滅。大慧。所謂依法依緣。言依法者。謂無始戲論妄想熏習。言依緣者。謂自心識見境界¹²分別。

大慧。阿賴耶識虛妄分別種種習氣滅即一切根識滅。是名相滅。大慧。相續滅者。謂所依因滅及所緣滅即相續滅。所依因者。謂無始戲論虛妄習氣。所緣者。謂自心所見分別境界。

1.5

大慧。譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是。大慧。若泥團微塵異者。非彼所成而實彼成。是故不異。若不異者。則泥團微塵應無分別。

大慧。譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復¹³如是。非異非不異。大慧。若泥團異者非彼所成。而實彼成。是故不異。若不異者。泥團微塵應無差¹⁴別。

¹⁰ 熏 (元)(明)。以下同樣。

¹¹ om. 大慧 (明)。

¹² om. 界 (宋)(宮)。

¹³ om. 復 (三)(宮)。

¹⁴ 分 (三)(宮)。

大慧。譬如泥團與微塵非異非不異。金與莊嚴具亦如是。大慧。若泥團與微塵異者。應非彼成而實彼成。是故不異。若不異者。泥團微塵應無分別。

1.6

如是大 [483b] 慧。轉識藏識真相若異者。藏識非因。若不異者。轉識滅藏識亦應滅。而自真相實不滅。是故大慧。非自真相識滅。但業相滅。若自真相¹⁵滅者。藏識則滅。大慧。藏識滅者。不異外道斷見論議。大慧。彼諸外道作如是論。謂攝受境界滅識流注亦滅。若識流注滅者。無始流注應斷。

大慧。如是轉識阿梨耶識。若異相者。不從阿梨耶識生。若不異者。轉識滅阿梨耶識亦應滅。而自相阿梨耶識不滅。是故大慧。諸¹⁶識自相滅。自相滅者業相滅。若自相滅者阿梨耶識應滅。大慧。若阿梨耶識滅者。此不異外道斷見戲論。大慧。彼諸外道作如是說。所謂離諸境界相續識滅。相續識滅已即滅諸識。大慧。若相續識滅者。無始世來諸識應滅。

大慧。轉識藏識若異 [593c] 者。藏識非彼因。若不異者。轉識滅藏識亦應滅。然彼真相不滅。大慧。識真相不滅但業相滅若真相滅者藏識應滅。若藏識滅者。即不異外道斷滅論。大慧。彼諸外道作如是說。取境界相續識滅。即無始相續識滅。

1.7

大慧。外道說流注生因非眼識色明集會而生。更有異因。大慧。彼因者說言。若勝妙若士夫若自在若時若微塵

大慧。諸外道說相續諸識從作者生。不說識依眼色空明和合而生。而說有作者。大慧。何者是外道作者。勝人自在時微塵等¹⁷是能作者。

大慧。彼諸外道說相續識從作者生。不說眼識依色光明和合而生。唯說作者為生因故。作者是何。彼計勝性丈夫自在時及微塵。為能作者。

2.1

復次大慧。有七種性自性。所謂集性自性。性自性。相性自性。大種性自性。因性自性。緣性自性。成性自性。

¹⁵ ins. 識 (明).

¹⁶ 識 (宮).

¹⁷ om. 等 (三)(宮).

復次大慧¹⁸。有七種自性。何等爲七。一者集性自性。二者性自性。三者相性自性。四者大 [522b] 性自性。五者因性自性。六者緣性自性。七者成性自性。

復次大慧。有七種自性。所謂集自性。性自性。相自性。大種自性。因自性。緣自性。成自性。

2.2

復次大慧。有七種第一義。所謂心境界。慧境界。智境界。見境界。超二見境界。超子地境界。如來自到境界。

復次大慧¹⁹。有七種第一義。何等爲七。一者心境界。二者智境界。三者慧境界。四者二見境界。五者過二見境界。六者過佛子地境界。七者入如來地內行境界。

復次大慧。有七種第一義。所謂心所行。智所行。二見所行。超二見所行。超子地所行。如來所行。如來自證聖智所行。

2.3

大慧。此是過去未來現在諸如來應供等正覺性自性第一義心(此心梵音肝²⁰栗大肝栗大宋言心謂如樹木心非念慮心念慮心梵音云²¹質多也)²²。以性自性第一義心。成就如來世間出世間出世間上上法。聖慧眼入自共相建立。如所建立。不與外道論惡見共。

大慧。此是過去未來現在諸佛如來應正遍知性自性第一義心。大慧。依此性自性第一義心。諸佛如來畢竟得於世間出世間。諸佛智慧眼同相別相諸法建立。如所建立不與外道邪見共同。

大慧。此是過去未來現在一切如來應正等覺。法自性第一義心。以此心成就如來世間出世間最上法。以聖慧眼。入自共相種種安立。其所安立不與外道惡見共。

2.4

¹⁸ ins. 外道 (三)(宮).

¹⁹ ins. 我 (三)(宮).

²⁰ 汚 (元). 以下同樣.

²¹ om. 云 (宮).

²² om. (此.....也) (明).

大慧。云何外道論惡見共。所謂自境界妄想見。不覺識自心所現。分齊不通。大慧。愚癡凡夫性無性自性第一義作二見論。

大慧。云何不與外道邪見共同。所謂分別自心境界妄想見。而不覺知自心想見。大慧。諸愚癡凡夫。無有實體以爲第一義。說二見論。

大慧。云何為外道惡見。謂不知境界自分別現。於自性第一義。見有見無而起言說。

3.1

復次大慧。妄想三有苦滅。無知愛業緣滅。自心所現幻境。隨見今當說。

復次大慧。汝今諦聽我爲汝說。虛妄分別以爲有物。爲斷三種苦。何等爲三。謂無知愛業因緣滅。自心所見如幻境界。

大慧。我今當說。若了境如幻自心所現。則滅妄想三有苦及無知愛業緣。

3.2

大慧。若有沙門婆羅門。欲令無種有種因果現。及事時住。緣陰界入生住。或言生已滅。大慧。彼若相續若事若生若有若涅槃若道若業若果若諦。破壞斷滅論。所以者何。以此現前不可得及見始 [483c] 非分故。

大慧。諸沙門婆羅門作如是說。本無始生依因果而現。復作是說。實有物住依諸緣故。有陰界入生住滅²³。以生者滅故。大慧。彼沙門婆羅門說。相續體本無始有若生若滅若涅槃若道若業若果若諦。破壞諸法是斷滅論。非我所說。何以故。以現法不久當²⁴可得故。不見根本故。

大慧。有諸沙門婆羅門。妄計非有及有於因果外顯現諸物。依時而住。或計蘊界處依緣生住。有已即滅。大慧。彼於若相續若作用若生若滅若諸有若涅槃若道若業若果若諦。是破壞斷滅論。何以故。不得現法故。不見根本故。

3.3

大慧。譬如破瓶不作瓶事。亦如焦種不作芽²⁵事。如是大慧。若陰界入性。已滅今滅當滅。自

²³ ins. 故 (三)(宮).

²⁴ om. 當 (三)(宮).

²⁵ 芽 (元)(明).

心妄想見。無因故彼無次第生。大慧。若復說無種有種識三緣合生者。龜應生毛。沙應出油。汝宗則壞。違決定義。有種無種說有如是過。所作事業悉空無義。

大慧。譬如瓶破不得瓶用。大慧。譬如焦種不生芽²⁶等。大慧。彼陰界入是滅。過去陰界入滅。現在未來亦滅。何以故。因自心虛妄分別見故。大慧。無彼陰界入相續體故。大慧。若本無始生依三法生種種識者。龜毛何故不生沙不出油。汝之所 [522c] 立決定之義是即自壞。汝說有無說生。所成因果亦壞。

大慧。譬如瓶破不作瓶事。又如焦種不能生牙。此亦如是。若蘊界處法已現當滅。應知此則無相續生。以無因故。但是 [594a] 自心虛妄所見。

3.4

大慧。彼諸外道說有三緣合生者。所作方便因果自相。過去未來現在有種無種相。從本已來成事相承覺想地轉。自見過習氣。作如是說。如是大慧。愚癡凡夫惡見所害²⁷。邪曲迷醉。無智妄稱一切智說。

大慧。若如是依三法因緣。應生諸法因果自相。過去現在未來有無諸相譬喻。及阿含自覺觀地依自見薰心。作如是說。大慧。愚癡凡夫亦復如是。惡見所害邪見迷意。無智妄稱一切智說。

復次大慧。若本無有識三緣合生。龜應生毛沙應出油。汝宗則壞。違決定義。所作事業悉空無益。大慧。三合為緣是因果性可說為有。過現未來從無生有。此依住覺想地者。所有理教及自惡見熏習餘氣。作如是說。大慧。愚癡凡夫惡見所噬邪見迷醉。無智妄稱一切智說。

3.5

大慧。若復諸餘沙門婆羅門。見離自性浮雲火輪捷鬪婆城。無生幻焰水月及夢。內外心現妄想。無始虛偽不離自心。妄想因緣滅盡。離妄想說所說觀所觀。受用建立身之藏識。於識境界攝受及攝受者不相應。無所有境界離生住滅。自心起隨入分別。

大慧。若復有沙門婆羅門。見諸法離自性故。如雲火輪捷鬪婆城不生不滅故。如幻陽炎水中月故。如夢內外心依無始世來虛妄分別戲論而現故。離自心虛妄分別可見因緣故。離滅盡妄想說所說法故。離身資生持用法故。離阿梨耶識取境界相應故。入寂靜境界故。離生住滅法

²⁶ 牙 (宋) (元) (宮)。

²⁷ 竹部+坐 (宋)，口部+筮 (元) (明)。

故。如是思惟觀察自心以為生故。

大慧。復有沙門婆羅門。觀一切法。皆無自性。如空中雲。如旋火輪。如乾闥婆城。如幻如焰。如水中月。如夢所見。不離自心。由無始來虛妄見故取以為外。作是觀已斷分別緣。亦離妄心所取名義。知身及物并所住處一切皆是藏識境界。無能所取及生住滅。如是思惟恒住不捨。

3.6

大慧。彼菩薩不久當得生死涅槃平等。大悲巧方便無開發方便。大慧。彼²⁸一切衆生界皆悉如幻。不勤因緣遠離內外境界。心外無所見。次第隨入無相處。次第隨入從地至地三昧境界。解三界如幻。分別觀察。當得如幻三昧。

大慧。如是菩薩不久當得世間涅槃平等之心。大慧。汝巧方便開發方便。觀察一切諸衆生界。皆悉如幻如鏡中像故。無因緣起遠離內境²⁹故。自心見外境界故。次第隨入無相處故。次第隨入從地至地三昧境界故。信三界自心幻故。大慧。如是修行者當得如幻三昧故。

大慧。此菩薩摩訶薩不久當得生死涅槃二種平等。大悲方便無功用行。觀³⁰衆生如幻如影從緣而³¹起。知一切境界離心無得。行無相道漸昇諸地住三昧境。了達三界皆唯自心。得如幻定絕衆影像。

3.7

度自心現無所有。得住般若波羅蜜。捨離彼生所作方便。金剛喻三摩提隨入如來身。隨入如如化。神通自在慈悲方便具足莊嚴等入一切佛刹外道入處。心意意識。是菩薩漸次轉身得如來身。大慧。是故欲得如來隨入身³²者。當遠離陰界入心因緣所作方便生住滅妄想虛偽。唯心直進。觀察無始 [484a] 虛偽過妄想習氣因三有思惟無所有佛地無生到自覺聖趣。自心自在到無開發行。如隨衆色摩尼。隨入衆生微細之心。而以化身隨心量度。諸地漸次相續建立。是故大慧。自悉檀善應當修學。

入自心寂靜境界故。到彼岸境界故。離作者生法故。得金剛三昧故。入如來身故。入如來化身故。入諸力通自在大慈大悲莊嚴身故。入一切佛國土故。入一切衆生所樂故。離心意意識

²⁸ ins. 於 (明).

²⁹ 內境=內外境界 (三)(宮).

³⁰ ins. 諸 (明).

³¹ 無 (三)(宮).

³² 息 (元).

境界故。轉身得妙身故。大慧。諸菩薩摩訶薩如是修行者。必得如來無上妙身³³。大慧。菩薩欲證如來身者。當遠離陰界入心因緣和合法故。遠離生住滅虛妄分別戲論故。諸法唯³⁴心。當如是知見三界 [523a] 因無始世來虛妄分別戲論而有故。觀如來地寂靜不生故。進趣內身聖行故。大慧。汝當不久得心自在無功用行究竟故。如衆色隨摩尼寶化身入諸衆生微細心故。以入隨心地故。令諸衆生次第入地故。是故大慧。諸菩薩摩訶薩應當善知諸菩薩修行自³⁵內法故。

成就智慧證無生法。入金剛喻三昧。當得佛身恒住如如。起諸變化力通自在。大慧。方便以為嚴飾遊衆佛國。離諸外道及心意識。轉依次第成如來身。大慧。菩薩摩訶薩欲得佛身。應當遠離蘊界處心因緣所作生住滅法戲論分別。但住心量觀察三有無始時來妄習所起。思惟佛地無相無生自證聖法。得心自在無功用行。如如意寶隨宜現身。令達唯心漸入諸地。是故大慧。菩薩摩訶薩於自悉檀應善修學。

4. 1

爾時大慧菩薩復白佛言。世尊。所說心意意識五法自性相。一切諸佛菩薩所行。自心見等所緣境界不和不合。顯示一切說成真實相。一切佛語心。為楞伽國摩羅耶山海中住處諸大菩薩。說如來所歎海浪藏識境界法身。

爾時聖者大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。惟願世尊³⁶。為諸菩薩摩訶薩。說心意意識五法自體相應³⁷法門諸佛菩薩修行之處。遠離自心邪見境界和合故。能破一切言語譬喻體相故。一切諸佛所說法心。為楞伽城摩羅耶山大海中諸菩薩。說觀察阿梨耶識大海波境界。說法身如來所說法故。

[594b7] 爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。唯願為我說心意意識五法自性相衆妙法門。此是一切諸佛菩薩。入自心境離所行相。稱真實義諸佛教心。唯願如來為此山中諸菩薩衆。隨順過去諸佛。演說藏識海浪法身境界。

4. 2. 1

爾時世尊告大慧菩薩言。四因緣故眼識轉。何等為四。謂自心現攝受不覺。無始虛偽過色習氣計著。識性自性欲見種種色相。大慧。是名四種因緣。

³³ ins. 故 (三)(宮).

³⁴ 惟 (三)(宮). 以下同樣.

³⁵ 行自 = 自行 (三)(宮).

³⁶ 惟願世尊 = 世尊惟願 (三)(宮).

³⁷ 等 (三)(宮).

爾時佛告聖者大慧菩薩摩訶薩言。大慧。有四因緣眼識生。何等為四。一者不覺自內身取境界故。二者無始世來虛妄分別色境界薰習執著戲論故。三者識自性體如是故。四者樂見種種色相故。大慧。是名四種因緣。

爾時世尊告大慧菩薩摩訶薩言。有四種因緣眼識轉。何等為四。所謂不覺自心現而執取故。無始時來取著於色虛妄習氣故。識本性如是故。樂見種種諸色相故。

4. 2. 2

水流處藏識轉識浪生。大慧。如眼識一切諸根微塵毛孔俱生。隨次境界生亦復如是。譬如明鏡現眾色像。大慧。猶如猛風吹大海水。外境界風飄蕩心海識浪不斷。因所作相異不異。合業生相深入計著。

於阿梨耶識海起大勇³⁸波能生轉識。大慧。如眼識起識。一切諸根毛孔一時轉識生。如鏡中像多少一時。復有隨因緣次第生。大慧。猶如猛風吹境心海而識波生不斷因事相故。迭³⁹共不相離故。業體相使⁴⁰縛故。

大慧。以此四緣阿賴耶識如瀑⁴¹流水。生轉識浪。如眼識餘亦如是。於一切諸根微塵毛孔眼等。轉識或頓生。譬如明鏡現眾色像。或漸生。猶如猛風吹大海水。心海亦爾。境界風吹起諸識浪。相續不絕。大慧。因所作相非一非異。業與生相相警繫深縛。

4. 2. 3

不能了知色等自性。故五識身轉。大慧。即彼五識身俱因。差別分段相知。當知是意識因。彼身轉。彼不作是念。我展轉相因。自心現妄想計著轉。而彼各各壞相俱轉。分別境界分段差別。

不覺色體故。而五識身轉故。大慧。不離彼五識因了別識相名為意識。共彼因常轉故。大慧。五識及心識不作是念。我迭共為因。自心見虛妄分別取諸⁴²境界。而彼⁴³各各不異。相俱現分別境界。如是彼識 [523b] 微細生滅。

³⁸ 湧 (元) (明)。

³⁹ 遞 (宮)。以下同樣。

⁴⁰ 快 (宮)。

⁴¹ 暴 (元) (明)。

⁴² 識 (宮)。

⁴³ 波 (元)。

不能了知色等自性。五識身轉。大慧。與五識俱。或了別差別境相有意識生。然彼諸識不作是念。我等同時展轉為因。而於自心所現境界。分別執著俱時而起。無差別相各了自境。

4. 2. 4

謂彼轉如修行者入禪三昧。微細習氣轉。而不覺知而作是念。識滅然後入禪正受。實不識滅而入正受。以習氣種子不滅故不滅。以境界轉攝受不具故滅。

以入修行三昧者不覺不知微細熏習。而修行者作是心⁴⁴。我滅諸識入三昧。而修行者不滅諸識入三昧。大慧。熏集⁴⁵種子心不滅。取外境界諸識滅。

大慧。諸修行者入於三昧。以習力微起而不覺知。但作是念。我滅諸識入於三昧。實不滅識而入三昧。以彼不滅習氣種故。但不取諸境名為識滅。

4. 2. 5

大慧。如是微細藏識究竟邊際。除諸如來及住地菩薩。諸聲聞緣覺外道修行所得三昧智慧之力。一切不能測量決了。餘地相智 [484b] 慧巧便。分別決斷句義。最勝無邊善根成熟。離自心現妄想虛偽。宴坐山林下中上修。能見自心妄想流注。

大慧。如是微細阿梨耶識行。⁴⁶除佛如來及⁴⁷入地諸菩薩摩訶薩。諸餘聲聞辟支佛外道修行者不能知故。入三昧智力亦不能覺。以其不知諸地相故。以不知⁴⁸智慧方便差別善決定故以不能覺諸佛如來集諸善根故。以不能知自⁴⁹現境界分別戲論故。以不能入種種稠林阿梨耶識窟故。大慧。惟⁵⁰下中上如實修行者。乃能分別見自心中虛妄見故。

大慧。如 [594c] 是藏識行相微細。唯除諸佛及住地菩薩。其餘一切二乘外道。定慧之力皆不能知。唯有修行如實行者。以智慧力了諸地相善達句義。無邊佛所廣集善根。不妄分別自心所見能知之耳。大慧。諸修行人宴處山林上中下修。能見自⁵¹心分別流注。

⁴⁴ 念 (三)(宮).

⁴⁵ 習 (三)(宮).

⁴⁶ ins. 惟 (三)(宮).

⁴⁷ om. 及 (三)(宮).

⁴⁸ ins. 能 (三)(宮).

⁴⁹ ins. 心 (三)(宮).

⁵⁰ 依 (三)(宮).

⁵¹ 目 (宋).

4. 2. 6

無量刹土諸佛灌頂。得自在力神通三昧。諸善知識佛子眷屬。彼心意意識自心所現自性境界。虛妄之想生死有海。業愛無知。如是等因悉以⁵²超度。是故大慧。諸修行者應當親近最勝知識。

能於無量國土爲諸如來授位故。得無量自在力神通三昧故。依善知識佛子眷屬而能得見心意意識自心自體境界故。分別生死大海以業愛無智⁵³以爲因有故。大慧。是故如實修行者。應推覓親近善知識故。

得諸三昧自在力通。諸佛灌頂菩薩圍繞。知心意意識所行境界。超愛業無明生死大海。是故汝等應當親近諸佛菩薩如。實修行大善知識。

5

〈求那跋陀羅〉

爾時世尊欲重宣此義而說偈言

譬如巨海浪	斯由猛風起	洪波鼓冥壑	無有斷絕時
藏識海常住 ⁵⁴	境界風所動	種種諸識浪	騰躍而轉生
青赤種種色	珂乳及石蜜	淡味衆華果	日月與光明
非異非不異	海水起波浪	七識亦如是	心俱和合生
譬如海水變	種種波浪轉	七識亦如是	心俱和合生
謂彼藏識處	種種諸識轉	謂以彼意識	思惟諸相義
不壞相有八	無相亦無相	譬如海波浪	是則無差別
諸識心如是	異亦不可得	心名採集業	意名廣採集
諸識識所識	現等境說五		

爾時大慧菩薩。以偈問曰

青赤諸色像	衆生發諸識	如浪種種法	云何唯願說
-------	-------	-------	-------

爾時世尊。以偈答曰 [484c]

青赤諸雜色	波浪悉無有	採集業說心	開悟諸凡夫
彼業悉無有	自心所攝離	所攝無所攝	與彼波浪同
受用建立身	是衆生現識	於彼現諸業	譬如水波浪

爾時大慧菩薩。復說偈言

大海波浪性	鼓躍可分別	藏與業如是	何故不覺知
-------	-------	-------	-------

爾時世尊。以偈答曰

⁵² 已 (明).

⁵³ 知 (三)(宮).

⁵⁴ 注 (元).

凡夫無智慧 爾時大慧菩薩。復說偈言	藏識如巨海 下中上衆生 何故不說實	業相猶波浪 如來照世間	依彼譬類通 爲愚說真實
日出光等照 已分部諸法 爾時世尊。以偈答曰			
若說真實者 一切俱時現 識者識所識 譬如工畫師 彩色本無文 言說別施行 [485a] 真實自悟處 種種皆如幻 所說非所應 如來爲衆生 哀愍者所說	彼心無真實 心境界亦然 意者意謂然 及與畫弟子 非筆亦非素 真實離名字 覺想所覺離 雖現無真實 於彼爲非說 隨心應量說 自覺之境界	譬如海波浪 境界不具故 五則以顯現 布彩圖衆形 爲悅衆生故 分別應初業 此爲佛子說 如是種種說 彼彼諸病人 妄想非境界	鏡中像及夢 次第業轉生 無有定次第 我說亦如是 綺錯續 ⁵⁵ 衆像 修行示真實 愚者廣分別 隨事別施設 良醫隨處方 聲聞亦非分

〈菩提留支〉

爾時世尊。而說偈言。

譬如巨海浪 梨耶識亦爾 青赤鹽珂乳 非異非不異 譬如海水動 心意及意識 譬如海水波 心能集諸業	斯由猛風起 境界風吹動 味及於石蜜 海水起波浪 種種波浪轉 爲諸相故說 [523c] 是則無差別 意能觀集境	洪波鼓冥壑 種種諸識浪 衆華與果實 七識亦如是 梨耶識亦爾 諸識無別相 諸識心如是 識能了所識	無有斷絕時 騰躍而轉生 如日月光明 心俱和合生 種種諸識生 非見所見相 異亦不可得 五識現分別
爾時聖者大慧菩薩摩訶薩。	以偈問佛		
青赤諸色像 爾時世尊以偈答曰	自 ⁵⁶ 識如是見	水波相對法何故如是說	
青赤諸雜色 彼業悉皆無 身資生住持 大海波浪動	波中悉皆無 自心離可取 衆生惟識見 鼓躍可分別	說轉識心中 可取及能取 是故現轉識 阿梨耶識轉	爲凡夫相說 與彼波浪同 水波浪相似 何故不覺知

⁵⁵ 繪 (三) (宮).

⁵⁶ 目 (三).

凡夫無智慧 爾時聖者大慧菩薩摩訶薩。	梨耶識如海 復說偈言	波浪轉對法 ⁵⁷	是故譬喻說
日出光等照 佛得究竟法 譬如海波浪 境界不具故 吾 ⁵⁹ 則以現見 布綵圖衆像 爲衆生說故 我得真實處 此爲佛子說 如是種種說 彼彼諸病人 妄想非境界	下中上衆生 何故不說實 鏡中像及夢 是故次第現 定中無如是 我說法亦爾 綺錯畫衆像 如實內身知 愚者異分別 隨事實不實 良醫隨處藥 聲聞亦非分	[524a] 如來出世間 若說真實者 俱時而得現 識者識所識 譬如巧畫師 綵 ⁶⁰ 色本無文 言說離真實 離覺所覺相 種種皆如幻 爲此人故說 如來爲衆生 諸如來世尊	爲凡夫說實 彼心無真實 ⁵⁸ 心境界亦然 意者然不然 及畫師弟子 非筆亦非器 真實離名字 解如實爲說 唯見非真實 於彼爲非說 唯心應器說 自覺境界說

〈実叉難陀〉

爾時世尊重說頌⁶¹言⁶²

譬如巨海浪 藏識海常住 青赤等諸色 意等七種識 譬如海水動 心意及意識 譬如海波浪 心能積集業	斯由猛風起 境界風所動 鹽貝乳石蜜 應知亦如是 種種波浪轉 為諸 ⁶³ 相故說 是則無差別 意能廣積集	洪波鼓溟壑 種種諸識浪 花果日月光 如海共波浪 藏識亦如是 八識無別相 諸識心如是 了別故名識	無有斷絕時 騰躍而轉生 非異非不異 心俱和合生 種種諸識生 無能相所相 ⁶⁴ 異亦不可得 對現境說五
--	---	--	--

爾時大慧菩薩摩訶薩以頌問曰

青赤諸色像	衆生識顯現	如浪種種法	云何願佛說
[595a] 爾時世尊以頌答曰			
青赤諸色像	浪中不可得	言心起衆相	開悟諸凡夫
而彼本無起	自心所取離	能取及所取	與彼波浪同

⁵⁷ 知 (宮).

⁵⁸ ins. 爾時世尊以偈答曰 (元)(明).

⁵⁹ 五 (三)(宮).

⁶⁰ 彩 (三)(宮).

⁶¹ 偈 (明).

⁶² 曰 (宮).

⁶³ 識 (元)(明).

⁶⁴ 知 (宮).

身資財安住 爾時大慧復說頌言	衆生識所現	是故見此起	與浪無差別
大海波浪性 爾時世尊以頌答曰	鼓躍可分別	藏識如是起	何故不覺知
阿賴耶如海 爾時大慧復說頌言 ⁶⁶	轉識同波浪	為凡夫無智 ⁶⁵	譬喻廣開演
譬如日光出 已能開示法 爾時世尊以頌答曰	上下等皆照 何不顯真實	世間燈亦然	應為愚說實
若說真實者 俱時而顯現 識以能了知 譬如工畫師 彩色中無文 言說則變異 真實自證處 此為佛子說 如是種種說 譬如衆病人 世間依怙者	彼心無真實 心境界亦然 意復意謂然 及畫師弟子 非筆亦非素 真實離文字 能所分別離 愚夫別開演 隨事而變異 良醫隨授藥 證智所行處	[595b] 譬如海波浪 境界不具故 五識了現境 布彩圖衆像 為悅衆生故 我所住實法 種種皆如幻 所說非所應 如來為衆生 外道非境界	鏡中像及夢 次第而轉生 無有定次第 我說亦如是 綺煥成衆像 為諸修行說 所見不可得 於彼為非說 隨心應量說 聲聞亦復然

⁶⁵ om. 無智 (宋).

⁶⁶ 曰 (元).

『楞伽經』第二章「一切法の集成」和訳

1 諸識の生起・存続・消滅

1.1 諸識の生起・存続・消滅の分類

[Nj37.6] さて、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた世尊に次のことを尋ねた。「世尊よ、諸識の生起(utpāda)・存続(sthiti)・消滅(nirodha)は何種類ありますか。」

世尊が仰せになった。マハーマティよ、諸識の生起と存続と消滅は二種類ある。しかし、論理家(tārkika)たちは理解しない。[二種類とは、]すなわち連続の消滅(prabandha-nirodha)と特徴の消滅(lakṣaṇa-nirodha)である。二種の諸識の生起は、連続の生起と特徴の生起である。二種の存続は、連続の存続と特徴の存続である。

1.2 転相と業相と真相

三種の識は、転相(pravṛtti-lakṣaṇa)と業相(karma-lakṣaṇa)と真相(jāti-lakṣaṇa)¹である。

1.3 現識と分別事識

マハーマティよ、八つの特徴によって説かれた識は、まとめると、二種類である。[二種類とは、すなわち]現識(khyāti-vijñāna)と分別事識(vastuprativikalpa-vijñāna)とである。

マハーマティよ、たとえば鏡の中に色の知覚が[現れる]ように、現識の中に[色の知覚が]現れるであろう。そして、マハーマティよ、現識と分別事識とのこの両者は区別された特徴をもたず、相互に原因となるものである。

マハーマティよ、その中で現識は不可思議なる潜在印象(vāsanā)の転変(pariṇāma)を原因とするものである。[Nj38] またマハーマティよ、分別事識は対象の分別を原因とするものであり、また無始時來の戲論の潜在印象(anādikālaprapañcavāsanā)を原因とするものである。

1.4 連続の消滅と特徴の消滅

マハーマティよ、その中で、すべての感官に基づく識(indriyavijñāna)の消滅が、すなわちアーラヤ識が虚妄分別の潜在印象によって多様なものになることの消滅であり、これが実に特徴の消滅である。

さらにマハーマティよ、連続の消滅はあるものより(yasmāt)生じる。マハーマティよ、「あるものより」というのは、「ある拠り所(yadāśraya)」によってと、「ある所縁(yadālabhana)」によってと[である]。その中で「ある拠り所」とは無始時來の重苦しい戲

¹ ここに挙げた訳語は 求那跋陀羅と実叉難陀との漢訳に基づく。菩提留支訳の場合は、「転相識」「業相識」「智相識」とする。菩提留支訳の元版には「智相識」の異読として「生相」を挙げている。

論の潜在印象 (anādikālaprapañcadauṣṭhulyavāsana) であり、「ある所縁」とは自心による見られるべきもの (svacittadrśya) という認識の対象 (vijñānaviṣaya) に対して諸々の分別することである。

1.5 転識とアーラヤ識との関係の比喻

たとえば、マハーマティよ、土の諸極微から土の塊は別でなく、非別でもないように、そのように金は[金で作られた]装飾品から[別でもないし、非別でもない]。

また、マハーマティよ、もし土の塊が土の諸極微から別であるとすれば、それら(諸極微)によって[土の塊は]作られるものでないであろう。しかし、それら土の諸極微によってそれ(土の塊)は作られるものである。それゆえに、[土の塊は土の諸極微と]別ではない。もし[その両者が]別でないとすれば、土の塊と[土の]極微との二つにおいて区別がないであろう。

1.6 転識とアーラヤ識との関係

マハーマティよ、まったく同じように、もし諸転識² (pravṛttivijñāna) がアーラヤ識である真相とは別であるとすれば、[諸転識は]アーラヤ識を原因とするものではないものになるであろう。もし[その両者が]別でないとすれば、転識の消滅がアーラヤ識の消滅になるであろう。しかし、それ(転識の消滅)は自分の真相の消滅 (svajātilakṣaṇanirodha) ではない。それゆえに、マハーマティよ、諸[転]識の自分の真相の消滅ではなく、[諸転識の]業相の消滅である。

また、自分の真相が消滅しつつあるとすれば、アーラヤ識の消滅があるのである。そして、もしアーラヤ識が [Nj39] 消滅しつつあるとすれば、この主張は外道の断滅論と区別のないものになるであろう。

マハーマティよ、外道たちのこの主張は、すなわち対象を把握することの停止から識の連続 (prabandha) の停止があり、識の連続の停止から無始時來の連続の断絶 (vyucchitti) があるであろう[ということである]。

1.7 外道の説く諸識の生起と消滅の原因

また、マハーマティよ、外道たちは原因より連続の生起を説き、[外道たちの説く]原因以外に眼識が色と光の集合 (samudaya) から生じるとは説かない。そして、マハーマティよ、[外道たちの主張する]原因とは、勝因 (pradhāna) ・ 人 (puruṣa) ・ 自在 (īśvara) ・ 時 (kāla)³ ・ 極微 (aṇu) をいうのである⁴。

² 安井 [1976: p.201] によれば、転識は七つである。

³ 村上 [1982: p.100] 参照。

⁴ LAS p.256.11 に同じ文句が見える。それを見れば、『楞伽經』においては、外道の説く原因として挙げるのは五つに決まっているように見受けられる。

2 諸存在の設定

2.1 七つの自性

さらに次に、マハーマティよ、七種の存在の自性(bhāvasvabhāva)がある。すなわち、(1) 集合(samudaya)の自性と(2) 存在(bhāva)の自性と(3) 特徴(lakṣaṇa)の自性と(4) 大種(mahābhūta)の自性と(5) 原因(hetu)の自性と(6) 条件(pratyaya)の自性と(7) 完成(niṣpatti)の自性ととの七つである。

2.2 七つの勝義

さらに次に、マハーマティよ、七種の勝義が[ある。]すなわち、(1) 心の領域(citta-gocara)と(2) 知の領域(jñāna-gocara)と(3) 般若の領域(prajñā-gocara)と(4) 二見論の領域(dṛṣṭidvaya-gocara)と(5) 二見論を超えた領域(dṛṣṭidvayātikrānta-gocara)と(6) [仏]子の地⁵に従う領域(sutabhūmyanukramaṇa-gocara)と(7) 如来の自内証の領域(pratyātmagati-gocara)とである。

2.3 如来は七つの自性と七つの勝義で諸存在を設定する

[Nj40] マハーマティよ、これが過去・未来・現在の如来たち・阿羅漢たち・正等覚者たちの存在の自性と勝義の核心(hṛdaya)である。存在の自性と勝義の核心を随伴した如来たちは聖なる般若の眼をもって自相(svalakṣaṇa)と共相(sāmānyalakṣaṇa)に陥たものたち⁶を世間と出世間最上の法に定立させる。また、[如来は]外道の学説である誤った見解をもつものと等しいものにならないように、そのように[如来は自相と共相に陥たものたちを世間と出世間最上の法に]定立させる。

2.4 諸存在の設定において外道の二見論との相違

マハーマティよ、どうして外道の学説である誤った見解をもつものと等しいものになるのか。すなわち諸識の自心を対象とする分別という見解を理解しないからである。マハーマティよ、自心による見られるべきもののみであるということに入らないことによって、愚かな人々(bālapṛthagjana)は存在・非存在という[事物の]本質が勝義であるという二見論者たちになるのである。

3 沙門・バラモンの断滅論と唯心説

3.1 主題提示

さらに次に、マハーマティよ、分別に基づく三有(bhavatraya)⁷の苦が止まること、無知

⁵ 安井 [1976: p.62] によれば, buddha が入っている.

⁶ 向井 [1972] 参照.

⁷ 三界のこと. 安井 [1976: p.160] 参照.

と渴愛と業との条件⁸が止まること、自心による見られるべきものが幻の[ような外界]対象であると見ることを、私は話そう。

3.2 沙門・バラモンの断滅論

マハーマティよ、もし信のある、沙門たち或はバラモンたちが、かつて存在しなくていま存在する⁹、原因より結果として¹⁰現れる実体(dravya)を時間において存在するものとし、また諸条件(無知と渴愛と業)において蘊・界・処の生起と存続とを認める。また、生じた後に滅する[と認める]なら、だれであっても、マハーマティよ、彼ら(沙門たち或はバラモンたち)は、相續(samtati)・作用・生・滅・生存(bhava)・涅槃・道・業・果・真実(satya)の破壊という断滅論者たちになる。¹¹[Nj41] なぜなら、これ(実体)は直接知覚の得られないことの始めを見ないことが存在しないからである。¹²

3.3 断滅論者になる理由

たとえば、マハーマティよ、壺の型の非存在は壺[を作る]という働きを為さないように、また、焼かれた種は芽[を吹く]という働きを為さないように、まったく同様に、マハーマティよ、蘊・界・処の諸存在はかつて滅して、いま滅しつつあり、滅するだろう。[かれらの説は]自心による見られるべきものに対する分別を見ることを原因としてもつものでないから、あいだをもたない(連続的な)生起(pravṛtti)がないであろう。

3.4 誤った識の生起説に対する批判

もしまた、マハーマティよ、[かつて]存在しなくて[いま]存在しているものである諸識の生起が、三つの集まりという条件と作用(諸識の生起)¹³との結びつき¹⁴によってあるとすれば、非存在[の生起]も[あるでだろう]。マハーマティよ、亀の毛という非存在の生起があるであろう。或は、砂から油の[生起があるであろう]。

マハーマティよ、[彼らの]主張命題(pratijñā)¹⁵が捨てられることと、確定的関係(niyama)¹⁶の消滅とが随伴される。なぜなら、存在と非存在を¹⁷説いている人にとって作用の目的と手段が無意味になるからである。

マハーマティよ、原因と結果とを特徴とすることによって、彼らの、三つの集まること

⁸ 久保田 [1999: p.6] 参照.

⁹ śraddhā は文脈上意味が分かり難い。漢訳とチベット訳によれば、‘有’‘sat’の可能性もあると考えられる。

¹⁰ 「原因より結果が生じる」と理解するのも可能である。

¹¹ LAS pp.96.14-97.1

¹² 直接知覚の非知覚とのこと。

¹³ 三つが何を指しているかが問題であるが、‘無知・渴愛・業’を意味していると考えられる。

¹⁴ 安井 [1976: p.200] 参照.

¹⁵ 数論の因中有果論, asat は作られない。

¹⁶ 村上 [1982: p.62] 参照.

¹⁷ 数論の因中有果論を前提にした教説の可能性もある。

という条件と作用の結びつきという教説がある。論理の段階に留まっている人々は、(1) 道理 (yukti) と教証 (āgama) によって、(2) 自分の見解の過失 (doṣa) の潜在印象であることによって、過去と未来と現在の存在・非存在の特徴があることを説き示すであろう。

このようにして、マハーマティよ、誤った見解に噛みつかれたもので、乱れた考えをもつものである愚かな人々は、無知者 (ajñā) によって導かれたもの (pranīta) を一切智者によって導かれたものであるというであろう。

3.5 外界対象は唯心である

また、マハーマティよ、[Nj42] 無自性である雲・火の輪・ガンダルバの町 (蜃気楼) と、不生である幻・光・水に [映った] 月・夢のような外界 [対象] を、心において見られるべきものに対する分別によるものであり、無始時來の戲論によるものであると見ることによって、自心に対する分別という条件 [による生起] と消滅を離れたものであり、分別された (parikalpita) 能詮と定義の対象 (lakṣya) と定義 (lakṣaṇa) と所詮とを離れたものである他の沙門・バラモンが、身体・享受・場所としての現われるアーヤ識であり¹⁸、対象や所取 (grāhya) と能取 (grāhaka) を離れたものであり、無相 (nirābhāsa) の対象領域であり、生起・存続・消滅を離れたものであり、自心の生起にしたがうものであると見なすなら、マハーマティよ、遠からず彼ら菩薩・摩訶薩は輪廻と涅槃との等しいことを得るであろう。

3.6 唯心による如幻三昧の獲得

マハーマティよ、大悲・巧みな方便・無巧用に到達したことによって、実践 (prayoga) によって、すべての衆生が幻や影像に等しいものであることによって、害されていない条件であることによって、内外の対象から自由になったことによって、心の外を見ないことによって、無相の力 (animittādhiṣṭhāna) を具えたものたちは、順次に段階 (bhūmi) の順番の三昧の対象に従うことによって、三界に属するものは自心による幻のようなものであるという信解 (adhimukti) に基づいて考えながら如幻三昧を得る。

3.7 唯心による如来身の獲得

自心が無相 (nirābhāsa) のみであることに入ることによって、般若波羅蜜に住することを得た、生起と作用との結合を離れた彼ら菩薩たちは、マハーマティよ、(1) 如来身を随伴した金剛の姿のような三昧 (金剛喩定) と、(2) 真如の変化を随伴した、力と神通と自在と慈悲と方便で飾られた、すべての仏国と外道の処とに入った、[Nj43] 心・意・意識を離れた、転依 (parāvṛtṭyāśraya) の順次である如来身とを得るであろう。

それゆえ、マハーマティよ、如来身に随伴するものを得た菩薩・摩訶薩たちは、蘊・界・処が心という原因と [無知・渴愛・業という] 条件の作用との結びつきによって生起・存続・

¹⁸ 写本 T3,T7 によれば、dehabhogapratīṣṭhābham ālayavijñānam と読むべきであろう。

消滅する¹⁹との分別の戯論を離れるべきであり、唯心に従うべきである。

三有を無始時來の戯論の重苦しい分別の潜在印象を原因とするものとして見ている人、すなわち無相の仏地において不生を想起することによって自内証の聖なる法を獲得した (gatiṅgata)、自心に自在である無巧用の活動 (caryā) を獲得した、すべての色をもつマニ宝のような人は、微細に衆生の心の中に入る変化身によって、唯心であると確定することによって、地の段階に順番正しく定立させる。それゆえ、マハーマティよ、菩薩・摩訶薩は自分の定説に巧みでなければならない。

4 心・意・意識

4.1 主題提示—心・意・意識・五法・[三]自性

さらにまた、マハーマティは尋ねた。「世尊よ、心・意・意識・五法・[三]自性を特徴とする蓮華の[ような]法門であり、仏と菩薩とが従って行ったものであり、自心による見られるべきものの領域 (gocara) を離れるものであり、すべての解説 (bhāṣya) であり、道理 (yukti) による真実 (tattva) の特徴を破壊する、一切の仏の言葉の核心 (buddhapravacanahr̥daya) を示してください。ランカーという町のマラヤ山に滞在している菩薩たちに対して、海の波[のようなもの]である [Nj44] アーラヤ識の領域、すなわち如来によって歌われた法身 (dharmakāya) を説いてください。」

4.2 心・意・意識

4.2.1 眼識の生起の四つの原因

さて、世尊はまた、マハーマティ菩薩摩訶薩に次のことを仰せになった。マハーマティよ、四つの原因によって眼識が生じる。どういう四つによって[生ずるの]か。すなわち、(1) [眼識自分が]自心による見られるべきものを[外界対象として]把捉することを理解しないことから、(2) 無始時來の戯論の重苦しい性質 (rūpa) の潜在印象に対する執着から、(3) 識の本性という自性 (prakṛtisvabhāva) から、(4) 種々なる色の特徴に対する関心から[生ずるのである]。

4.2.2 アーラヤ識から転識が生じる

マハーマティよ、これらの四つの原因によって、瀑流 (ogha) の中の水に位置づけられるべきものであるアーラヤ識から転識という波が生じる。マハーマティよ、例えば眼識のように、そのように[諸識は]すべての感覚器官と毛穴の[ような多数の]極微[からなるもの]において[対象を認識する]、同時に生じる[或は]順次に[生じる]対象を鏡[に映る]影像と

¹⁹ 安井 [1976: p.200] 参照.

して見るように²⁰。

マハーマティよ、[転識は]海にとって風に吹かれたもののように、対象という風によって心という海の[上に起こった]波のようなものであり、断たれていない原因の作用 (kriyā) を特徴とするものであり、同異を離れたものであり、業・真相と完全にくっ付いているものである。

4.2.3 五識と意識

マハーマティよ、色の本質 (svabhāva) を確定的に理解するものでない五識身が生じる。マハーマティよ、まさにその五つの識身を伴って、原因である対象の区分 (pariccheda) を特徴とするものであり、確定するものであると名づけられる意識が、それ(五識身)を原因とする身体 (sarīra) として生じる。彼ら(五識)にも、彼(意識)にも、このように[考えることは]ない。「我々はここで相互に原因であり、自心による見られるべきものに対する分別に基づく執着から生じるものである」と。或はまた、相互に区別されないこと (abhinna) を特徴とするものたちが認識を起こさせるもの (vijñapti) である対象の区分 (pariccheda) において生じる。

4.2.4 諸識の消滅に対するヨーギンの誤った考え

[Nj45] すでに入定したヨーギンにとってさえも、微細な状態 (gati) の潜在印象として生じたもの (pravṛtta) が知られないように、そのように[諸識は]常に生じ続けている。また、このようにヨーギンたちの[考えが]ある。「諸識を消滅してから我々は入定する」と。しかし彼らは消滅していない諸識を伴って入定する。[諸識は]潜在印象の種子 (bija) が滅していない[という側面]から滅していないものであり、対象として生じたものを把握することを欠いている[という側面]から[諸識は]滅したものである。

4.2.5 アーラヤ識の微細な活動

マハーマティよ、そのように、アーラヤ識の趣の活動 (gatipracāra) は微細である。なぜなら、如来を除いて、[十]地に立っている菩薩たちを除いて、他の声聞・独覚・外道のヨーガを行うものたちによって理解されることができない。或は、[彼らが]三昧と般若との力をもっているからとしても[区別して]確定することはできない。地の特徴・般若・知 (jñāna) に対して巧みであることと、様々な句 (pada) についての確定と、勝者について無限の善根を蓄積することと、自心による見られるべきものに対する分別の戯論を離れたものたちを除いて、マハーマティよ、深い森と洞窟に行ったものたちによって、劣った優れたヨーガを行うものたちによって、自心に対する分別による見られるべきものの流れ (dhārā) を見ることはできない。

²⁰ ここは、「同時に生じる [或は] 順次に [生じる] 対象を鏡 [に映る影像] の本体 (bimba) として見るように。」という訳も考えられる。

4.2.6 輪廻の克服

[善友と勝者を伴った人²¹によって、]限りない[仏]国の勝者による力自在[に対する灌頂]のような灌頂と[初地の大乗光明という]三昧とが得られる²²。マハーマティよ、善友と勝者を伴った人²³によって、心・意・[意]識であり、自心による見られるべきものを本質とする対象に対する分別²⁴によって[生じる]輪廻という生存状態 (bhava) としての海である、無知と渴愛と業を原因とするもの²⁵を渡ることができる。したがって、この理由から、マハーマティよ、ヨーギンによって善友と勝者との同伴において [Nj46] ヨーガが実行されるべきである。

5 偈頌

さて、世尊がその終りに、これらのガーターを仰せになった。

実に、風という条件によって動かされる海の諸波は /
舞いながら生じている。断絶がないように。 // 99 //

そのように、アーラヤの暴流は常に対象という風によって動かされたものであり、/
波のような種々の識を伴って舞いながら生じている。 // 100 //

青において、赤において、あるいは塩が貝において、また牛乳が砂糖菓子において /
香しい木の実と花などを伴って、光線が太陽において。 // 101 //

別のものでなく、また、非別でもないものとして諸波が海にとって考えられるよう
に、 /

七識はそのように心とともに結びついてものである。 // 102 //

海の転変 (pariṇāma) というこれは諸波の多様な状態である。 /

実に、そのように、識という現われをもつアーラヤ識は多様に生じる。 // 103 //

心と意と識は特徴づけのために設定される。 /

実に、区別されない特徴をもつ八つは特徴づけられるもの (lakṣya) でなく、[その八
つに設定された特徴づけは]特徴づけ (lakṣaṇa) でない。 // 104 //

海にとっては諸波の区別がないように、 /

そのように、心において諸識の転変 (pariṇāma) は得られない。 // 105 //

心によって業が蓄積される。また、意によって区別される (vicīyate)。 /

[意]識によって認識する。五[識]によって見られるべきものを分別する。 // 106 //

²¹ 荒牧 [1974: p.32, p.59] 参照.

²² 安井 [1976: p.90] 参照.

²³ 荒牧 [1974: p.32, p.59] 参照.

²⁴ この分別は自心所現である対象を、誤って外界に存在する実在といての対象として捉えることを意味している.

²⁵ 三有とは三界のことである.

[Nj47] 実に、人々にとって青と赤という種類の識が現われる。/
 どうしてか、マハーマティよ、波のもつ性質と心のもつ性質との共通性を語ってください。// 107 //

実に、青と赤という種類は波においては存在しない。/
 しかし、心において働き(vṛtti)が説かれる。なぜなら、定義づけのため、愚かなもののため。// 108 //

その働きは存在しない。自心は取られるもの(grāhya)を離れたものであり、/
 取られるものがある時、実に把握が[ある]。波と一緒に成立する。// 109 //

身体・享受・場所である人々の識が顕現する。/
 それゆえ、この働きは波と似ているもののように見られる。// 110 //

海は波という状態として舞いながら現われる。/
 そのように、アーラヤ識の働きがどうして知によって理解されないのか。// 111 //

愚かな人々が知を欠いているから、実に、アーラヤ識は海のようなものである。/
 波と識の働きとの類似していることが海の例示によって導かれる。// 112 //

劣った、優れた人に対しての[太陽の昇りの]ように、太陽が昇る。/
 そのように、世間を照らすあなたは真実を愚かな人々に示す[はずなのに]。// 113 //

[Nj48] 諸法について設定(avasthāna)してからどうして真実を説かないのか。/
 もし真実を説くならば、真実は心の中に存在しない。// 114 //

海にとって波のように、鏡と夢の中に[対象が]一緒に見られるように /
 そのように、心が自己の対象領域として[見られる]。// 115 //

心に諸対象が欠けているから²⁶、[心が]順次に働くことによって[七識が]生じる。/
 識によって知り、意によって思い、さらに、// 116 //

五つの見られるべきものが顕現する。三昧に入った人に順次[の生起]がない。/
 絵の先生が、或は、ある絵の弟子もまた、// 117 //

絵のために用いる色彩を[示す]。実にそのように、私は示す。 /
 絵の具の中に絵はない。板の中に[も]ない。また、器の中に[も]ない。// 118 //

人々を引きつけるために色彩によって絵は識別される。/
 また、説示は[真実から]逸脱しているものである。真実は文字を排除したものである。// 119 //

諸法について設定してから私は真実をヨーギンに示す。 /
 真実は自分で理解するもの(pratyātmagatika)で、分別するものと分別されるものを離れたものである。// 120 //

私は勝者の子たちにとって示す。これは愚かなものの[ための]説示でない。²⁷
 実に多様に幻は見られるが、しかし[幻は]存在しないように。// 121 //

²⁶ 偈頌 117 の「三昧に入った人に順次 [の生起] がない」につながると考えられる。

²⁷ 偈頌 122 の「なぜなら、ある人には説示であるが、他の人には説示でない。」につながると考えられる。

[Nj49] そのように、多様に説示も示されるが、[真実から]逸脱するものである。/
なぜなら、ある人には説示であるが、他の人には説示でない。// 122 //

病人ごとに適切な薬を与えるように、/
実にそのように、諸仏陀は衆生たち(菩薩摩訶薩)に唯心を説く。// 123 //

論理家たちにとって[唯心は説明の]対象でない。声聞たちにとっても決して[唯心は説明の対象で]ない。/
[唯心は]師匠(nātha)たちが自分で理解すべき対象領域として示すものである。// 124 //

略号

- AS *Abhidharmasamuccaya*, P. Pradhan ed, Visva-Bharati Series 12, Patna : Santiniketan, 1950.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya*, N. Tatia ed, Tibetan Sanskrit Works Series No. 17, Patna : K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan ed., Tibetan Sanskrit Works Series Vol.VIII, Patna : K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967, 1st ed.
- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Franklin Edgerton, Yale Univ. Press., 1953. (rep., Kyoto : Rinsen Book Co., 1985)
- D The Tibetan Tripiṭaka, The Sde dge Edition.
- DBhS *Daśabhūtikasūtra*, Johannes Rahder ed., Leuven : J. B. IATAS, 1926.
- LAS *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Bunyiu Nanjio ed., Bibliotheca Otaniensis Vol.1, Kyoto : Otani University Press, 1923.
- MAV *Madhyāntavibhāga*, see MAVBh.
- MAVBh *Madhyāntavibhāgabhāṣya*, A Buddhist Philosophical Treatise Edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript, G. Nagao ed., Tokyo : Suzuki Research Foundation, 1964.
- MAVṬ *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati), Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda, Tome I : Texte, S. Yamaguchi ed., Nagoya : Librairie Hajinnkaku, 1934. (repr., Tokyo : Suzuki Research Foundation, 1966)
- MS *Mahāyānasamgraha*, see 長尾雅人 [1982] [1987].
- MSA *Mahāyānasūtrālaṅkāra*, Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule, Selon le Système Yogācāra, Tome I : Texte, Bibliothèque de l'École des Hautes Études Fascicule 159, Sylvain Lévi ed., Paris : Librairie Honoré Champion, 1907. (Rep., Rinsen Buddhist Text Series IV-1, Kyoto : Rinsen Book Co., 1983)
- MSAṬ *Mahāyānasūtrālaṅkāraṭīkā*, D No.4029, P No.5530.
- NGMPP Nepal-German Manuscript Preservation Project.
- Nj see LAS.
- P The Tibetan Tripiṭaka, The Peking Edition.
- RGV *The Ratnagoṭravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra*, E. H. Johnson ed., Patna : The Bihar Research Society, 1950. (in, The Uttarantra of Maitreya, H. S. Prasad, Bibliotheca Indo-Buddhica Series No.79, Delhi : Sri Satguru Publications, 1991)
- SAVBh *Sūtrālaṅkāravṛttibhāṣya*, D No.4034, P No.5531.
- SNS *Samdhinirmocanasūtra*, L'Explication des Mistères, É. Lamotte ed., Louvain and

- Paris : Université de Louvain, 1935.
- Triṃś *Triṃśikā Vijñaptimātratāsiddhi*; see VMS.
- TrBh *Triṃśikāvijñaptibhāṣya*, see VMS
- TSN *Trisvabhāvanirdeśa*, see 山口益 [1972].
- Vimś *Vimśatikā Vijñaptimātratāsiddhi*; see VMS.
- VMS *Vijñaptimātratāsiddhi*, Deux Traités de Vasubandhu, *Vimśatikā* (La Vingtaine) et *Triṃśikā* (La Trentaine), 1re Partie : Texte, Bibliothèque de l'École des Hautes Études Fascicule 245, S. Lévi ed., Paris : Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925. (repr., Shanghai, 1940)
- YBh The *Yogācārabhūmi* of Ācārya Asaṅga, The Sanskrit Text Compared with the Tibetan Version Part I, V. Bhattacharya ed., Calcutta : University of Calcutta, 1957.

参考文献

荒牧典俊

- [1974] 『大乘仏典8 十地経』 東京：中央公論社.
- [1976] 「唯識三十論」『大乘仏典15 世親論集』 東京：中央公論社, 31-190.
- [2002] 「弥勒論書における「虚妄分別」の起源について」『佛教學セミナー』 75, 1-28.

泉 芳璟

- [1930] 「梵文入楞伽經に見えたる一百八句」『荻原博士還暦記念祝賀論文集（第一・邦文部）』 21-36. (再版, 東京：山喜房仏書林, 1972)

伊藤瑞叡

- [1985] 「『十地経』および『十地経論』における心識説と縁起観」『平川彰博士古稀記念論集 仏教思想の諸問題』 東京：春秋社, 159-175.

上山大峻

- [1990] 『敦煌佛教の研究』 京都：法藏館.

海野孝憲

- [2002] 『インド後期唯識思想の研究』 東京：山喜房佛書林.

小川弘貫

- [1961] 「楞伽經に於ける如來藏思想」『印度學佛教學研究』 9-1, 213-216.

沖 和史

- [1977] 「ラトナーカラシャーンティの有形象説批判」『印度學佛教學研究』 25-2, 940-937.

小谷信千代

- [1984a] 『大乘莊嚴経論の研究』 京都：文栄堂書店.
- [1984b] 「L.シュミットハウゼン「阿毘達磨集論の見道規定とそのチベット註釈（特にプトンの註釈に関して）」」『佛教學セミナー』 40, 67-74.
- [1986] 『アーラヤ識とマナ識の研究 ―クンシ・カンテル―』 ツルティム・ケサン／小谷信千代共譯, 京都：文栄堂.
- [1991] 「シュミットハウゼン著『アーラヤ識論』ノート」『大谷學報』 70-3, 1-18.

- [1995] 「五停心觀の成立過程 — 釈尊の「法思想」の真意を求めて—」『大谷大學研究年報』46, 47–100.
- [2001] 「唯識思想における意識とことば」『佛教學セミナー』73, 1–24.
- [2002] 「唯識思想はなぜ「ことば」を重視するか」『大谷學報』81-1, 1–17.

香川孝雄

- [1972] 「『勝鬘經』における煩惱説の成立」『惠谷先生古希記念 浄土教の思想と文化』京都：仏教大学, 1045–1065.

梶山雄一

- [1976] 「唯識二十論」『大乘仏典15 世親論集』東京：中央公論社, 5–30.

片野道雄

- [1975] 『唯識思想の研究 — 無性造『撰大乘論註』所知相章の解説』京都：文栄堂書店.

勝又俊教

- [1951] 「如來藏思想の發達に就いての一考察」『宇井伯壽博士還曆記念論文集 印度哲學と佛教の諸問題』東京：岩波書店, 143–161.
- [1956] 「心意識説の原意及びその發達 — 意識体験の区分法に留意して—」『東洋大学紀要』8, 23–34.
- [1961] 『佛教における心識説の研究』東京：山喜房佛書林.

加藤精神

- [1925] 「成唯識論」『國譯一切經 瑜伽部七』東京：大東出版社, 1–258.

加藤純章

- [1989] 『經量部の研究』東京：春秋社.

神谷麻俊

- [1972] 「入楞伽經「ラーヴァナの請い」の和訳」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』6, 161–149.
- [1973a] 「入楞伽經の自証聖智 — 集一切法品中心—」『印度學佛教學研究』21-2, 665–666.
- [1973b] 「入楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳（1）」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』7, 12–23.
- [1974a] 「入楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳（2）」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』8, 11–20.
- [1974b] 「入楞伽經の心 (citta) — 集一切法品中心—」『駒澤大學佛教學部論集』5, 162–153.

- [1975a] 「楞伽經の「心」の一考察 一集一切法品中心一」 『印度學佛教學研究』 23-2, 736-739.
- [1975b] 「楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳(3)」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 7, 152-143.
- [1976] 「楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳(4)」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 8, 162-155.
- [1977a] 「楞伽經のDharmaとBhāva」 『印度學佛教學研究』 25-2, 654-655.
- [1977b] 「楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳(5)」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 9, 219-211.
- [1978] 「楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳(6)」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 10, 250-243.
- [1979] 「楞伽經「三万六千の一切法の収集」の章の和訳(7)」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 11, 323-315.

菅 英尚

- [1977] 「Some problems in the Laṅkāvatārasūtra (1)」 『印度學佛教學研究』 25-2, 980-978.
- [1980a] 「『楞伽經』における〈√jñā〉の類語」 (共同研究：佛教の体系と展相の研究) 『龍谷大学佛教文化研究所紀要』 19, 34-42.
- [1980b] 「『楞伽經』における唯心」 『印度學佛教學研究』 29-1, 282-285.

久保田力

- [1984] 「『楞伽經』の形態的成立史論 一内部構造と原型への視点一」 『論集』 11, 67-96.
- [1985] 「楞伽經の構造と成立史への疑問」 『印度學佛教學研究』 33-2, 559-560.
- [1987] 「『楞伽經』「無常品」末諸節の構成について 一成立史的資料として一」 『印度學佛教學研究』 35-2, 551-554.
- [1989a] 「如來藏＝ア－ラヤ識説の成立根拠 一悟りの原理と迷いの原理の自己同一性一」 『日本佛教学會年報』 54, 89-107.
- [1989b] 「楞伽經依用の最初の論師達 一「偈頌品」成立に関連して一」 『文化』 52-3・4, 147-178.
- [1990] 「マナス(意)とトリックスター性(I) 一マナ識と道化一」 『仏教学』 29, 25-48.
- [1991] 「マナ識と楞伽經」 『印度學佛教學研究』 39-2, 869-873.
- [1998a] 「マナスのトリックスター性(II) 一意生身の系譜と『楞伽經』一」 『東北芸術工科大学紀要』 5, 15-69.
- [1998b] 「生という汚れ 一意生身と不可思議変易生死一」 『印度學佛教學研究』 47-1, 122-127.

古賀英彦

[1974] 「刹那消滅説の体用論的構成 —三世実有説の一側面—」『禪文化研究所紀要』
6, 51-66.

[2000] 「楞伽經の如来蔵説と大乘起信論」『禪文化研究所紀要』25, 29-56.

[2001] 「楞伽經管見」『禪學研究』80, 239-262.

合田秀行

[2004] 「『入楞伽經』の十地説に関する一考察」『精神科学』42, 1-14.

坂本幸男

[1953] 「心性論展開の一断面」『印佛研』2-1, 20-29.

佐久間秀範

[2002] 「中国・日本法相教学における識と智の結合関係 —封印された第六識→成所作
智、五現識→妙觀察智の正当性」『木村清孝博士還暦記念論集 東アジア仏教 —
その成立と展開』東京：春秋社, 65-86.

桜部 建

[1974] 「迦葉品」『大乘仏典9 宝積部經典』長尾雅人・桜部建訳, 東京：中央公論社,
5-124.

[1983] 「L.シュミットハウゼン「初期仏教における“智”と“覚”についての叙述あるい
は理論の諸相について」」『佛教學セミナー』38, 61-69.

佐々木容道

[1994] 「自内証としての見」『禪文化研究所紀要』20, 71-100.

清水要晃

[1976a] 「楞伽經の如来蔵思想について —特に「刹那品」を中心にして—」『大崎学報』
128, 111-125.

[1976b] 「入楞伽經の識の三相説について —如来蔵とアーラヤ識の同視をめぐって—」
『印度學佛教學研究』25-1, 162-163.

[1980] 「『入楞伽經』宋訳の「各別種性」について」『印度學佛教學研究』28-2, 670-671.

菅沼 晃

[1965] 「入楞伽經における「不生」の意味について」『宗教研究』38-2 (181), 79-81.

[1966] 「入楞伽經における自内聖智の意義」『宗教研究』40-2 (189), 43-66.

[1967a] 「The Five Dharmas in the Lañkāvatārasūtra」『印度學佛教學研究』15-2, 963-956.

[1967b] 「入楞伽經如来常無常品の註釈的研究 —入楞伽經本文研究の試み—」『東洋学

研究』2, 39-47.

- [1968a] 「中期大乘經典における人間観の一考察 —とくに入楞伽經を中心に—」『日本佛教学會年報』33, 108-120.
- [1968b] 「入楞伽經における唯心説について」『印度學佛教學研究』16-2, 636-640.
- [1969] 「入楞伽經刹那品の原典研究」『東洋大学紀要』文学部篇 23, 39-57.
- [1970a] 「入楞伽經における dharmanaya について」『印度學佛教學研究』18-2, 568-573.
- [1970b] 「五法説の研究 —とくに瑜伽師地論・顯揚聖教論・中辺分別論等を中心に—」『東洋大学紀要』文学部篇 24, 31-47.
- [1971] 「入楞伽經における五法説の研究」『東洋学研究』5, 203-221.
- [1972] 「入楞伽經の不立文字論」『東洋大学紀要』文学部篇 25, 33-65.
- [1974] 「入楞伽經の如來藏説について」『印度學佛教學研究』22-2, 622-629.
- [1975] 「入楞伽經研究ノート (一)(二)(三)」『三藏集』第二輯, 東京: 大東出版社, 149-170. (初出, 經集部第六卷月報三藏 56-58, 1972)
- [1976] 「入楞伽經の如來藏論」『東洋大学大学院紀要』13, 67-96.
- [1977a] 「入楞伽經の唯心論」『東洋学研究』11, 63-82.
- [1977b] 「入楞伽經三万六千一切法集品訳註 (一)」『東洋学論叢』2, 91-193.
- [1978a] 「入楞伽經三万六千一切法集品訳註 (二)」『東洋学研究』12, 123-130.
- [1978b] 「入楞伽經三万六千一切法集品訳註 (三)」『東洋学論叢』3, 87-172.
- [1981a] 「入楞伽經 無常性品・現觀品・如來常無常品・變化品訳註」『東洋学論叢』6, 1-134.
- [1981b] 「チベットにおけるインド仏教と中国仏教との対論」『仏教思想史4 <仏教内部における対論> 中国・チベット』, 175-208.

勝呂信静

- [1978] 「アーラヤ識説の形成 (一)(二) —マナ識との関係を中心に—」『三藏集』第四輯, 東京: 大東出版社, 127-142. (初出, 瑜伽部第一卷月報三藏 136-137, 1977)
- [1983] 「アーラヤ識説と唯識無境」『佛教學』16, 1-27.
- [1989] 『初期唯識思想の研究』東京: 春秋社.

鈴木大拙

- [1930] *Studies in the Lankavatara Sutra*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- [1932] *The Lankavatara Sutra: A Mahayana Text: Translated for the first time from the original Sanskrit*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- [1934] *An Index to the Lankavatara Sutra (Nanjio Edition)*, Kyoto: The Sanskrit Buddhist Texts Publishing Society.
- [1968a] 「楞伽經研究序論」『鈴木大拙全集 第五卷』東京: 岩波書店, 509-558. (初出, 『日本佛教學協會年報』第三年, 1931)

[1968b] 「楞伽經」『鈴木大拙全集 第五卷』東京：岩波書店, 457–507. (初出, 『日本宗教講座』東方書院, 1934)

鈴木隆泰

[1997] 「楞伽經」『大乘經典解説事典』勝崎裕彦・小峰弥彦・下田正弘・渡辺章悟編著, 東京：北辰堂, 317–319.

高垣忠司

[1969] 「入楞伽經第八章についての二、三の問題」『仏教学会報』2, 29–34.

高崎直道

[1974] 『如来蔵思想の形成 —インド大乘仏教思想研究—』東京：春秋社.

[1975] 『大乘仏典12 如来蔵系經典』東京：中央公論社.

[1976a] 「入楞伽經の唯識説 —“Deha-bhoga-pratiṣṭhābhaṃ Vijñānam”の用例をめぐって—」『佛教學』1, 1–26.

[1976b] 「『四卷楞伽』の訳文の問題点」『奥田慈應先生喜寿記念 仏教思想論集』京都：平楽寺書店, 959–972.

[1977] 「入楞伽經の意図するもの —「変化品第七」考—」『印度學佛教學研究』26-1, 111–118.

[1978] “Some Problems of the Tibetan Translations from Chinese Material”, *Proceedings of the Csoma de Kőrös Memorial Symposium, Bibliotheca Orientalis Hungarica* Vol. XXIII, Akadémiai Kaidó : Budapest, 459–467.

[1980] 『佛典講座17 楞伽經』東京：大蔵出版.

[1981a] *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-sūtra Kṣaṇika-Parivarta*, Tokyo : Private Publishing.

[1981b] 「The concept of *manas* in the *Laṅkāvatāra*」『印度學佛教學研究』29-2, 970–977.

[1981c] 「『入楞伽經』のマナス（意）について」『古田紹欽博士古稀記念論集 仏教の歴史的展開に見る諸形態』東京：創文社, 75–89.

[1982] “Sources of the *Laṅkāvatāra* and It’s Position in Mahāyāna Buddhism”, *Indological and Buddhist Studies: Volume in Honour of Professor J.W.de Jong on his Sixtieth Birthday*, 545–568, Canberra : Faculty of Asian Studies.

[1985a] 「アーラヤ識と縁起 —執受 *upādāna* との関連—」『平川彰博士古稀記念論集 仏教思想の諸問題』東京：春秋社, 33–53.

[1985b] 「『楞伽經』の外教説 —提婆造『外道小乘涅槃論』との関連」『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』京都：平楽寺書店, 215–232.

[1986] 「起信論研究の問題点 —実叉難陀訳の性格をめぐって—」『印度學佛教學研究』35-1, 1–10.

- [1988] 『如来蔵思想 I』 京都：法蔵館。
 [1989a] 『如来蔵思想 II』 京都：法蔵館。
 [1989b] 『インド古典叢書 宝性論』 東京：講談社。
 [1992] 『唯識入門』 東京：春秋社。
 [1993] 「魏訳『入楞伽經』の「如実修行」と『起信論』」『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅—仏教と科学』 東京：佼成出版社, 223–238。
 [1996] 「<無始時來の界>再考」『勝呂信静博士古稀記念論文集』 東京：山喜房佛書林, 41–59。

武内紹晃

- [1979] 『瑜伽行唯識学の研究』 京都：百華苑。

竹村牧男

- [1978] 「鈴木大拙と『楞伽經研究』」『現代のエスプリ』 133, 157–173。
 [1985] 『唯識の構造』 東京：春秋社。
 [1992] 『唯識の探究 『唯識三十頌』を読む』 東京：春秋社。
 [1995] 『唯識三性説の研究』 東京：春秋社。

谷川泰教

- [1973] 「入楞伽經に見られる引用文について」『印度學佛教學研究』 21-2, 663–664。
 [1974a] 「入楞伽經における無記について」『印度學佛教學研究』 22-2, 913–917。
 [1974b] 「入楞伽經研究ノート」『仏教学会報』 6, 53–66。

鄭 有植

- [2006] 「『楞伽經』における分別事識」『印度學佛教學研究』 54-2, pp.(28)–(31)。
 [2007] 「『楞伽經』におけるkhyātivijñāna」『印度學佛教學研究』 55-2, pp.(71)–(74)。
 [2008] 「『楞伽經』における「三つの相」」『印度學佛教學研究』 56-2, pp.(154)–(157)。

辻本俊朗

- [1994] 「ランカーヴァターラ・スートラにみられるローカーヤタ派」『印度學佛教學研究』 43-1, 446–444。
 [1997] 「*Laṅkāvatārasūtra* における Lokāyata 批判」『印度學佛教學研究』 46-1, 443–441。

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著

- [1990] 『梵語仏典の研究III 論書篇』 京都：平楽寺書店。

常盤義伸

- [1973] 「起信論の六染心」『禪文化研究所紀要』5, 1-19.
- [1975] 「The “信不及” (Shin Fugyu) As Expounded in the Lankavatara」『印度學佛教學研究』24-1, 513-508.
- [1976] 「ランカー・アヴァターラ・スートラ 第二章（その一）」『禪文化研究所紀要』8, 135-157.
- [1977] 「‘svacittamātra’ The Basic Standpoint of the *Laṅkāvatāra Sūtra*」『印度學佛教學研究』26-1, 473-478.
- [1978] 「The *Laṅkāvatāra Sūtra* Criticizes the Sāṃkhya Thought」『印度學佛教學研究』27-1, 478-482.
- [1979] 「仏教経典『ランカーに入る』のサーンクヤ説批判」『花園大学研究紀要』10, 117-146.
- [1980a] 「如来蔵法門ということ」『禪文化研究所紀要』12, 1-25.
- [1980b] 「svacittam : The Basic Standpoint of the *Laṅkāvatāra Sūtra* (continued)」『印度學佛教學研究』29-1, 477-482.
- [1981a] 「大乘の経『ランカーに入る』第二章の一基礎研究」『花園大学研究紀要』12, 25-57.
- [1981b] 「The Tathāgata Entering the Womb (Garbha)」『印度學佛教學研究』30-1, 507-503.
- [1986a] 「如来の深い思い」『禅学研究』65, 1-27.
- [1986b] 「Deep Thought as the Functioning of Awakening —*tāthāgataṃ dhyānam*—」『印度學佛教學研究』35-1, 483-477.
- [1991] 「The Historical Significance of the Opening Chapter *Rāvaṇādhyeṣaṇā* of the *Laṅkāvatāra Sūtra*」『印度學佛教學研究』40-1, 500-506.
- [1992] 「『入楞伽経』序章の歴史的意義」『花園大学研究紀要』24, 23-47.
- [1994a] 「大乘起信論の和合識」『禪文化研究所紀要』20, 23-41.
- [1994b] 「The Pañcānantaryāṇi of the *Laṅkāvatāra Sūtra*」『印度學佛教學研究』43-1, 503-509.
- [1994c] 『研究報告（第二冊）『ランカーに入る』—梵文入楞伽経の全訳と研究—（分冊一 本文・研究, 分冊二 註）』京都：花園大學國際禪學研究所.
- [1995] 「The *manomayakāya* of the *Laṅkāvatāra Mahāyānasūtra*」『印度學佛教學研究』44-1, 475-471
- [2000] 「宝経『ランカーに入る』の主旨」『禪文化研究所紀要』25, 1-28.
- [2003] 『『ランカーに入る』大乘の思想と実践の宝経—復元梵文の日本語訳注と解説—』（『楞伽宝経四卷本の研究』梵英日漢4冊一部 日本文), 大阪：常盤義伸.

長尾雅人

- [1974] 「迦葉品」『大乘仏典9 宝積部経典』長尾雅人・桜部建訳, 東京：中央公論社, 5-124.
- [1976a] 「三性論」『大乘仏典15 世親論集』東京：中央公論社, 191-213.

[1976b] 「中辺分別論」『大乘仏典15 世親論集』東京：中央公論社, 215–358.

[1982] 『インド古典叢書 撰大乘論 和訳と注解 上』東京：春秋社.

[1987] 『インド古典叢書 撰大乘論 和訳と注解 下』東京：春秋社.

南條文雄

[1923] 『梵文入楞伽經』京都：大谷大學. (*The Laṅkāvatāra Sūtra*, Bibliotheca Otaniensis Vol.1, Kyoto : Otani University Press)

[1927] 『邦譯梵文入楞伽經』泉芳璟共訳, 南條先生古稀記念祝賀會.

袴谷憲昭

[1982] 「瑜伽行派の文献」『講座・大乘仏教8 唯識思想』東京：春秋社, 43–76.

[2001] 『唯識思想論考』東京：大蔵出版.

[2008] 「bhoga-nimitta考」『唯識文献研究』東京：大蔵出版, 419–426. (初出, 『印度學佛教學研究』28-1, 1979, 438–433.)

羽田野伯猷

[1974] 「ジュニャーナ・シュリー・バドラ著『聖入楞伽經註』おぼえがき『まなさろわら』1, 6–34. (再録, 『チベット・インド学集成 第四巻 インド篇 II』京都：法藏館, 1988, 100–121)

早島 理

[1977] 「ラトナーカラシャーンティの善行道 —Prajñāpāramitopadeśaにおける—」『印度學佛教學研究』25-2, 944–941.

原田和宗

[1999] 「『唯識二十論』ノート (1) —そのテキスト校訂と解釈学上の諸問題—」『佛教文化』9, 101–131.

[2000] 「『唯識二十論』ノート (2)」『九州龍谷短期大学紀要』46, 173–189.

[2003] 「『唯識二十論』ノート (3)」『九州龍谷短期大学紀要』49, 131–188.

兵藤一夫

[1982] 「「心 (citta)」の語義解釈 —特にヴァスバンドゥの立場を中心にして—」『佛教學セミナー』36, 21–39.

[1991] 「三性説における唯識無境の意義 (2)」『大谷學報』70-4, 1–23.

[1995] 「瑜伽行と唯識説 —入無相方便の確立—」『大谷大學研究年報』47, 1–53.

[2010] 『初期唯識思想の研究 —唯識無境と三性説—』京都：文栄堂.

平川 彰

- [1953] 「説一切有部の認識論」『北海道大學文學部紀要』 2, 3-19.
- [1968] 『初期大乘佛教の研究』 東京：春秋社.
- [1974] 『インド仏教史（上）』 東京：春秋社.
- [1979a] 『インド仏教史（下）』 東京：春秋社.
- [1979b] 「阿梨耶識と阿頼耶識」『佛教學』 8, 1-19.

藤 隆生

- [1964] 「楞伽經における一・二の問題 —如来藏唯識説の考証—」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』 3, 153-156.

舟橋尚哉

- [1971a] 「八識思想の成立について —楞伽經の成立年時をめぐって—」『佛教學セミナー』 13, 40-50.
- [1971b] 「世親と楞伽經との前後論について」『印度學佛教學研究』 20-1, 321-326.
- [1972] 「五法と三性について」『印度學佛教學研究』 21-1, 371-376.
- [1976] 『初期唯識思想の研究 —その成立過程をめぐって—』 東京：国書刊行会.

本多 恵

- [1980] 『サーンキヤ哲学研究 上』 東京：春秋社.
- [1981] 『サーンキヤ哲学研究 下』 東京：春秋社.

松浦秀光

- [1939] 「成唯識論所引の厚巖楞伽二經の出拠に就いて」『支那仏教史学』 3-2, 86-91.

松田和信

- [1981] 「Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī について —無分別智と後得智の典拠として—」『佛教學セミナー』 34, 39-49.
- [1982a] 「Yogācārabhūmi-vyākhyā におけるアーラヤ識とマナスの教証について」『印佛研』 30-2, 667-668.
- [1982b] 「『分別縁起初勝法門經 (Avvs) 』—經量部世親の縁起説—」『佛教學セミナー』 36, 40-70.
- [1982c] 「世親『縁起經釈 (PSVy) 』におけるアーラヤ識の定義」『印佛研』 31-1, 423-420.
- [1984a] 「Vasubandhu 研究ノート (1)」『印佛研』 32-2, 1042-1039.
- [1984b] 「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」『佛教學セミナー』 39, 96-81.
- [1985] 「Vyākhyāyukti の二諦説 —Vasubandhu 研究ノート (2) —」『印佛研』 33-2, 756-750.

[1996a] 「Nirvikalpapraveśadhāraṇī —梵文テキストと和訳—」『佛教大学総合研究所紀要』3, 89–113.

[1996b] 「Nirvikalpapraveśa 再考 —特に『法法性分別論』との関係について—」『印佛研』45-1, 369–363.

神子上恵生

[1965] 「瑜伽師地論に於ける種子の問題」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』4, 118–121.

光川豊芸

[1994] 「「如幻三昧」とその周辺」『佛教學研究』50, 31–63.

宮本献璽

[1971] 「入楞伽經における「唯心」」『印度學佛教學研究』19-2, 858–861.

村上真完

[1978] 『サーンクヤ哲学研究 —インド哲学における自我観—』東京：春秋社.

[1982] 『サーラ叢書27 サーンクヤの哲学 —インドの二元論—』京都：平楽寺書店.

[1991] 『インド哲学概論』京都：平楽寺書店.

室寺義仁

[1987] 「アーラヤ識の存在論証について —post Dharmakīrti—」『印佛研』36-1, 363–356.

[1993] 「ヴァスバンドゥによるアーラヤ識概念の受容とその応用」『高野山大学論叢』28, 23–59.

[2000] 「ヴァスバンドゥによる「識」理解 —『五蘊論』を中心として—」『加藤純章還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』東京：春秋社, 167–180.

安井広済

[1972] 「入楞伽經にあらわれる識の学説について」『大谷學報』52-2, 1–15.

[1974] 「入楞伽經にあらわれる人法二無我の教説について」『佛教學セミナー』19, 11–25.

[1976] 『梵文和訳 入楞伽經』京都：法蔵館.

山口 益

[1934] *Sthiramati, Madhyāntavibhāgaṭīkā, Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda* Tome I-Texte, Nagoya : Librairie Hajinnkaku. (repr., Tokyo : Suzuki Research Foundation, 1966)

[1935] 『安慧阿遮梨耶造 中邊分別論釋疏』名古屋：破塵閣書房. (複刊, 東京：鈴木学

術財団, 1966)

- [1937] 『漢藏對照 辯中邊論 一附・中邊分別論釋疏梵本索引』名古屋：破塵閣書房。(複刊, 東京：鈴木學術財団, 1966)
- [1972] 『山口益仏教学文集 上』東京：春秋社.
- [1973] 『山口益仏教学文集 下』東京：春秋社.

山田龍城

- [1959] 『大乘佛教成立論序説』京都：平樂寺書店.

横山紘一

- [1979] 『サーラ叢書23 唯識の哲学』京都：平樂寺書店.

渡邊照宏

- [1977] 「Adhiṣṭhāna (加持) の文献学的試論」『成田山仏教研究所紀要』2, 1-91.

龍谷大学佛教文化研究所編

- [1990] 『龍谷大学善本叢書9 梵文佛典写本聚英』井ノ口泰淳責任編集, 京都：法藏館.

Forsten, Aucke D.

- [2006] *Between Certainty and Finitude, A Study of Laṅkāvatārasūtra Chapter Two*, Berlin : LIT Verlag.

Lindtner, Christian

- [1992] “The Laṅkāvatārasūtra in Early Indian Madhyamaka Literature”, *Asiatische Studien / Études Asiatiques* XLVI-1, Numéro Special Offert en Hommage à Jacques May, 244-279.

Prasad, H. S.

- [1991] *The Uttaratantra of Maitreya*, Bibliotheca Indo-Buddhica Series No.79, Delhi : Sri Satguru Publications.

Schmithausen, Lambert

- [1987] *Ālayavijñāna, On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*, Part I : Text, Part II : Notes • Bibliography and Indices, Studia Philologica Buddhica Monograph Series IV, Tokyo : The International Institute for Buddhist Studies.
- [1992] “A Note on Vasubandhu and the Laṅkāvatārasūtra”, *Asiatische Studien / Études*

Asiatiques XLVI-1, Numéro Special Offert en Hommage à Jacques May, 392–397.

Vaidya, P. L.

[1963] *Saddharmalaṅkāvatārasūtra*, Buddhist Sanskrit Texts No.3, Darbhanga : The Mithila Institute.